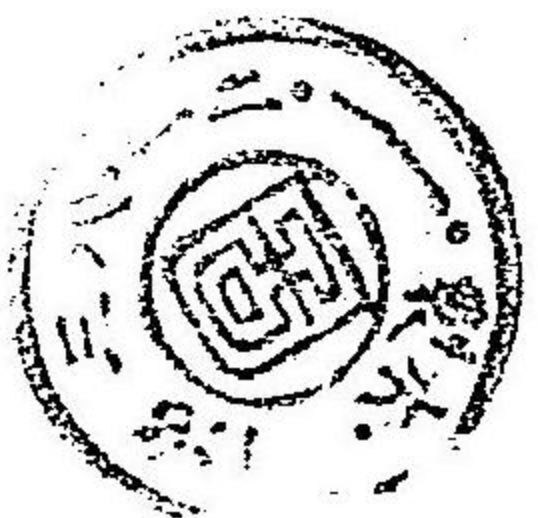


文學士久保得二述



支那文學史



早稻田大學出版部藏版

稿本支那文學史の首に書す

予が早稻田大學の依囑に應じ、支那文學史を講ずること、こゝに二回。本篇は前稿を基礎とし、しかも、大に刪補するところあり、章數は四十を増し、頁數は五十を加へぬ。然れども、なほ限束さるゝところありて、予が從來研究の結果を敘述し盡し得ざるを憾む。

六朝より唐に至るまでの間、佛典の翻譯及びその影響の如き、こゝには、殆んど記述するところなし。東亞文獻の九大散亡及び印刷術の發明進歩の如き、はじめ必ず略説を挿入せむと欲せしも、餘白なきを以て、省略に従へり。元の雜劇、明清の小説等、予が研究、未だ全からずと雖も、領得せしもの、固より此に限れるに非ず。之を要するに、本篇は講義録所載の稿本として、その性質上、實は梗概に過ぎず、讀者之に頼りて、幸に指示を得、自ら研究の歩武を進められむこと、切望に堪へず。予も亦た之を以て、自己の生命となし、愈よ努力して、研鑽を積み、他日少くとも、量に於て本篇に三倍せる一撰著を出すの日あらむを期し、豫め之を諸君に約すに憚らざるなり。

坊間二三の撰述あるも、之を一概して、詳略その當を得ず、葫蘆依樣、全く憑據するに足らず、唯だ東西前賢の論述、たとひ備はらずと雖も、なほ大に可とすべきものあり。その研究法に就いては、手數ば諸雜誌に於て公示するところあり、こゝ贅せず。

龍年七月城北の寓に於て

講述者識

支那文學史 目次

序論

- (一) その研究の必要と方法……………一
- (二) 支那文學一般の特質……………四
- (三) 時期の區劃……………一

第一期 上古文學

第一 三代文學

- (一) 北方文化の發展……………一五
- (二) 支那文字の起原とその構成方法……………二二
- (三) 三大古典……………三三
- (四) 易……………三六
- (五) 書……………四一

(六) 詩……………五〇

第二 周末文學

(一) 周末の社會狀勢……………五九

(二) 諸學派の興起……………六三

(三) 周末文學の地理的考察……………六七

(上)

(四) 孔子とその文學上の見解……………六九

(五) 孔門の著述……………七三

(六) 孟子……………七九

(七) 荀子……………八六

(八) 春秋及び三傳……………九九

(九) 左傳……………一〇九

(一〇) 國語……………一一二

(一一) 北方思潮の餘派……………一一六

(中)

(一二) 南方の天然と南人の性格……………一一九

(一三) 老子……………一二三

(一四) 列子……………一三二

(一五) 莊子……………一三九

(一六) 南方思潮の餘派……………一五〇

(一七) 屈原……………一五四

(一八) 宋玉等……………一六〇

(下)

(一九) 中部思潮の起原……………一六三

(二〇) 管子……………一六七

(二一) 管仲以後中部思潮の分派……………一七四

(二二) 韓非子……………一七六

(二三) 戰國策……………一八八

四

(三四) その他の諸子及び雑書……………一九五

(三五) 呂氏春秋……………二〇二

(三六) 李斯……………二〇七

(三七) 思想活動の終局……………二〇九

第二期 中古文學

第一 兩漢文學

(一) 漢代思想界の趨勢……………二一一

(二) 陸賈……………二一八

(三) 賈誼……………二二〇

(四) 賈山及び晁錯……………二二六

(五) 枚乘及び鄒陽……………二二九

(六) 司馬相如……………二三四

(七) その他の賦家……………二四四

(八) 淮南王安……………二四九

(九) 司馬遷……………二五三

(一〇) 董仲舒及び劉向父子……………二六四

(一一) 王褒……………二七一

(一二) 揚雄……………二八〇

(一三) 兩漢間の文士……………二八三

(一四) 班固……………二九二

(一五) 班固以後の文士……………二九八

(一六) 東漢の諸子者流……………三〇八

(一七) 漢詩の三大特徴……………三一三

(一八) 五七言の興起……………三一六

(一九) 詩歌音律關係の變遷……………三二二

(二〇) 漢代詩想の趨向……………三三〇

(二一) 漢詩の價值及び略評……………三三三

(二二) 小説の發展……………三三九

第二 魏晉文學

(一) 魏晉の厭世思潮……………三四五

(二) 武帝父子……………三五二

(三) 曹植……………三五六

(四) 鄴下の諸子……………三六二

(五) 八代文章の衰……………三六八

(六) 魏晉間の古作家……………三七二

(七) 阮籍と嵇康……………三七七

(八) 張傅潘陸の諸家……………三八〇

(九) 東晉の三詩傑……………三八七

(一〇) 陶淵明……………三九一

第三 六朝文學

(一) 佛敎の影響……………三九七

第三期 中世文學

第一 唐代文學

(一) 文學隆盛の理因……………四二一

(二) 近體の創定……………四二四

(三)	初唐の四傑……………	四二七
(四)	陳子昂……………	四三一
(五)	沈宋二家……………	四三三
(六)	初唐の諸家……………	四三六
(七)	李白……………	四三八
(八)	杜甫……………	四四二
(九)	王維及び盛唐諸家……………	四四七
(一〇)	劉長卿及び大曆十才子……………	四五〇
(一一)	韓愈の詩及び其門下……………	四五二
(一二)	白居易及び元稹……………	四五五
(一三)	中唐の諸家……………	四五九
(一四)	三十六體……………	四六〇
(一五)	晩唐の諸家……………	四六二
(一六)	韓偓……………	四六三

(一七)	釋道暉秀の詩人……………	四六五
(一八)	韓柳以前文章の三變……………	四六六
(一九)	韓愈……………	四六七
(二〇)	柳宗元……………	四七〇
(二一)	韓柳以外の古文家……………	四七三
(二二)	唐代の小説……………	四七四
(二三)	詞の發展……………	四七五

第二 宋代文學

(一)	その學風と影響……………	四七七
(二)	宋初の文……………	四八二
(三)	宋初の詩……………	四八四
(四)	宋初の詞……………	四八九
(五)	歐陽修……………	四九一
(六)	蘇洵……………	四九五

(七)	蘇軾	四九七
(八)	蘇轍	五〇七
(九)	曾王二家	五〇九
(一〇)	蘇門及び其他の諸家	五一二
(一一)	南宋の詞	五一五
(一二)	南宋の文	五一八
(一三)	南宋の詩	五二〇
(一四)	詩論の勃興	五二二
(一五)	陸游	五二五
(一六)	宋末の諸家	五二七
(一七)	小説戯曲の氣運	五二九

第四期 近世文學

第一 金元文學

(一)	朔漢文運の消長	五三一
(二)	金朝の諸家	五三四
(三)	元好問	五三五
(四)	詞曲の關係	五三八
(五)	雜劇	五四二
(六)	西廂記	五四五
(七)	琵琶記	五四九
(八)	水滸傳と三國志	五五四
(九)	元代の諸家	五六一
(一〇)	楊維禎	五六三

第二 明代文學

(一)	復古の氣運	五六五
(二)	明初の諸家	五六九
(三)	高啓	五七二

(四)	青邱同時の諸家	五七六
(五)	臺閣體	五七九
(六)	李東陽	五八〇
(七)	李何七子	五八二
(八)	李王七子	五八五
(九)	七子の反抗者	五八九
(一〇)	明末の諸家	五九三
(一一)	湯顯祖	五九四
(一二)	西遊記と金瓶梅	五九七
第三 清代文學		
(一)	考證學風の起原及び影響	六〇〇
(二)	清初の文家	六〇五
(三)	錢吳二家	六〇九
(四)	王朱施宋及び其他の諸家	六一四

(五)	金聖嘆	六二二
(六)	李漁	六二六
(七)	桃花扇と長生殿	六二九
(八)	紅樓夢と兒女英雄傳	六三二
(九)	桐城派と陽湖派	六三五
(一〇)	乾隆三家	六三七
(一一)	乾隆嘉慶間の詩人	六四四
(一二)	傳奇小説の一斑	六四六
(一三)	最近文界の趨勢	六四八

(通計——一五三章)

目次

支那文學史

序論

(一) その研究の必要と方法

文學士 久保 天 隨 述

現今坤輿の文化は、その初、三處より發達したるものなり。曰く印度、曰く歐羅巴、曰く支那。この三者が相並びて、世界人文史上に鼎峙の勢を爲せること、今復た贅せず。或は相互の間に價值の比較をなし、支那の文化を以て最も下れりとなし、殆んど度外視して、復た顧みざるものあり。まことに、支那の文化は、源泉頗る遠きに在りて、而かも水量に乏しき一支流の如きものならむ。然れども、世界人口の三分の一、四億餘萬の生靈、その餘澤を受けて、今日生活しつゝあるを見れば、その人種に特有なる文化發展の跡を討究尋繹すること、固より無用の閑事に非ざるべし。

光明は東方より生ずといへり。げにや、日の陽谷より出づると同じく、人類文化の

始源地は、すべて東方に在りき。現時最も其盛を誇るに足るべき歐羅巴の文化も、實は之をセム・ハムの兩人種に承けて、潤色を加へしに過ぎず。獨り奈かむ、この兩人種の衰滅は、印度に比して、尙ほ早かりしを、奇なるかな。種族の運命、その地、愈よ東すれば、その壽愈よ長からむとす。かくの如くして、極東に在りて最も長壽なるツラン人種唯一の代表者たる漢族の獨創的文化を研究するは、誠に、興趣に乏しからざるを豫想し得べきに非ずや。然り而して、予輩が之を唱導する所以のものは、ひとり一片の好奇心より出でしに非ずして、實に至大の必要あるが故なるを忘るべからず。上に述べし三種の文化は、將來に於て、果して融合調和さるべきものなりや否や、これ實に緊要なる大問題なり。然れども、予輩は之を考察するに先ち、過去の歴史的關係に就いて、仔細に領知するところ無くむば、あらず。現時歐西の學者、多大の困難に逢着するを辭せず、専心一意、東亞文獻の研究に従事するもの多きは、如上の理由に本づき、すでに必要を感じしが上に、好奇の念、愈よ之を助成せしが故に外ならず。予は、わが同胞が、往々にして、新に即き舊を忘るゝ陋劣の心情を學藝の上に、及ぼし、その便宜なる位置を棄て、却つて豎子の名を爲さしむるの愚を感じること淺からず。寶山前に在り、舉手投足の勞を吝しむもの、豈に之に似ずと謂はむや。

文學及び文學史の何者たるかは、こゝに縷述せず。願くは唯だ記清せよ、或る國民の文學史は、その國民特有の文學に就いて、起源變遷及び發達の跡を科學的に敘述するものを、凡そ國民は、個人と同じく、必ずや、他と截然異りたる思想あり、感情あり、想像あり、以て精神的生活をなし、種々現實の行爲に、その動機を附與す。されば外界客觀の變化、即ち歷史上動靜起伏の事蹟を尋踪するとも、内界主觀の發達に就いて探究せざるもの、未だ一國民の實相を盡くしたりといふべからず。これが故に東亞ツラン人種の文化を熟知せむとするものは、自然の勢、先ず指を支那の文學史に染めざるべからず。且つ夫れ、精神的生活は、種々の形象をなし、哲學、宗教及び藝術の上に、表彰さるべきものにして、文學は所詮藝術の一分科に過ぎずと雖も、最も普遍的なるが故に、國民情操過程の一半は、容易に、こゝに説示さるべきなり。文學史の研究、豈に徒爾ならむや。

文學は言ふに及ばず、あらゆる藝術は内容と形式との調諧を以て、最上乘となす。兩者固より輕重の別を設くべきに非ず。予は内容の探究を以て、國民理想の極致を

闡明すると同時に、形式の變遷を討査し、好尚即ち藝術的趣味に就いて、察知するところ無くむばあらず、前者は社會進歩の結果にして、心理的表象の基礎とも呼ぶべきものなるが故に、主として社會學、心理學の補助を借りて、之が研鑽を著くべく、後者は美學、修辭學の規矩に因つて、評量するべきなり、あるが中にも、文學史の研究は、宜しく細心精緻なるべし、且つ簡淨明晰を極めむが爲に、精確なる論理的斷定と、公正なる批判的態度とを遺却すべからず、かの區々として、文士の傳記と書籍の解題とを臚列し、その繁富冗雜を誇示し、自ら以て文學史の能事畢れりとなすもの、僭に非ざれば陋、雜に非ざれば妄、予輩固より與するを欲せざるなり。

(二) 支那文學一般の特質

こゝに予輩が研究の對象とせる支那文學は、果して價值あるものなりや否や、上下茫茫四千載、謂ゆる秦火楚炬以下、凡そ八九回の大災厄を経たりしと雖も、頽殘の餘、その文獻の今に存するもの、猶ほ四庫に堆積し、汗牛充棟、殆んど其譬をなすに足らず、要するに、支那文學は、その壽、最も長きが故に、その量に於ては、たしかに宇内に冠絶したるものなるべし、翻つて、その質に於ては、果して如何。

這般の問題は、實に予輩が研究を完了せし後に於て、はじめて解釋するべきものなれども、こゝに、便宜上、豫め結論を提供し、普通の歴史的知識を以て推究し得べき簡明なる一條の概論を著くるを得む。

支那文學は、その質に於ても、之を世界の或る文學に比しては、必ずしも遜色を認めず、世界文學史上に若干頁を占領するに足るべしとはいへ、現今日新の歐西文學に比しては、如何に之を辯護するも、固より相若くこと能はざるが如し、他なし、保守精神と形式主義とに控縛せられ、多くの場合に於て、主として教訓的旨意を標榜し、自由なる感情の發露を認許せず、時に淺薄卑近に失するの弊あればなり、而して、その理因の一半は、漢族の性格を考察して、容易に知了すべきなり。

支那の太古史は、茫邈殆んど考ふべからず、然れども、最も信據すべき現時の定説に因れば、その初、裏海の南岸に居住せしものにして、その本宗たる最始のツラン人種が、パピロニヤの故地に於て、スキユタイ帝國に建設せしと前後して、東方に移動し、現存せる老帝國の基礎を定めしといふ、本支の別は、小異と、もに大同を意味す、之を頃る發見されしパピロニヤの古代建築に見るに、最始のツラン人種は、資性勤

勉にして、善く教法を循守し、平和を樂み、戰鬪を以て非開明的行爲となし、また特に工藝に鍊熟せしを信ぜしむ。而して、その體格は、長大ならずして精悍、頭髮漆の如く眼光射るが如し。こは、現存せる北部の支那人、即ち純粹の漢族に於ても、亦た觀るべきところにして、彼等が、人種的特質として、根本的に實際的傾向を有せしこと、殆んど疑を挾むの餘地なからむとす。凡そ實際的といふは、あくまで、現實に固着するの謂に外ならず。試に彼等がその祖先を語るを聞け。有史以前、興趣に富める幾多の事實を想化する能はざりしに非ずや。彼等は、心神を空想の靈域に馳するの餘裕なく、理想の人格に精靈を附與するよりも、厚生利用の實地的生活に關する事物發明の起原を口に傳へ、その恩徳を感謝する外、一事なかりしなり。三皇の事、明かに之を證す。かくの如くして、支那の神話は、全くその傳を失ひ、その精神的產物は、印度、希臘に見たる如き標型的發達を爲さざりき。その詳は、之を後章に譲り、こゝに、予は、さなきだに實際的なるを免れざりしツラン人種の一派たる漢族が、その搖籃たる黃河附近の苛酷なる天然に化せられ、愈よその特色を明晰にせしを斷言せむとす。

彼等固より想像あり、然れども、徃々にして、却つて荒唐に流れ、美的要素を欠き散

漫にして統率すべからず、遂に純化し難きを奈かむともするなし。彼等固より迷信あり、然れども、一切未來を翹望せず、究竟の理想界を確然認知せざりしが故に、嚴正なる意義に於ける宗教の發達なし。彼等固より思索的能力あり、然れども、現世の事物に直接の關係なきものを排斥するが故に、純然たる形而上學を有せず。かくの如くして、彼等の腦力より出でしものは、すべて現實に依傍して開展し、その文學も、亦た實用を主としたり。故を以て教訓的なり。源泉以て下流を知るべくむば、復た特に嗽々するを要せざるべきなり。

すてに之を實際的といふ、理想に乏しきや、言を俟たず、何に因つてか、真正の進歩あるを得む。若し幸に之ありとせむか、偶然の結果に非ざれば、他の勢力、之を促がせしのみ、斷じて意識的に自ら堂堂の步趨を以てせしものに非ず。それ此の如し。而して、排他心と自尊心との之を幫助するあり、その結果は知るべきのみ。彼等は、その建國の當時、天然力に抗敵するの外、異種族に對して激烈なる争鬪をなし、幾多の困難と苦楚とに克ち、やがて天賦の威力を深く自覺するや、如上兩種、内外の作用となれりき。然れども、この強盛なる精神も、亦た徃々にして起伏あるを免れず、排他の極は、

異種族に對する嫌惡となり、自尊の失敗は、運命を疑ひ神靈を怨むの痛苦となる。この兩者は、常に熱血を沸かしめ、また痛涙を迸らしむ。支那文學が慷慨激楚の聲に滿つるもの、主として之に本づく。加ふるに、支那は革命の國なり。内亂外寇、しばらくも歇まず、四千年の長歴史は、腥血の痕を以て點ぜられ、愈よ之を激成せしを見るべし。排他自尊の情は、一方に於て、保守の氣風を養成せしめ、崇古の念を確立せしむ。而して、家長制度より發展したる社會組織は、明かに之を證す。家長制度は、元と牢固なる團結力の結果にして、その膨脹するや、遂に三代の封建制度を馴致せり。若し之を疑はば、先づ姓氏の起原を討查せよ。春秋戰國より秦の統一に至るまで、數百年の大紛亂は、この封建を瓦壞して郡縣に變ぜしめしと雖も、從來の社會組織は、その根柢に於て毫も搖動せず、むしろ冷縮して却つて硬固となれりしの觀あり。漢族の倫理教は、すべて家長制度を本として發達し、尊卑上下の別、儼然動かす可らず、道德の極致は、差等ある愛、即ち仁にして、情緒の自由なる發動を認許せず。その鍛鍊の久しき、延いて精神作用に及ぼし、之をして、必ず一定の規矩に循從せしめずむば止まず。こゝに於てか、その文學は、往々にして保守的となり、擬古的となり、やがて又形式的となり、虚飾的となれりき。

支那文學の特質否、その通弊は、之を概括して、上に述べたるが如く、實際的なり、教訓的なり、保守的なり、擬古的なり、形式的なり、虚飾的なり、その他は、皆これより類推すべし。故を以て、構想よりも、措辭に意を致せし形跡あり、往々にして一定の模型中に鑄造されし看あるは、亦た怪しむに足らず。かくの如くして、固定的なり、従つて貴族的なり。歴史の感化は、之をして慷慨激楚ならしめ、天然の影響は、之をして雄大豪壯ならしむるに有力なりしと雖も、翻つて又誇張輕佻に陥らしむるを免れず。こゝに於てか、その謂ゆる文士なるもの、多數は、實際に於ける一個の修辭家たるに過ぎざりき。

支那文學本來の特質、すでに此の如く、且つ之を助長したる諸種の原因中、殊に彰著にして、且つ考察を値するものは、外國思想感化の絶無と、象形文字の影響と是れなり。今夫れ、一泓の池水、全く淤泥に滿ち、濁黄汚穢を極むと雖も、清泉絶えず流れて之に注げば、久うして自ら淨化さるべし。由來漢族は前に一言せしが如く、排他自尊の感情に滿ちたるが故に、外國と交通すべき機會少からざりしに係らず、之を逸し

て顧みず、况んや、四方の境界、山海の險難、尤も甚しきに於てをや。支那文學は純然たる漢族の思想に外ならず、その除外例としては、唯だ佛教の感化あるのみ。若し夫れ象形文字の影響に至りては、更に甚しきものあり。第一には、言語の變化を迅速にせざりしが故に、愈よ擬古に對して便宜を與へ、第二には、その使用の不便なるが爲に簡淨を以て唯一の能事となし、翻つて粗大誇張の趣を添へしめき。この關係は因果联接して、頗る明晰の度を増し、四千歳を経たる今日に至りて、依然その痕跡を存するを見るなり。

これを要するに、支那文學は、その内容に於て、千篇一律の諂を免れ得ざるべしと雖も、少くとも形式に於ては、正に其變を極め盡したるが如し。凡そ物の完全は、人力の庶幾すべしと、ところに非ず。文學に於て、内容形式の兩者、決して輕重すべからざる以上、かの多くの外國文學、時に或は構想の一邊に傾くもの、固より取るべくむば、假りに數歩を譲り、支那文學をして、徹頭徹尾、形式に徧せしむるも、豈に俄に唾して棄つべけむや。况んや、幾分特殊の思想、隱然その間に搖曳起伏するに於てをや。あゝ予は怯者ならむのみ、こゝに全然その價值を否定するの大英斷と大早計とをなす能

はず。かの松を見ずや、絶澗の上、泥土に乏しき巖面に硬着し、烈風嚴霜に携められつゝ猶ほ且つ生長し、勁節千年を經、奇姿舞ふが如き看を呈するに非ずや。予は、漢族がかばかりの性格を以て、かばかり不利益の地位に在りしに拘らず、善く世界文學上に、多少の貢獻を爲し得べきを見て、人類の情操は、如何なる勢力を以てするも、到底之を抑遏するを得ず、之に加ふるに、文學は國民の遊戲的衝動を満足せしめ、能く消憂暢思を爲し、その生命を蘇息せしむるに有効なるを確知せずむば、あらざるなり。

(三) 時期の區劃

支那文學は實用的にして、且つ貴族的なるを以て、政治上の氣運と極めて緊密なる關係を有し、歴代の賢君明主と稱せらるゝもの、大抵文學の保護者たるを期せざるなし。その中、或は個人的嗜好より出でしものあらむと雖も、實は政略上より然りしものゝ如し。かくの如くして、各時代に特有の文學あり、相並んで、ともに終始するを常とす。曰く三代、曰く兩漢、曰く魏晉、曰く六朝、曰く唐宋元明清、皆然らざるなし。たと便宜上、大勢の轉向する處を觀察して、之を區劃すれば、大約左の四期に分ち得べきが如し。

第一期、上古文學 太古より秦に至るまでの間、實に支那文學の起原といふべきものなり。その中、夏殷周三代、北方の文化は、詩書易に就いて見るべく、未だ個人的思想を發洩せし特殊の文學的作品を有せずと雖も、民族全體の精神的な生活は、個中に在りて、容易に探究さるべし。之に次いで、周末に及びては、封建制度の瓦解となり、海内の諸侯割據して互に其雄を競ひ、腕力の争は、延いて智力の闘となり、思想界に自由の活動を誘起し、各自の人種的差異と地理的影響と歴史の感化とによりて、種々の異思想を構成したり。かくの如くして、國民文學の基礎は確立し、その最後に於ては、將に技工的文學に入らむとするの傾向を表現したりき。更に之れを地域に就いて分説すれば、はじめに唐虞三代より引き續いて鄒魯に入りし北方思想と、春秋戰國の間、荆楚に勃興せし南方思想とあり。この二大思潮は、混々として迸流し、兩者の間には中部思潮あり、その會流の結果、秦に入りて西方文學となり、天下統一圖國の大勢に従つて、時に或は融合の機會に遭遇せり。予は講述の便を謀り、之を分つて三代文學、周末文學の二となし、前者に於ては、支那文學の萌芽時代を論究し、後者に於ては、諸種異分子の發展と分派とを探尋せむとす。

第二期、中古文學 漢初より隋末にいたる、この時代は、獨立思想の欠亡を以て、その特徴となし、諸種の文學、すべて技工的なり。かくの如く、内容よりも形式を重ぜし極、散文律語、ともに體裁備はりて、觀るべきもの、亦た少からず。殊にこの時代に於て注意すべきは、老莊思想の流行と佛教思想の輸入となり。予は假りに分つて、兩漢文學、魏晉文學、六朝文學の三となさむ。

第三期、中世文學 唐より宋にいたる、この時代は、支那文學の黄金時代にして、唐の詩、宋の文は、尋常口頭の語として、その價值の公認、復た異論あるべからず。この時代の後半に於ては、佛教思想の影響に促進せられ、之と從來固有の思想とを調和し、新に哲理的思索の勃興するあり、思想界は、正に波瀾の最高潮に到達したり。予は之を唐代文學、宋代文學の二者に小分すべし。

第四期、近世文學 元より現代の清にいたる、この時代は、政治上に於ける異人種の勢力非常にして、因襲的思想、緊縛解除の機會に逢着せしこと數ばなりき。故を以て、一般思想界、表面の趨勢は、前代を繼承し、特に見るべきものなく、硬文學は漸く衰運に向ひしと雖も、俗文學、即ち戯曲小説は、代つて其地を占め、前諸期に缺亡

せるものを補ひ、文學の類別、漸く完備するを得たり。予は之を元代文學、明代文學、清代文學に三分すべし。

第一期 上古文學

第一 三代文學

(一) 北方文化の發展

さきに支那文學一般の特質を概観するに際し、漢族を以て、實際的人種なりと論斷せり。然れども支那の地たるや、古來南北風氣の異あり、北人に至りては、實際的人種中の又特に實際的なるものなり。今夫れ、上古三代の文學は、北方特有の思想にして、後世に大影響を及ぼし、最も明晰に國民的特色を發揮せしものなるが故に、予輩は北人の性格に對して最初の研究を著け、三代文學の根柢に就いて預知するところ無くむばあらず。その中、特に注意すべきは北人が天に對する觀念なり。

他國と均しく、支那上古にも、祭天の風習あり、天を神靈視したるを見るべし。そも祭天の因つて生ずる所以は社會發達一般の通則にして、社會學及び宗教學に於て、遺憾なく論證さるべきが故に、予はこゝに岐路に入りて辭を費すの必要を見ず。蓋し漢族は明晰なる宗教心を缺きしと雖も、之に類似する拜自然的思想より、亦た自

ら此に向ひしものならむ、唯だ天に對する觀念の他と頗る異なるものあるは特に注意を値するに足るを疑はず、凡そ各國民に特有なる宗教觀の互に相異なる所以は、その信仰せる神靈の性質を異にするに起因し、次に神靈の性質の各異なれりといふ理因を探究するに至りては、予竊に バックル 氏の論ぜしところ、之を圍繞する山川風物の異なるに本づくといふを以て、最も當を得たりと信ず。されば予輩は先づ北方の天然が、原始の漢族に如何なる影響を與へしかを考究せざるべからず。漢族は、元と不幸なる種族なりき。おもふに、彼等が、其初、中央亞細亞の高原を横絶し、先づ北方に轉じ、アルタイ 及び タウル 兩山脈の間を通ずる峽路をたどり、浩浩たる黄河の流に循ひ、次第に東向し、その急に北折するところ、北緯四十度乃至四十五度の地域に至りて駐り、遂に現存する老帝國の基礎を定めしに至るまでの間、推移變動の異常なるは、いふまでもなく、實際に於て、少からざる困難を経験せしなるべし。憐れむべきこの種族が、かくの如くして、其居を定めしは、實に止むを得ざりしに出でしなりき。かの非文明人種なる苗族と當時なほ野蠻蒙昧の域を脱し得ざりし交趾支那族とは、今の支那本部の曠土に散在し、彼等は、その進行の路を妨礙された

り、歸らむか困苦艱難を極むる移動約大旅行を再びするに堪へず。こゝに於てか、自ら忍んで、之を以て満足せざるべからざるの否運に陥れり。試に其地の天然に就いて一考せよ、これを地質上よりいへば、第四世紀層の水成岩なり。その風物は、飽くまで、荒寒洪大、その地味は豊沃ならざるに非ざるも、時に水害あるを免れず。曠野平林、極目千里、隴畝種ゆるものは高粱の一種のみ。天は蒼々として四際に垂れ、望眼將に遠に迷はむとす。若し夫れ、夕陽黯然として關中に巍峨たる峻嶺萬疊の外に落ち、一片の餘嵐、低く迷うて中原を搖曳するとき、旅雁寒雲を渡り、羸馬古道に嘶く、寥曠凄凄の景、今も尚ほ昔の如きのみ。そも黄河の水たるや、その長さ二千五百英里、流域全體の面積七十萬英方里、水色濁黄、秋冬の際、太氣乾燥の時は、その水、半ば涸れ、積砂數里、颯々たる風、窮髮より來り、黄塵を捲くを常とすれども、一朝漲溢すれば、大浸天に稽し、幾十萬の生靈と幾億萬の財産とを擧げて一掃跡なからしむ。後世治水の進歩せし時代と雖も、之を奈かむともするなく、人智未だ開けざる草昧の世は、問はずして知るべきのみ。かの唐虞の大洪水、殷代の大氾濫が、如何に、當時質朴無智の人民を驚愕恐怖せしめしかは、實に想像外の事なるべし。こゝに於てか、彼等は勞役力作、唯

だ困厄を免かれざらむを懼るゝ状あり、神は自由の意志を有するの外、人間の行爲に聯關し、或る賞罰的意義を以て、諸種の現象を起すものと考ふるに至れりき。故を以て天然を愛せむよりは、むしろ之を畏れ、天に親まむよりは、むしろ之を尊びき。之を以て、かのヒマラヤ山下、カンチス河畔の印度人が、熱帶園裡の豊饒なる動植と雄大なる山河とを觀、椰子樹高く天を衝き、孔雀彩羽を刷するところ、仰いで蒼穹を凝視し、渴仰讚美の外、一事なかりしに比すれば、その論固より同日の事に非ざるを知らずべし。

漢族は、すでに天を敬し、命を畏れ、之を以て儼然たる道德的意義を有するものとなせり。かくの如くして、宗教的もしくは迷信的たるに遠きが故に、遂に真正の宗教を發達せしむる能はず。而して、因襲久しきに亘れば、天の内部に存在する有心の靈體を認むるよりも、宇宙間に普遍的實在を有する人格なき一種威嚴ある法則の表示となすに至り、愈よ抽象的となり、合理的となり、之を人生に適用するを以て、その義務と考ふるに至りき。

法則の在るところ、必ず秩序あり、差別あり、漢族の實際的傾向は、こゝに至りて、愈よ彰著となれり。家長制度より開展したる社會は、一個の小天地にして、天人の理、唯だ一のみ。こゝに於てか、一般民族の上に絶對威力を被及するもの、幽冥界には天あり、現實界には帝王あり。漢族は、帝王即ち一國の主權者と天との間に一種の關係を定めて、その神聖を保たしめむと勉めき。帝王を稱して天子といふは、崇敬の極に出でしこと勿論なれども、實は政治上の方略、たしかに其半に居るを疑はず。蓋し太古に於ては、その國家、統一世襲の事成らず、祖先の餘德未だ以て主權者の地位をして十分鞏固ならしむること能はざるが故に、兆民の敬畏して措かざる天を利用し、天子たるものは、天より特權を附與せられたるものとして、民心を維持せむことを謀れり。これが故に天を祭るは主權者の事にして、なほ天子の號の外に、天吏、天位、天職等の稱呼あり。言必ず之を天に藉る。堯舜禪讓の時も、之を天に薦むといひ、湯武の前朝を倒すや、天之を命ずと宣言し、天の允許を経たる後、九五の位、始めて履むべきものとなせり。書經に見えたる君臣勸戒の辭、天に及ぶもの多き、單に儀式的辭令に非ず、遺傳的に頭腦に浸染したる極、やがて殆んど先天的觀念となりし敬天畏命の思想、その機會に應じて、無意識に表白されしものなり。

驕つて又支那人は神人の交通に想及し、人類は自然現象の起伏に對して、一種の能動的勢力を有し、その行爲は能く神意を制限し得べき者なるを信じ、天を畏れつゝも、一方に於ては、その意を迎合し、預め吉凶禍福を卜し、神意を付度せむことを務めたり。詩書に見ゆるところの道義的訓言は前者の例にして、易は後者の企圖を達せむが爲に、利用さるゝこと、往々にして之ありき。予は此に至りて佛人ラフフィット氏が其著支那文明論に於て、支那開化の心的基礎は、拜天の祭祀に在り」と論斷せし一片の提言を確信せずむばあらず。

三代の支那帝國は、その地域極めて狭小、わづかに現今十八省中、陝西の一部に限り、山に近くして海に遠く、動植の物亦た品彙に乏しく、その苛酷なる天然は、殆んど變化なし。故を以て、北人は美感を恣にし、想を玄境に馳するを得ず、自ら持久忍耐の氣風を養ひ、遂に意志の強固を馴致せり。彼等は道義の法則に循従し、天然に對立する外なきなり。古代文學が、専ら倫理の畛域に於て、その基礎を有すること、蓋し自ら然るのみ。

こゝに三代文學の下に論究さるべき古代文學の主要なるものは支那上古文化

進歩の跡を尋釋し、その發展の次第を討究する際の好典據たるに於て、固より絶大の價値を有すとはいへ、眞正の意義に於ける文學的作品たるに遠きこと、殆んど争ふべからず、その内容すべてに然ればなり。予輩が之を以て支那文學の萌芽となせしは即ち此故のみ。

要するに、支那文學が、有力なる二三外國文學の如き標型的發達をなさざりしは、その種族の性格に因り、種族の性格は主として地理的影響に因りて鑄治されしものなり。嗚呼人力の脆弱なるや、遂に外圍景象の支配を脱するを得ず、予輩の自ら經驗するところ、今に於て猶ほ然るものあり、原始的種族に在りては、固より怪しむに足らざるなり。

(二) 支那文字の起原とその構成方法

三

未開の野蠻人にも歌謠あり、俚諺あるを見れば、國民文學の萌芽は、極めて幼稚なる時代に於て早く發生し得べきものなるを疑はずといへ、文學史の研究は、一に文字を以て記載せし書籍の上に限らるべきものなるを以て、予はこゝに支那文字の起原に就いて、考察せざるべからず、然れども、是れ固より支那考古學の一分科たるべきものにして、やがて特殊専門の研究を要するは、讀者のすてに熟知するところ、故を以て、唯だ文學上、注意すべき事項に就いて概説を著くるに止めむ。


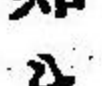
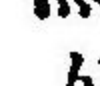
文字製作の起原、普通には、之を伏羲に托すと雖も、歴史的憑據を有する典籍に見ざるを以て、全く信を措くに足らず、次に黃帝の史官沮誦、倉頡、鳥獸の蹄跡を見、分理して識るべきものあるに因り、遂に書契を作れりといふは、殆んど信ずべきが如く、説文に「倉頡の書を作るや、類に依り、形に象る、故に之を文といふ。その後、形聲相益し、之を字といひ、竹帛に書し之を書といふ」と記し、その他淮南子、論衡等、諸子百家及び緯書の類に散見するところ、互に參錯出入の處あれども、皆之を證し得べきに庶幾し。然れども、熟ら之を考ふるに、伏羲といひ、黃帝といふは、古代に有力なりし君主の









名ならむと雖も、實は口碑上の人物にして、その年代、固より推度すべからず、且つ文字の製作の如きは、人間有數の大事業にして、到底一人の手を以て一時に完成さるべきに非ず、故に必ず之を斷定せむとするは、愚の極にして、且つ徒勞の閑事に屬すといはざるべからず、蓋し漢族は、埃及アツカヂヤ等諸國に見たると同じく、悠遠なる太古に於て、象形文字の若干を有せしなるべく、その後、巧智ある人々の爲に、漸々に改新せられ、規律的發達をなし、やがて、記號的文字に進化したるや、疑を容れず、倉頡、沮誦の輩若し實に存在せしとするも、その爲せしところは、單に舊を革め新を加へしの謂に外ならざるべし。

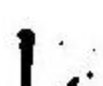
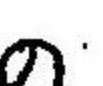
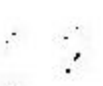
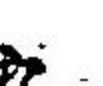
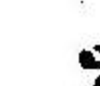
之を汎説するに、象形は原始的文字にして、殆んど言ふに足らず、而して最も進歩したるは、聲音學上の原理を基礎として、構成されしものなり、漢族の文字、單純なる象形以外、諸種の構成方法を案出し、偶々聲音にも想及せしことあるに拘らず、遂に舊套を打破し、一層便宜なる新體を製出するに及ばざりしは、例の尙古主義、長しへに之が累をなせしが故ならむのみ。

今夫れ觀察力に乏しき古代民族が、日常耳目に視聽する現實界の物體は、自ら限

あり然れども、人智の發達は、やがて外界の觀察より自我の靈體に反歸するものにして、換言すれば、客觀より主觀に、具體より抽象に轉向するものなり、予は他の人文史的事實と聯關して支那文字の略ぼ備はりし時代を斷定し、之を周初に在りとなすの殆んど誤なきを知る。周禮に方師の職あり、國子を養ふに道を以てし、之に六藝を教ふといへり。こゝに謂ゆる六藝は禮樂射御書數に非ずして、六書即ち文字構成方法に六種の別あるをいへるなり。漢書藝文志、之を解して曰く、古しへ八歲、小學に入る、故に周官保氏、國子を養ひ、之に六書を教ふるを掌る。象形、象事、象意、象聲、轉注、假借をいふ、字を造るの本なり」と。なほ六書に就いては、説文解するところ、最も詳なるを以て、今之を下に引抄し、更に注脚を附して説明を試みむ。

(一) 象形——曰く「象形なるものは、畫いて其物を成し、體に隨つて詰屈、日月是れなり」と。即ち視官に印象せし物體の形狀を直に模寫したるものにして、實は極めて幼稚なる一種の繪畫なり。例せば、は日の古字にして、太陽の形狀に象り、中央の一點はその陽物たるを表するが如き、は月の古字にして、太陰に象り、中央の二點は、その陰物たるを表する如き、皆然り。之を外にして、山の古字は、連山の紛糾に象り、水

の古字は、江河の流駛するに象り、は目の古字にして先づ目となり、更に轉じて目となり、は車の古字にして、先づ車となり、更に轉じて車となれるなり、その他もを以て耳を表し、を以て口を表し、又木の木を表し、の子を表し、の犬を表し、の女を表するが如き、魚の如き、馬の如き、羽の如き、七龜、中の如き、心、川、母、刀の如き、皆この類なり。

(二) 指事——曰く「指事なるものは、視て識るべく、察して意を見る、上下是れなり」と。即ち現實に於て經驗し得べきなれども、一定の成形、象るべきものなきを以て、便宜上、符號を借りて、その意義を表はすものなり、或は象事と稱し、事を指示するの義となせり。數量、位置、方向の如き、甲乙兩者の關係によりて成立するものは、すべてこの構成法に因る。例せば一二三の如き、その符號たること明白なり。又一畫の上下に點し、を以て上となし、を以て下となすが如き、を以て左右を表するが如き、の中に於ける、の凸凹に於けるが如き、即ち是なり。

(三) 形聲——曰く「形聲なるものは、事を以て名となし、譬を取つて相成る、江河是れなり、班固は之を象聲といひ、鄭玄は諧聲といへり。謂ゆる名とは前記の象形指事より

り成れる文を指すものにして、即ち形なり。譬とは聲をいふなり。その例に引きし江河に就いて細説すれば、江の左扁シは元と水にして、流水の形に象りて成れるもの。右旁の工(現時の音^工上平)は、水聲にして、大江漲溢、その音緩なるをいふなり。故に河に於ても相同じく、右旁の可(現時の音^可上聲)は又水聲にして、急湍石を衝いて激悉するの音なり。又鳩鶴の如きも、右旁は本と鳥の形に象りて成れるもの。左扁の九(令^九上聲、令^九去聲)は、其聲を表はすものなり。その他、峰、峰、鋒の如き、劍、嶮、險、儉、檢の如き名詞動詞の大多數は、皆之を以て成り、漢字全體十分の九に及ぶ。この法を以て構成されし新文字の音は必ず之を組み立つる既存文字の一によりて諧へらる。これ一名を諧聲と呼ぶ所以なり。故にその發音極めて容易なり。次に形聲結合の方法に六種の別あるを見る。江河は右聲左形、鳩鶴は右形左聲、草藻は上形下聲、婆婆は上聲下形、闔闔は外形内聲、闔闔衝衝は外聲内形、専ら形聲兩者の位地に就いて分ちしものにして、又記憶を値す。

(四)會意——曰く、會意なるものは類を比し、誼を合し、以て見る、指搦是れなり」と。即ち二字合して其意を取るものにして、前者と異なるは、意義の會同を主とし、必ずし

も其聲を諧へざるに在り。例せば、戈と止とを合して武となし、戈を止むるの義に取り、人と言とを合して信となし、人の言の義に取り、また木二つを林となし、人二つを从(即ち今の從)となし、日月を合せて明となし、口と鳥とを合せて鳴となし、十二つを卅となし、十三つを卅となし、日と木とを合せて東となし、日出の時、太陽東方の樹間に懸るの義に取るが如き、日と莫とを合せて暮となし、黄昏の時、太陽地上を去りて存在せざるの義に取る如き、他に孖、双兒、來、木の下に二人、坐、土の上に二人、垂、仁、吹、囚、世看、冒、富、貧、等、皆然らざるはなく、抽象的意義を有する名詞形容詞動詞、この法を以て成れるもの少からず。

(五)轉注——曰く、轉注なるものは類を建つる一首、同意相受く、孝、老是れなり」と。轉注の言たるや、水の源を出て、分岐別派、江となり、漢となり、各その名を受けて、本と同じく、一水を主とするが如きを云ふものにして、先づ一字を基礎とし、これに他字を加へ、別種の意義に轉向せしむるものなり。その會意と異なるは、規律的連鎖をなし、その意義、之を構成する既成文字と幾分懸絶するに在り。宋の徐諧の解に因れば、孝を首とし、匕を加へて老となし、子を加へて孝となし、至を加へて耄となし、毛を加へ

て贅となし、句を加へて者となすが如き、皆是れなり。概して同義異音なれども、思想の表白、その細微に亘り個々の差別を明晰にするもの、一に之に因る。なほ他に異説あれども、取るに足らず。

(六)假借——曰く、假借なるものは本と其字なく聲に依り、事を批す、令長是れなり、と。即ち一字を數用するの謂、令は淑なり、借りて使令の令となす。長は脩なり、借りて長上の長となす。これ皆意義を轉向せしものなり。焉は元と鳥名なれども、借りて助字となし之は屮にして、草の芽なれども、借りて助字となす。また、女、汝着而爾等の諸字は古代支那人が使用せし第二人称の代名詞と發音同一なるを以て假借せらる。その他、乎、于、且、也の如き皆然り。その甚しきもの、行の如きは、莖杏抗沆の數者に用ひらる。これ皆聲音を轉向せしものなり。こゝに於て、同文異義の文字を生じ、思想の表白、益す便利を増しぬ。

六書の分科は單に之を列擧せしに止まらずして、偶然かは知らねど、文字製作の發達を暗示するものなり。象形指事は、單體なれども、形聲は兩者を合せしものにして複體なり。今夫れ單より複に遷るは進化の常、形聲は前二者の後に在ること勿論

なり。之に次いで、會意轉注は、意義を綜合變化せしものにして、更に進歩せしものなるや、言を俟たず。若し夫れ假借に至りては、修辭學上に謂ゆる換喩メトニキに外ならず、すでに製字の範圍を超出せしものにして、自然の勢、最後に在るべきなり。又按ずるに、象形指事は文なり、文は繪畫なり、形聲會意は字なり、字は孳乳して漸く多きに至るの謂なり。之を總稱して文字といふ、實は此故のみ。

支那の文字は、時代の趨降に従ひ、漸を以て夥しく増加せり。ラックペリーは、現存せるもの、總數、八萬に近しといへり。又二字以上の結合によりて成る熟語、もしくは成語に至りては、數十萬に上ること、疑を容れず。なほ他の同文諸國、日本、朝鮮、安南等に於て特に製作されしもの、亦た少からず。宏富繁冗、實に此の如しと雖も、その講習、必ずしも困難ならず。康熙字典に收むるところ、四萬七千にして、文獻研鑽の上に、毫も不便を感ぜず。又ジャイルスの説に據れば、六千の漢字を習得するとき、學者たるに十分なりといへり。

次に文字の體形を考ふれば、亦た代を追うて變改せしを見るべし。最古の文字は、之を一概して古文といふ。純然たる象形にして、殷代古器物の銘、之を以て書かれた

るもの猶ほ存せり、次は倉頡の作るところ、變體極めて多く、字樣概ね糾繞蟠屈、その漆液を以て書かれしもの體圓大にして尾細小、仍つて蝌蚪と名づく、岫嶼山頭神禹の碑、その歴史的憑據に乏しきは争はれずと雖も、その文字は實に此體を用ひ、なほ春秋の未まで行はれし形跡あり、周の宣王のとき、大史籀、大象を作れり、一に籀文といふ、その書間ま存すれども、今能く辨ずるものなし、有名なる岐陽石鼓の文の如き、即ち是れなり、秦の始皇はじめて天下を兼ね、李斯相となるや、戰國の圖籍をして一致に歸せしめむと欲し、史籀の大象を取り、之を省改し、別に小篆を爲れり、一に秦篆といふ、斯が始皇に従つて諸方を巡視せる途次に建てたる碑文は、皆之に依るものならむ、之に次いで、二世の時、獄吏程邈、隸書を作り、秦漢の間、公文には篆書を用ひ、私書には隸書を用ひたり、その後、筆墨紙の發明あるに及び、また字體變革の必要を生じ、漢の史游、草書を作り、劉德、行書を作り、楷書も亦た其間に出たり。

倉頡の古文、史籀の大象、李斯の小篆、程邈の隸書、史游の草書、これ支那文字の五大變なり、然れども、その副次的産出に係る異様の字體、亦た少しと爲さず、隋書經籍志に曰く、秦の世、すでに古文を廢し、始めて八體を用ふ、大象、小篆刻符、摹印、蟲書、署書、爰

書、隸書あり、漢時六體を以て學童に教ふ、古文、奇字、篆書、隸書、繆篆、蟲鳥、并に藁書、楷書、懸針、垂露、飛白等、二十餘種の勢あり、皆上の六書に出て、事に因つて變を生ずるなり、魏の世、又八分書あり、と、その中、繆篆は、その文、屈曲纏繞、印章を摹するに用ひ、蟲書は、蟲鳥の形をなすものにして、幡信に用ひ、近世に至るまで存せり、現今普通に使用するは、篆隸楷行草宋の六體にして、楷行の二者、最も汎く行はる、字體の變、かくの如く、その度ごとに古書の傳寫に訛謬を生ぜしこと、又容易に推測すべきなり。

すでに文字あれば、個々特有の音あり、その中、發音の互に近似せるものを聚合して分類を爲すに至るは、自然の事なり、但し古代に在りては、その法、頗る疎にして、唯だ大體に亘るのみ、未だ細微に入らず、然れども、略は一定して、復た動すかべからざる者なきに非ず、漢魏以後、佛教の渡來とともに、悉曇の語學、又輸入せられ、之を講習して、其旨に精通するもの多く、而して、之を利用して、支那の文字を分類したるは、實に梁の沈約に拠る、その後、他の新方法により、之を試みしもの無きに非ざれども、皆行はれず、然れども、繙つて考ふるに、古來南北風化の異は、漢吳兩音となり、その後、紛糾錯互して、發音の亂雜、殆んど争ふべからず、その例、すでに唐代に在り、今日我が邦

に傳ふるところの漢吳兩音、亦た純然其舊に因るものに非ざるべく、古聲全く考覈するに由なきなり。されば、現時の支那人と雖も、古代文學の形式的方面の中、その音樂的價值を存せる聲律の諧調を眞に理解するもの、果して幾人かある、而して聲音學的研究は從來未だ見るに足るべき結論を提供せしものあらず、古代文學の鑑賞固より容易ならざるなり。

(三) 三大古典

すでに文字あり、豈に紀錄なきを得むや、倉頡沮誦相並んで黃帝の史官と稱す。上古邈たり、その書の傳はらざる、何ぞ怪しむに足らむ。然らば成形せる支那最古の書藉は、何者なりしか。或は河圖洛書の屬を擧ぐるものあり、緯書之を述ぶる詳なりと雖も、固より信ずべからず。蓋し河圖は孔子の數ば口にせしところ、易論語等に見ゆ。然れども、その謂ゆる圖なるもの、果して書籍なりしや、否や固より知るべからず。况んや、事固より奇怪に屬するもの之を信ずるは、愚の極といふべく、孔子の言亦た爲にするところありて、然りしに過ぎざるべし。

周禮外史の職を叙するを見るに、曰く、外史は、外令を書すを掌り、四方の志を掌り、三皇五帝の書を掌り、書名を四方に達するを掌る。若し書を以て四方に使すれば、其令を書すとあり。而して鄭玄は、三皇五帝の書に注し、楚の靈王の謂ゆる三墳五典なりといへり。是れ左傳昭公十二年の條に見ゆるものにして、左史倚相趨つて過ぐ、王曰く、是れ良史なり、また善く之を視よ、是れ能く三墳五典八索九丘を讀めり、といふものなり。三墳以下、果して如何なるものか、尙書序に述ぶるところ、移してその注脚

に充つべし。曰く、伏羲、神農、黃帝の書、之を三墳といふ。大道を言ふなり。少昊、顓頊、高辛、唐虞の書、之を五典といふ。常道をいふなり。八卦の說、之を索といふ。その義を求むるなり。九州の志、之を九邱といふ。邱は聚なり。九州有するところ、土地生ずるところ、風氣宜しきところ、皆この書に聚るをいふなり。然れども、今存するところの三墳等は、全く後世の偽作なれば、眞正原始の者、果して如何なる種類の書なりしか。固より意料の外に在り。唯だ五帝時代、すでに簡單なる標號文字の類ありて、或る事實を紀述せし載籍の存在せしといふことは、想像といへども、誤らざるに庶幾し。凡そ周の帝室に收藏せし古代の典籍は、左傳昭公二十六年、王子朝の楚に逃走せしとき、之を携帶して幾分を失ひ、諸侯の宮中に存せしものは、始皇焚書の禍を蒙り、殆んど全部を擧げて絶滅したれば、その今日に存せざる、固より怪しむに足らざるなり。

上古の文獻、その名を存するもの、他に其類なきに非ず。然れども、予輩が典據として、支那上古の時勢、思想文化の状態を揣摩し得べきは、易書詩の三經あるのみ。

如上の三大古典、いづれも固より一人の手に成りしに非ず。普通に孔子の刪正修補を経て、始めて完成したりと稱す。然れども、内容は、早く上代に於て、紛然雜出せし

者なれば、予は時代の關係より、便宜上、三代文學の代表者と爲すの謬見に非ざるを知る。なほ三者相互の先後を論せば、易の一書、實に其首に居るを得べし。何となれば、詩は、般より以上に及ばず、書は、堯舜に止まるに反して、易に至りては、少しくともその一部、猶ほ悠遠なる古代に於て、起原を有するの證、左、歴々明白なる者あればなり。如上の三經は、ひとり崇古の觀念を以てその價值を認むるに止まらず、又實に匹儔を見ざるものにして、上古漢族の精神的、生活は、殆んど遺憾なく、こゝに表彰されたり。試に之に詳言すれば、易は、宇宙論を主として、知的方面に關し、書は、宗教的、分子的を含むを以て、意的方面に關し、詩は、たとひ教訓的、抒情詩の一體に限られたりとするも、なほ是れ、情的方面に關するもの多きを疑はず。三經の儼存は、實に漢族祖先不朽の榮譽となすべきものなり。

(四) 易

易の根本基礎は、八卦に在り、而して繫辭に於ては、その伏羲の創造に係ることを明言せり。古しへの傳ふるところ、固より誣ゆべからず。然れども、當時人文の程度より考ふるに伏羲の八卦は、さばかり深遠なる意義を有するものに非ざりしや、必せり。おもふに博士レツグが希臘の昔、ヘシオドの觀念と相若くに足るといひし如く、臚げながら、消長二大動力の存在を認識し、天地人の三者を支配すとなし、一種の記號として、試に畫出したるに過ぎず。又何等の實用的規畫に出でしにも非ざりしならむ。たとひ、淺近とはいへ、かゝる思索は、宇宙論の門戸を闢きしものにして、たしかに哲學の濫觴なり。而して之を古代神話の遺より出でし者とすれば、説明上、頗る便宜ならむと雖も、予輩は不幸にして、その關係を發見すること能はず。惜しむべきは支那神話の散亡なり。

伏羲の八卦より進んで、現存せる易經の完成に至るまで、幾多の頭腦は、爲に耗盡せられけむ。すべての場合に於て、人智の進歩は、古代の未成品を改善修正し、之をして、完全ならしめざる限り、遂に止む能はざるものなればなり。連山歸藏等に就いて

は、姑らく、こゝに論ぜず。而して今の易經は數部より成るものにして、その各卦を説明する爻辭即ち卦辭を以て文王の作となし、各爻の解釋たる爻卦即ち象辭を以て周公の作となし、十翼を以て孔子の作となすこと、最も普通に流行する説なれども、之を否定すべき證左、固より多し。孔子の弟子、六藝に通ずるもの七十七人、その中、親しく易を受けしもの、商瞿あり。おもふに、今の易經は、この輩の手に因つて完成せしに非ざるか。

こゝに複雑多端、且つ明晰を欠ける歴史的發達の過程を闕却し、成形せる一部の易經を以て、論究の對象となし、古今學者の説くところを總括すれば疑もなく、この書は支那最古の哲學體系なりといふに歸納せらるべし。易は當初占筮に起原せしにあらずやといふ疑問なきに非ざれども、易經は純然たる哲學にして、唯だ占筮に利用さるゝといふに過ぎず。

易は、陰陽即ち消長の二大動力を根本原理とし、宇宙間の萬有を演繹したる者にして、まさしく二元論的思辨なり。陰陽は互に豫想し、相待つて現象を構成するものなるが故に、長しへに自ら差別して、その特質を持續せざるべからず。陰陽一に兩儀

といふ、これより生ずるものは四象、即ち四時、次に生ずるものは八卦、即ち天地雷水山風火澤にして、まさしく標準概念となすべく、換言すれば、天地間に存する始源的物象にして、一切現象の根本なり。一切現象、すべてにこの始源的物象の互動より成るとすれば、之を具體的に論ずるとき、八卦を重ねるの一事、必須にして且つ十分なる要件なり。こゝに於てか、知るべし、易の規畫は、宇宙現象變化の大法則を確立し、類推法により、併せて之を人事の上に適用せむと試みしものなるを。

易の大缺點として、宇宙本題の考察を闕くは、北人の實際的傾向を最も明晰に表彰せしものなり、而して、四象八卦、果して始源的分出にして根本的動力なりや否や、亦た論證なし。予は易に於て、その規畫の多少合理的なるを見るのみ、その立論の根柢に於て、すでに絶對的信據をなすに吝ならざるを得ず。然れども、幼稚なる國民の産出としては、規畫の大論究の精むしる嘆賞を値すべきもの無くむばあらず。

予は、世界文學史の著者、シエル・シユテルンの諸輩が、易を稱して、晦澁奇異の書となせし就にいて、幾分斟酌するところあらむと雖も、之を研究するの必要なしと公言せる論者の大膽と獨斷とに驚愕せずむはあらず。フアーベルは經學不厭精の中

に論じて曰く、先王の教、詩書禮樂のみ、初より易に及ばざるなり、今や童にして之を習ひ、啾哦輟まずと雖も、老に至つて、其理を喩るなきもの、比々として然り。易の教たる、殆んど急々の務に非ざらむか、と憫むべし、彼は全く易の何者たるかを解知せず、夜光の珠、暗中に投ずれば、匹夫劍を按じて見る、即ち亦た相似ずといふを得むや。

易の文字はすべて莊重高大の趣に満ち、韓愈が、奇にして正といひしもの、之を包括して剩すところなし。就中その本文、即ち上下兩經は、意義の摸索に苦しむまで簡單にして、優に讀者をして幾多の想像と聯想と對比とを容れしむるの餘地あり。或る論者は、さながら神託の如く、しかも彼此連關して、一大系統を構成せしを歎賞せり。然れども、予が私見を以てすれば、その各節が少くとも、深義ある俚諺たるを得べきが故に、文學的價値の存在を公言するに憚らざるなり。凡そ俚諺の特點は、幾度か社會諸般の事象に遭遇し、之を経験したる後に感發したるもの、語簡にして意深く善く人情の幾微を穿ち、社會上に於ける萬古不易の大法則を道破し盡したるに在り。然れども多少教訓的旨意を含むの故を以て特に方便として、靈怪奇異の言を爲すことなきに非ず。要は凡俗の徒、智慮未だ進まず抽象的觀念に短く、具體的想像に

富むものを警悟し、之を丹田に藏し、その行爲を反省せしむるに在り。文王といひ、周公といふ、ともに古しへの聖人その思想と經驗とを以て、かくの如き警語の一束を作爲し得たること、頗る自然の事といふべし。

すでに具體的事物を援引して、之を潤色す、その情ひ來りしところ、は動植を始として、すべて北方の天然なり、かゝる天然は拜自然教の觀念を以て、常に驚愕畏懼せしところ、その表出の跡、一種の異彩ある、何の怪むところぞ。潜龍勿用といひ、牝馬之貞といひ、履霜堅冰至といひ、龍戰于野其血玄黃といひ、風行天上といひ、履虎尾愬愬終吉といひ、國人于野亨利涉大川といひ、地中有山といひ、雷在地震といひ、山下有風といひ、公用射隼于高墮之上といひ、一一擧ぐる、の煩に堪へず、誦讀の際、自ら莊嚴幽玄の念を感ぜしめざるはなきなり。

次に十翼に至りては、思想の進歩したる後世の製作に係るを以て、抽象的哲理を説破して、頗る精妙を極め、徃々にして辭章的技工を見る。殊に文言の或る部分の如き韻を押さずして其聲自ら諧協、巧を加へずして其辭自ら偶儷、その孔子以後に出てしこと、單に文體上よりするも容易に判定し得べし。

(五) 書

易の或る部分は、悠遠なる上古に成りしと雖も、簡單なる斷片的辭句、もしくは符號に過ぎざるを以て、堯舜以前に於ては、未だ一部の典籍を形成せしむるに及ばず。こゝに確實なる歴史的憑據により、支那最古の遺文として、特に研鑽を値するものは、實に尙書なり。黃帝の頃よりして、帝室には左右兩史あり。左史は事を記し、右史は言を記す。國家の大事、帝王の辭詰は、かくの如くして天下後世に傳ふるを得たり。蓋し史は當時の學者にして、特に民間より拔擢され、この職に任せしものなるべく、詩書の全部は、かゝる學者輩の手によりて集録されしものなり。前にも述べし如く、三墳五典八索九丘等の書名を存し、また周書の顧命に、大訓西序に在りと記せしを見れば、堯舜以前、すでに載籍の存在せしは、事實なりしなるべく、歴代史官の紀述は、漸々に堆積し、周に至りて頗る多きを加へたりしならむ。春秋の時、孔子周に遊び、之を繚閱し、事の荒唐不稽に屬し、若しくは煩亂に涉りしものを删除し、古聖先王經世治國の大經にして、百代の君相、師奉するに足るものを選び、上は唐虞に斷じ、下は秦穆に至る、而して、その篇數を以て百となせるは、漢書の藝文志に見ゆ、之に就いて異説

あれども、こゝには略して言はず。當時單に書と稱せしが、後には尙の一字を加へたり。尙書序には、その上古の書たるを以て、之を尙書と謂ふといひ、鄭玄は、尙は上なり、尊て之を重ず、天書の如く然り、故に尙書といふといへり。後世に及びてはその聖人の手に出でしを以て、普通に之を書經と呼べり。

秦の世、焚書坑儒の禍あり、書も亦た燼滅して、一時烏有に歸せり、降つて漢初に及び、惠帝四年、始めて挾書の律を除き、尋いで文帝學に志し、頻りに學者を求む、偶々濟南の人、伏生名を勝といふ者あり、年九十餘、故の秦の博士にして、尙書を治む。蓋し焚書の際、之を屋壁に藏して漸く其禍を免れ、後之を取りて教授せしといふ。文帝聞いて、之を召さむとせしが、伏生行步甚だ難むを以て、晁錯をして、往いて之を受けしむ。伏生老いて言ふ能はず、其女をして傳言して、錯に教へしむ、錯は本と齊人、その聲多く異なり、錯の知らざるところ、凡そ十の二三、略ぼ其意を以て屬讀するのみ。錯の授誦されしもの、二十八篇、之を當時の人に讀み易からしめむが爲に、漢代通用の隸體に改め寫せしを以て、呼んで今文尙書といへり。二十八篇中、盤庚を上中下三篇に分ち、顧命の一部を分つて新に康王之誥となし、武帝の時、河内の一女子上つるところ

の泰誓を分ちて、三篇となし、合せて三十四篇を得たりといふ。

景帝の末、その子魯の恭王、宮邸を廣めむとして、孔子の舊宅を壞ち、尙書禮記論語及び孝經凡そ數十篇を得たり。武帝の時、孔子の後裔、博士孔安國、今文と比較して、之を讀み、隸體を以て之を改寫して、朝廷に上れり。前の今文に比して増すこと、二十五篇、計五十四篇、是を古文尙書となす。當時巫蠱の亂ありしを以て、學官に列するに至らず、空しく秘府に藏せり。その後、殆んど四百年、晋の永嘉の亂に遭うて、全く滅び遂に世に出ずして止みき。これより先、古文尙書の發見に次いで、前漢成帝の時、東萊に張霸といふものあり、父より受けたりと稱して、尙書百二篇を上れり。劉向、天子の秘府に藏する古文尙書の原本と比較對照して、直に其偽なるを觀破し、斷然之を斥けしことあり。書の僞撰、その濫觴、頗る古しといふべし。

永嘉の亂後、未だ幾多ならず、東晋の元帝、江左中興の時に當り、豫章内史梅頤、新に古文尙書を得たりと稱し、孔安國の序とともに之を朝廷に上れり。この書、舜典を缺きしを以て、王肅の堯典、慎徽五典の以下を以て補充せり。後百八十一年、齊の明帝建武四年、吳興の人姚方興といふもの、馬融王肅の注を採りて、舜典を作り、孔安國の傳

なりと稱して之を上れり。舜典の冒頭、粵若稽古帝舜曰重華協于帝、濬哲文明、溫恭允塞、玄德升聞、乃命以位の二十八字は、その自ら加ふるところなり。時に蕭衍(梁の武帝)博士たり、その僞書なるを斷じて、之を斥けたり。後又八十四年、隋の文帝、牛弘の建議により大に遺書を求めて、偶まこの僞舜典を得、梅頤が上りし孔傳古文尙書に編入せしを以て、僞古文尙書とに始めて完成せり。これより先、六朝の間、梅頤の僞孔傳は専ら南朝に行はれ、鄭玄注は専ら北朝に行はれしが、隋代に於て鄭氏微にして、僞孔却つて盛なり。唐に至り、陸德明古文に據つて釋文を作り、次いで、孔穎達、敎を奉じて、古文尙書孔傳の疏を作り、今古兩文を混合して一となせり。孔穎達の正義は、欽定に係り、且つ學官に立てられ、進士及第の科書となりしが故に、世を擧げて尊奉し、終に一人の疑議を着けしものなかりき。

かくの如くして、今文尙書は、傳承の跡極めて正しく、固より信を取るべし。而して古文尙書收むところ、他の二十五篇は、はるかに後世に出て、傳統正しからず。且つ今文の詰屈贅牙なるに反し、古文の文從にして字順なるは、理の必ず無きところ、其僞や顯然として觀るべきものあり。宋の吳棫、始めて之を疑ひ、朱熹も亦た之を疑ひ、

諸經を注して、ひとり之に及ばず、門下の蔡沈をして、集傳を作らしめたり。元の吳澄、書纂言を著はし、が、釋せしものは、獨り今文のみ。之に次いで、明の梅賾、始めて諸書を參考して、尙書考異を作り、剽綴の辨證を試みしが、未だ精到ならざるところあり。清の閻若璩に至りて、古文尙書疏證の著あり。燃犀の眼光、善く疑晦の點を鑒察し、古今に考覈して、條條縷折、悉く隱微を穿ち、快刀亂麻を斷つ、の概あり。千古の疑問、全く氷釋して、剩すところなく、毛奇齡の辨護も、些少の効果を認めず。これに次いで、惠棟の古文尙書考、江聲の尙書集注音疏、孫星衍の古今文注疏、王鳴盛の尙書後案、段玉裁の撰異の如き、續々世に出て、いづれも古文の價值なきを論證せり。古文は、かくの如くして、すでに信ずるに足らずと雖も、普通には、之を今文と併せて存するが故に、その注疏のみは、固より取るべきなり。

尙書は疑もなく、三代右史の手に成りし者にして、幸に獨り存し、左史記するところ、偶ま傳を失ひしならむ。右史すでに言を誌す、故に尙書は古しへより六體の目あり。典謨、訓誥、誓命、是れなり。典は説文に、冊の几上にあるに従ふ、之を尊閣するなりといひ、堯舜の云爲せし者に限りて、この名あり。謨は謀にして、禹、皋陶、益、稷の嘉言を記

せしもの世に三諷の稱あり、典謨の名、後世に無し。訓は導なり、敷張諫奏の辭、後世上書の類、無訓伊訓の如し。誥は告衆に告諭するなり、後世上に告ぐるを告といひ、下に發するを誥といへども、音釋に誥は即ち告、上下通じて用ふべく、召誥洛誥の如き、多くは下を以て上に告ぐといへり。多方君奭立政の如き是れなり。秦に至りて、詔と稱す。漢の武帝元狩六年復た之を作りしが、官を命せず。宋に至りて、始めて庶臣を命ぜり。誓は衆に誓ふの詞なり、軍旅に警告するを誓といふ。甘誓の如し。また群臣に警告する詞あり、秦誓の如し。後世この例少し。命は令の如し、字書に、大を命といひ、小を令といふとあり。當時、王の言、總べて命といへり。或は命官し、或は錫賚し、或は傳遺するの類なり。秦に至りて、命を改めて制といふ。漢より後、命の名亡ぶ。以上六體の區別は、文體上に截然たる鴻溝を劃するに非ずして、たゞ隨時命名せしのみ。劉勰の謂ゆる言と筆と未だ分たざるの世、史臣唯だ記するに止まり、修辭上の技工に意を用ひず、故に此の如きのみ。この六體に、征、貢、歌、範の四を加へ、呼んで十例といふ。征には胤征あり、貢には禹貢あり、歌には五子之歌あり、範には洪範あり。以上命名の示すところに因つて考ふれば、書の全體、上古君臣勸戒の辭なること、早く推察し得べく、卷を開

くに及べば之を一貫して、儒教思想の最も明晰に發表されしを観るべし。之を幽冥にして、宇宙の精靈と祖先とに對する敬畏の念あり、之を現實にして、家長制度の下に發展したる君臣父子相愛の熱情あり。この兩者を鼓吹促進せむが爲に、強盛なる意志を養成して、感情を抑遏せむことを務め、純潔堅確なる道念と剛健不屈の精神とを助長せむことを説く。これ尙書を通じたる根本の大精神なり、而して時代の遞降と、建國君主の風範とは、三代をして各異なりたる民風と文致とを發揮するに至らしめき。

姑らく之を孔子の言に觀むか、曰く、虞夏の質、殷周の文、至れり。虞夏の文、その質に勝たず、殷周の質、その文に勝たずと。又曰く、夏道命を尊ぶ、鬼に事へ、神を敬して、遠ざけ、人を近づけて、忠、祿を先にして、威を後にし、賞を先にして、罰を後にす、親にして、尊ならず、その民の敝、蠢にして、愚、喬にして、野、朴にして、文ならず。殷人神を尊ひ、民を率ゐるに神に事へ、鬼を先にして、禮を後にし、罰を先にして、賞を後にし、尊にして、親ならず、その民の敝、蕩にして、靜ならず、勝ちて、耻なし。周人は禮を尊び、施を尙ひ、鬼に事へ、神を敬して、之を遠け、人を近づけて、忠、その賞、罰、爵を用ふ、親にして、尊ならず、その民の

敵利にして汚文にして慙ぢず、賊にして蔽と。おもふに、夏は大禹九年治水の後を受け、拮据經營、衣食に汲々として、精神的生活をなすの暇なかりしが故に、かくの如く、蠢愚喬野なりしならむ。殷は、成湯諸侯より起り、天民の先覺を以て自ら任じたる伊尹を以て王佐となし、武を用ひて國を立て、桑林に雨を禱りて自ら其過を引けり。その感化は、殷民をして、神明に對する敬虔の情に篤く、氣象豪厲、頗る敢爲の風を起さしめき。これが故に、國祚數ば危急に臨みしと雖も、賢聖の君六七作るあり、能く衰運を挽回せり。彼等は其失として、動もすれば疎暴に流れしと雖も、陰險の分子なく、飽くまで率直なり。その末路、紂の暴虐、將に國を滅ぼさむとするに際し、憤悶自ら堪へざる狀は、西伯戡黎の一篇に於て視るべし。彼は泣くを解せずして、唯だ怒るを知るのみ。悲壯激切、何ぞ其れ大丈夫の氣象に滿ちたる。而して、紂は凶惡なるも、その死は實に潔かりき。之に次いて、殷の後裔は、帝號を去つて諸侯となりしも、遺民は容易に周に服せず、數ば恢復を企て、亂をなせり。商書の篇々、一種凜烈の精神ある、固より然るべきなり。次に周にいたりては、上に文武周公あり、下に亂臣十人あり。文物制度の美、典章儀禮の整、實に燦然として眼を奪ふ。その弊や、繁文縟禮となり、文弱となり、陰

柔となり、狡猾となりぬ。而かも、周の文化は、長しへに後世を支配せしを以て、如上の弊も亦た跡を絶たず、今日猶ほ髣髴の間、之を見るべく、國運の振張に對しては、むしろ害ありて益少きに似たり。孔子が、周は二代に監る、郁郁乎として文なるかな、吾は周に従はむといひしは、單に禮に就いて言ひしのみ完全なる理想的民風は、正に殷周の中を得たるものに在るべく、而かも、遂に之を實現する能はざりしなり。

三代の民風、かくの如く、その文字、亦た自ら特色あり。まことに、揚雄が、渾々爾たりし如く、夏書は平正雄渾の趣に滿ちたり。商書は豪厲なる人心の反映なるが故に、俊爽簡勁なり。周書は規模宏大にして、思想優秀、文致整正にして、體裁完美、委曲巧妙の極、多少措辭の技工を見る、然れども、之を總評すれば、醇雅莊大と呼ぶべきに似たり。次に偽書の文に就いて一言せむ。梅賾蓋し一代の大家、固より手腕あり、逸書中に散見する、隻句斷片を拾綴して、巧に之を塗飾す。文章の妙、義理の精、たとひ純然たる古味古色を爲ね得ざりしとするも、亦た大文章たるを失はず。予は之に因つて、贋作偽撰の到底不可能なるを知り得たるとともに、全く唾して之を棄てず、比較玩賞の資に供し、幾分の雅量を以て之を見るの最も正當るを確信せずむばあらず。

(六) 詩

五〇

純文學の範圍に於て、律語の發展は常に散文に先ち、律語の畛域に於て、叙事詩の撰製は常に抒情詩に先ち、而かも神話の中の事實を以て、その述作の對象となせるは一般の通則にして世人の既に是認せしところなり。然れども、翻つて思ふに、かくの如き叙事詩に在りて、整調押韻等、律語たるに必要にして且つ十分なる形式上の規律は未だ確然制定されざりしとするも、なほ自ら一種音節の調諧の存するあり、その特質を檢覈するに、決して咄嗟の間に案出構成されしものに非ず、加ふるに、萬般の事物、漸を以てせる發達の徑路、自ら避け難きものあるに想及せば、律語の起原を以て、更に悠遠なる上古に在りとなすこと、必ずしも言を河漢にする者に非ざるなり。

怪力亂神を語らずと教へられたる漢族は、神話を失ひたれば、ホメロスに比すべき詩聖の一人を上代に有せざりき。而して、現存せる支那詩歌の最も古るきは、書經に載する舜と皋陶との唱和を推すべしといふとき、或は律語を以て散文に後れて出でたりと爲すものあらむ。然れども、予輩は堯舜以前の上古に於て、律語の存在を

斷言し得べき確證を有すること、一にして足らず、唯だ不幸にも單に名を存するのみにして、辭章傳ふるもなければ論ぜざるのみ。之に次いで、夏殷兩代、一千年間の歌謠、亦た盡く泯滅し、存するものは獨り商頌五篇のみ、その每首、般人豪厲の氣、楮毫の端に躍然たるものあり。予輩が今日商の史實に就いて、多少知ることあるは、一に此等の詩と書經に載する商書との儼存に頼らずむばあらず。詩經は、これ等の詩を収録すれども、他の殆んど全部は、すべて周人の作に係れり。

詩經の詩、すべて三百五篇、古來の因襲的分科に従へば、凡そ三種あり、風雅頌、是れなり。周の時、天子五歲に一たび巡狩し、采詩の官を設けて、各地の歌謠を採り、之を音律に合はし、その地の風俗人情を探り、政治の汚隆を察し、また一般人民をして諷誦せしめ、以て教化を助くるの資となせり。王制に大師に命じ、詩を陳し、以て民風を觀るといへり。すでに之を諸侯の國に採るが故に名づけて國風といふ。詩の序者は、之を解して曰く、風は風なり、教なり、風以て之を動かし、教以て之を化すと、又曰く、上、以て下を風化し、下、以て上を風刺す。文を主として譏諫す、之を言ふもの罪なく、之を聽くもの、以て戒むるに足ると、乃ち知る、風は當時民間に流行せし俗謠にして、直に社

會民衆の衷情を吐露して剩すところなく、爲政者が之を采りて、民風を觀、治道に資せしこと、寔に其故なきに非ざるを。次は雅、詩の序者は曰く、雅は正なり、王政の由つて廢興するところを言ふ、政に小大あり、故に小雅あり、大雅あり、と。雅の體たるや風と異にして多くは天子爲政の得失を褒貶す。次は頌、詩の序者が、盛徳の形容を美しその成功を以て神明に告ぐといひしが如く、元と宗廟の樂章にして、一種の讚美歌なり。前二者、之を他に採りて、音律に合はせしに反し、これは始より意を聲調の上に致して、特製せしものに係る。

周の初、風は周南、召南あり、雅は鹿鳴、文王あり、太平の氣象、正に見るべし。而して、王道衰へ、禮義廢れ、國政を異にし、家、俗を異にし、政教の統一を缺くに至りて、變風、變雅作る。風、雅の二體、正變の別あるは、主として述作の動機を異するが故に外ならず。正風、正雅は、治世の音にして、變風、變雅は、亂世の音なり。こゝに於てか、欣愉満足感謝の情は、前者に於て見るべく、悲歎回顧慷慨の念は、後者に於て見るべく、更に之を一言すれば、前者は順境の産出に係り、後者は逆境の製作に出でしものなり。而して、頌には變あるを得ざること、理當さに然るべし。

風、雅、頌の外に、比、賦、興あり、之を合せて六義といふ。彼が、内容上の類別なるに反し、此は全く外形上の分科なり。換言すれば、叙説方法の異にして、修辭學上の判別なり。比は譬、他物を藉り來り、その意義を表するもの、例せば、溫其如玉の類にして、今日の修辭學に謂ゆる直喩ジキョウに當り、興は他物を以て情思を抒ぶる誘引となすもの、例せば、關關雎鳩、瞻彼淇澳の如きをいひ、かの隱喩インキョウに類す。賦は、見聞するところを直寫鋪陳して、別に比喩の屬に據らざるものをいふ。故に興は比、賦の合せたるものとも見るべく、詩經の中、その最も多きに居る。詩に賦、比、興あるは、猶ほ布の緯ある如く、以て風、雅、頌の經を織成するなり。

又四始といふことあり、便に従つて附記せむか。一説には、關雎を風の始となし、鹿鳴を小雅の始となし、文王を大雅の始となし、清廟を頌の始となす故に、之を四始と云ふといひ、又一説には、風や、小雅や、大雅や、頌や、人君この四者を行へば興り、廢せば衰ふ、蓋し王道興廢するが故に之を四始と云ふといへり。

六義、四始、正變は、支那詩學の根本的標準にして、後世詩人の循奉するところ、アリストテレスの「詩學」にも増して、文學の發展上、頗る重要なる關係を有するものなり。

平王東遷の後、天子巡狩せず採詩の事、全く止み、朝廷の上、風吟亦た絶ゆ、春秋の後、時に其作あれども全く觀るに足らず、孟子が王者の迹熄みて詩亡ぶといひ、李白が王風委蔓草、戰國多荆榛といへるもの、即ち是れなり、然れども、詩を以て、教育上、必要なる科目となせし結果は、頗る觀るべきものなり、當時の士大夫、會同朝見の際に於て、多く古詩を以て、その微意を通ぜしこと、左傳を覽て知るべく、斷章取義、之を援引して自己の立言を證せしこと、諸子の書を閱して明かなるべし、詩は、翫賞を専務とする藝術的作品たるに止まらず、交際上の要具にして、兼ねて又、學問上の一大證典たりき。

詩經は、孔子の手訂に成りしものにして、その當時現存せし詩三千餘篇に就いて選擇を施せしものなりといふ。この刪詩に就いては、後世頗る異論ありて一定せず、然れども予の私見を以てすれば、ひとり孔子手訂の際のみならず、その初、封國の多き年次の久しき、民間の歌謠、その數、何ぞ限あらむ、周の太師、之を採るとき、第一回の淘汰をなし、魯、周公の勳勞を以て、天子の禮樂を用ふるを許され、その國の太師、之を傳ふるとき、音の詳ならざるものを棄つ。然らば、孔子の前、すでに二回の刪詩ありし

なり。而して、孔子の時、魯國に存せしもの果して三千なりしや否やは、知らずと雖も、少くとも選を施し得べき程の多數なりしは、何の怪しむところぞ。况んや、刪詩を否定すべき證左、全く之なきに於てをや。かくの如くなれば、詩經は前後三回の刪正を経るものにして、その篇數、比較的、に少きも、亦た理なきに非ざるなり。

詩經の詩は、極めて幼稚なるものにして、形式上の規制、むしろ太だ寛、その句大抵四言を以て定式とすれども、必ずしも之に拘せず、長短錯落、一言より九言に至る、韻脚の如きも、假借多く、音に反切なく、協聲となすこと自在なり。而して、その内容を檢覈するときは、すべて抒情詩にして、純正の敘事詩は、一も之なし。

漢族の祖先たる上古北人の實際的傾向は、萬事に通じて明晰なりと雖も、之を文學上に及ぼせしに至りては、亦た甚しといふべし。かの希臘時代、學者の詩を論ずるや、自然界を摸倣し、若くは人間界を描寫するものとなせしに反し、支那人は、之を以て、専ら教化の用に供せり。詩の大序に、治世の音は、安以て樂、その政や和、亂世の音は、怨以て怒、その政や乖、亡國の音は、哀以て思、その民や困、故に得失を正うし、天地を動かし鬼神を感ずる、詩より近きはなし。先王是を以て夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を

厚くし、教化を美にし、風俗を移すといひ、その要旨、詩は自家胸中の感慨を吐露するものとはいへ、その目的とするところ、消憂暢思に止まらずして、道徳を推奨するにありと爲すなり。孔子が思無邪の一言、以て之を蔽ふといひしもの、まことに千古の斷案となすべく、詩經に收むるところ、實に教訓的抒情詩に限られたるを見るべく、その詩眼は、到底誤れるものなり。

すでに教訓的旨趣を以て唯一の要諦となす、故を以て、感情の自由なる發洩に任かすこと能はずして、必ず道徳的規矩に循從せざるべからず。孔子が、關雎は樂んで淫せず、哀んで傷らずといひ、司馬遷が、國風は色を好んで淫せず、小雅は怨誹して亂れずといひし如く、哀樂をなすもの決して、その極處に到達すること能はず、否、少くとも之を賦咏するに當りては、大に檢束するところ無くむばあらざるなり。加ふるに、周人の虚飾的なる、決して至純の感情を吐露するものに非ず。かくの如くして、家長制度の下に發展したる君臣父母兄弟朋友等、倫理的關係より出てたる親愛の情は、意志の力に制裁せられて、その過半は形式的に、必ず禮義の中に止まりて、各篇に現はれ、その裏面に於ては、敬天畏命の念、儼然伏在するを見るべし。試に其例を擧ぐ

れば、親子の間を詠じたるもの、參我あり、兄弟の間を詠じたるもの、棠棣あり、朋友舊故に係るもの、伐木あり、然れども、その半以上に居るものは、男女の情交に關したるものにして、換言すれば、單純なる民情の反映なる戀愛詩あり。戀愛に關する教訓的抒情詩、これすでに矛盾の尤も甚しきものなり。何となれば、戀愛の極致は、現在社會の利害を超越したるものにして、所詮藝術上の美は、必ずしも道徳上の善と一致せざればなり。絶好の詩的題目たる戀愛にして、なほ此の如く、他は推して知るべし。凡そ詩經を讀むもの、時に嚴正なる教訓に接すべきも、遂に微妙なる至純の聲響に接せざるを奈かむ。文學の眞本領は、全く此に發揮せられず。漢族が長しへに溫柔敦厚を以て詩の本領となし、その進歩、頗る遅々たりしもの、自ら其故なくむばあらず。詩經の詩材は、すべて人事的方面に限られ、直接に天然に對する感想を發洩せるもの、殆んど絶無。蓋し黄河の沿岸、苛酷なる北方の風物は、容易に題目を供給せざりしに因るならむ。然れども、この貧しき天然を借りて、技工を潤色したる處、往々にして、無限の情致あり、風神絶えむと欲するを疑ふ。予はこゝに斷言す、詩經の佳處は、全く局部に在り、主として情景の融會を以て其歸となせるを、後世の詩、亦た然り。

詩經は春秋前後支那帝國北方の各地に發生せし歌謠を集めしものなるが故に大體の情趣傾向は固より相似たるも、地方的印象と歴史的感化とは、各篇をして多少異なりたる特色を帶ぶに至らしめき。春秋の時、吳の季札、魯に遊んで樂を聽き、諸國の風を評せしこと、左傳に見ゆ。然れども、予はこゝに詩經の論究を終るに臨み、陳繹曾が詩譜中に論ぜし諸篇の批評を掲ぐるを得む。曰く、周南は日用の間を離れず、天下萬世を福する意あり。召南は至誠惇恪、秋毫も犯さず。邶風は君子變に處り、淵靜自ら守る。齊風は、翩翩俠氣あり。唐風は憂思深遠、秦風は、秋聲朝氣、陳風は、深く民情を眞にし、而して眞之を體す。小雅は忠厚、宣王、小雅は精神を振刷す。大雅は深遠、宣王大雅は、事業を鋪張す。周頌は天心希聲、魯頌は謹で禮法を守る。商頌は天威大聲と。又詩經の總評として、凡そ三百篇を讀む、その情足らず、性餘ある處を會するを要す。情足らず、故に之を景に寫す、性餘あり、故に情に見はるといひしは、ゲーテが支那文學を評して、常に自然界と人間界との事象を聯結せしむる傾向ありといひしと、と暗に符合するところあり、ともに活眼となすに足るべく、而して、予の前言の決して戯に非ざること、亦た愈よ知るべきなり。

第二 周末文學

(一) 周末の社會狀勢

周の國家組織は、その初、主として周公の手によりて經營されしものなり。予は、周公が果して聖人なりしや否やを知らずと雖も、多才多藝、明晰なる頭腦を有し、且つ頗る經驗に富みたる一大政治家なりしを臆想せずむばあらず。武王は殷を滅ぼせしのみ、未だ統御の政策を實施するに及ばずして崩ぜり。周公、その後を承け、成王を輔け、大に禮樂刑政を興し、先づ同姓の諸侯を中原の要地に封じて、王室の藩屏となし、異姓の諸侯を牽制して、不虞に備へしめたり。かくの如くして、命、天下に通じ、政、四方に普ねく、敢て異圖を懷くものあらず。その他、服制を定め、井田の法を設くる等、文物燦然として觀るべく、至治の象、正に四海に溢れぬ。周禮儀禮の諸書、歴史的根據に就いては、多少の疑問なき能はずと雖も、周公の理想は、まさしく個中に表彰されしを見るべく、誰か又その整治の美を贊嘆せざるものぞ。

さばれ、年古くして器具廢し、水腐して群蟲生ず。平和久しくして紀綱自ら弛むは

最も避け難き歴史上の通弊なり、况んや周公の定めしところ、むしろ煩瑣複雑に過ぎ、且つ運用の妙を缺きしに於てをや、こゝに於てか、僅に數世の後、昭王南狩して反らず、穆王の時、荒服の者至らず、夷王の暗弱、厲王の暴虐、之に繼ぎ、宣王の中興、不幸にしてその終を善くせず、幽王に至りて、諸侯皆周に叛き、遂に犬戎の爲に弑せられたり。是に於てか、東遷の後、天子只だ虚器を擁するのみ、時に鼎の輕重を問ふ諸侯さへあり。往時周公の施政、今や寸功を認めず、同姓の諸侯は、却つて異姓の諸侯に制せられ、強は弱を凌ぎ、大は小を併せ、天下また王室あるを知らざるに至れり。その間、齊桓、晋文の輩ありて、覇を中原に唱へ、一時諸侯を統御して、尊王攘夷の業を成せしと雖も、實は之を假りて、その野心を逞うせむとするに過ぎず。天下愈よ亂れて、戰伐已む時なく、諸侯の國、臣にして君を弑するものあり、子にして親を弑するものあり、道義の頽廢、こゝに極まれりといふべし。

周末諸侯の力征、種々複合せる原因ありと雖も、人々の増殖と生計の困難とは、その根本的の最大原因ならず、むしろ而して上記社會的變動の現象は、之を一括して、中央集權の破壊、封建制度の瓦解といふに外ならず。この兩者は、地方分權の結果

を生じ、群雄の割據を促進し、優勝劣敗の大活劇を現出せしめき。當時の諸侯は、自強策の實行に汲々として、富國強兵の問題は、焦眉の急に迫れり。人材の必要は、此時に際して、最も痛切に感ぜられ、聘士の風は、至るところに盛なりき。すでに、需用あれば供給あり、天下の人物、彬々輩出、固より其故なきに非ざるを知るべし。

周末の社會は、競争の社會なり。前には國家の間に競争あり、今や個人の間に競争あり。前には諸侯の間に競争あり、今や學派の間に競争あり。一言以て之を蔽へば、生存競争の結果、腕力の闘は、延いて智力の争となりたるなり。こゝに於て、思想繫縛の解除となり、言論の自由となり、やがて新奇なる學說の流行を促しぬ。

周末一時の文化は、上に述べたる如く、全く社會的變動の結果にして、三代の蓋蓋は、必然の勢、轟然として、正に此際に爆發したるなり。なほ之を當世に輩出せし學者、其人の方面より説明すれば、更に明かなるものあるを得む。予は、すでに三代に於ける精神的生活を一瞥したり。而して、國民を陶冶する教育機關の裝置は、一に學校に在り、司徒の職、典樂の官、ともに書の堯典に見え、専ら公共教育に關する事項を處理せり。孟子に庠序學校を設け、以て教ふ。庠は養なり、校は教なり、夏には校といひ、殷に

は序といひ、周には庠といふ、學は三代之を共にし、皆人倫を明かにする所以なりといひ、禮記に、米廩は有虞氏の庠なり、序は夏后氏の序なり、瞽宗は殷の學なり、類宮は周の學なりといふが如き學校の創設頗る遠きに在り、周に至りては、益す其歩を進め、始めて完成に近づきしを知るべし、今之を略述すれば、司徒あり、國の教を總括し、大司樂あり、國子の教養を司り、師儒保あり、教養の局に當る。また史あり、當時の言と事とを記し、併せて古代の書を保存す。這般學術の獎勵は、國民思想を助長し、偉大なる影響を及ぼし、やがて周末の學者を輩出せしむべき素養を造るに至れり。

周初社會下層の人民は、思想の自由なく、未だ新學説を講ずる素養あらず、その必要、亦た絶無なりき、王制に左道を執りて、政を亂すものは殺すといへり、然れども、春秋の世、國際上の慣例、往々にして自己の企圖を妨害するを以ての故に、到る處、去籍の事あり、同時に舊を去り新に就くの風を生じ、好て新奇なる言論を歓迎せり。

かくの如き素養と好機とあり、時難救はざるべからず、生民援けざるべからず、况んや萬乘の國、高位美官を以て、之を招聘するに於てをや、周末に輩出せし有爲の人物、殊に活動的學者の極めて多數なる、何ぞ怪むに足らむ。

(二) 諸學派の興起

周末の學者は、社會維持の觀念を保持せしが故に、その書を著はすや、あくまで實用に在り、文學は寧ろ手段に外ならず、彼等は愛國者にして、慨世家なりき、その氣激し情熾なるの時、知らず、識らず、筆墨を鼓舞して、こゝに至れるもの、譬へば、一道の溪流、斷崖に懸りて、忽ち萬丈の飛瀑をなし、深潭に奔注せむとするの際、飛沫雪を爲すの類のみ、そも三代文學は、かつて論究したる如く、單に時代精神の反映にして、一般國民の聲たるに過ぎざるに反して、周末に於ては、一代の思潮を一身に負うて立つものあり、一學派の粹を集めて大成するものあり、その變化に富みて、多趣なる、殆んど言説の外に在り、その文運進歩の程度、迥かに三代を凌駕せるは、復た贅するを要せざるなり。

班固は周末諸家を以て、周官の制度より出でしものとなせり、以爲へらく、儒家は司徒に出で、道家は史官に出で、陰陽者流は義和の官に出で、法家は理官に出で、名家は禮官に出で、墨家は清廟の官に出で、縱橫家は行人の官に出で、雜家は議官に出で、農家は農稷の官に出づと、蓋し諸家思想の種子は、すでに周官に存し、歷史上、傳承の

跡尋ねべきものある、固より然るべしと雖も、予は諸家の分出を以て人種的差異、地理的影響、歴史的感化の三者に歸するの、はるかに學問的なるを信ぜずむばならず、如上の三者、便宜上之を併せ見れば、亦た一に歸すべし。何となれば、人種の配布は、主として地理に關し、歴史は又この兩者の上に開展したればなり。故に這般の空間的考察は、次章に譲り、こゝには前を承けて、時間的に略説を着け、讀者をして、先づ周末文學發展状態の概念を得せしめむ。

諸派學術の萌芽は、ともに春秋の際に出て、降つて戰國に及べば、その變すてに極まり、むしろ祖述折衷の傾向を生じ、個人的性癖は、思想上に偉大なる勢力を及ぼし、明かに時勢の必迫を表示せり。孟荀二子の孔子に於ける、莊子の老子に於ける、ともに祖述なり。韓非が、その初、儒門に出てしに拘らず、申商の法術を標榜し、却つて南方思潮を交へたる如き、むしろ折衷に似たるものあり。然れども、各自發明するところあり、思索愈よ精緻に赴きしは、たしかに、その特徴を推すべし。

予は、こゝに文學史上、春秋戰國兩時代の差異に就いて、更に考察するところ無くむばならず、春秋の時、周室すてに衰へたりと雖も、名義上なほ王者たり、齊桓晋文之

を假りて覇を爲し、周公の遺制、未だ全く考ふべからざるに至らず、尊禮の風は、なほ儼存し、表面上、微弱ながらも道德の制裁あり、諸侯臣子の惡を爲すや、陰に然るのみ之を陽にするの勇氣なく、周人利巧の風は、明に殘留せり。故に當時の文字は、その姿致、自ら書の周書と相似たるところあり、内容は異なりとするも、之を一概して、思想の濃厚和順と、筆致の古雅簡淨とは、その通性となすべきが如し。

戰國七雄の世に至りては、全く前者と異なり。時は封建郡縣兩制度の過渡にして、舊慣すてに全く倒れ、新法未だ起らず、最も自由にして且つ最も活潑なり。春秋を以て衰世と呼ぶべくむば、戰國はたしかに亂世なり。今試に衰亂の別を云はむか。富家の將に倒れむとするや、逋債償はず、主從離散して、門前雀羅を設くべし。然れども、殘餘少額の金を持ち、必ず舊業を復せむとするや、あらゆる手段を盡し、賭博的事業の危険なるを顧みず、一輸一贏、生死を以て奮進し、その氣象、全く往日に似ず。衰ふものは、往々にして涙あり、憔悴枯稿を免れずと雖も、亂るものは、心氣激昂、最も怒り易く、百難を犯すを辭せず。更に之を喩ふれば、前者は病める馬の如く、時に鬣を振うて長鳴するのみ、後者は、傷を帯びし野猪の如く、却て人を害はむとす。朱熹かつて曰く、治

世の文あり、衰世の文あり、亂世の文あり。六經は治世の文なり、國語の如きは、委靡繁雜、眞に衰世の文のみ。この時、語言議論、かくの如し。宜なるかな、周室の振起する能はざるや。亂國の文に至りては、戰國是れなり、衰世國語の文の比に非ざるなり、と。六經は、しばらく言はず、國語を以て戰國策に比し、春秋諸子を以て戰國諸子に比すれば、前言の決して戯に非ざるを知了せむ。予は、單に内容たる紀述對象に就いて之を言ふに非ず、思想の傾向に於て、すでに然り、無意識の間に、時勢風潮の感化を受けたる筆致文體に於て、愈よ明瞭なる表顯を見るべし。

前に支那文字の構成に就いて述べし如く、周に至り、字數夥しく増加し、史、籒の大篆は、戰國の頃、使用に慣れて、最も普通に行はれたり。當時木皮紙なく、或は木に書し、或は竹に書し、或は縑帛に書す。今より之を視れば、固より論するに足らずと雖も、之を三代の間、或は銅器の類に刻せしに比すれば、漸く簡便となりしや必せり。予輩は文學使用の利便が、周末文學進歩の一因たるを忘るべからず。

(三) 周末文學の地理的考察

周末に在りては、三大思潮、劃然たる地理的配布をなして横流するを見る。曰く、北方思潮、曰く南方思潮、曰く中部思潮、而して、この三者は、最後に於て、兎も角も融會せられき。

周初の諸侯、千八百國、周制の行はれしは、王畿千里の小部分にして、其他は猶ほ舊分の舊慣を存し、風俗人情、各特色あること、之を詩の國風に徵すべし。魯は周公封を賜ひしに因り、最も周化したる地にして、孔子實に此に出で、三代文化の遺なる純粹漢族の北方思想は、全く修整せられて、百世を支配すべき一大勢成を形成せり。之に次いで、宋は殷の子孫の封せられしところ、自ら古例を尙び、簡易質朴の氣風あり、墨子實に此に生れき。儒墨の二教、古來互に反目せしに拘はらず、その根本に於ては、酷だ近似し、確かに同一の範疇に包括さるべきなり。

次に南方思潮の興起は、最も注意すべき一大現象にして、周末文學をして、多變多趣ならしめし、一大理因なり。その特色は、理想的分子を含み、且つ自由なるに在り、老莊の如き、その最たるものにして、後世に波及せし影響の偉大なるは、論を俟たず、殊

に屈宋の徒が優婉雅麗なる詞筆を以て、不朽の作品を遺したるは、支那律語の發展上、重要な位地を占むる者といふべく、上は三百篇の遺緒を紹ぎ、下は漢魏六朝に盛行せし辭賦の一體の爲に、その進路を開拓したりき、予は、こゝに支那民族が始めて純粹なる文學を得たるとともに、純粹なる文人を輩出したるを見て、今後趨向するところを豫察せずばならず。

こゝに謂ゆる中部思潮は、國際經濟等の方面に關係したる學者論客の一群をいふものにして、その最も古るき者を齊の管仲となす。その後、三晉の地に入り、謂ゆる法術家となり、遊説の客となり、その優絶のものは、往々にして秦に赴けり。而して、之が位地をいへば、固より中部に位するを以て、その性質上、常に前記兩者のいづれかに偏倚して、調和を發見せむとする傾向あり。文學史上、或は細緻なる考究をせずと雖も、思想の源流を探尋するものは、決して之を閑却すべからず。

北方には、孔孟荀あり、左氏等の史家あり。南方には、老莊列あり、屈宋等の賦家あり、中部の學者中、最も文學的なるもの、韓非あり、その後、秦に入り、西方文學となり、李斯を出しぬ、予は如上に順序に従ひ、勉めて體系的叙説を試むるを得じ。

(上)

(四) 孔子とその文學上の見解

予は孔子を以て、純然たる文學史上の人物となすものに非ず、然れども、支那文學に於ける功勞及び影響の決して少小に非ざるを思ふが故に、特に之を略論せむと欲す、但しその傳記の如きは、固より此に縷述するの必要を見ず。

儒教の創設者として、その教義を普及し、自己の理想を以て、種族永久の理想と爲さしめむとしたる孔子その人は、さながら宗教家的態度に似たるところありと雖も、その始に在りては、政治家となり、親ら手を以て之を構成せむと企てしなりき。その一生流浪、必ず諸侯に用ひられを欲しは、即ち此故にして、固より區々の名を求むるが爲に非ず、而して、その到底望なきを見るや、退いて之を言辭に托し、弟子に教へ以て百世に傳へたり。されば孔子は、當世の急務として、社會の改良、風潮の刷新に意を致せし外、人生の歸趣、何者たるかを教ふるを以て、その天職と思惟せしこと、殆んど疑ふべからず。蓋し孔子の理想とするところは、唐虞三代の治に在り。そも唐虞の三代は、むしろ有史以前に屬するものにして、尙書に見ゆるところ、幾多の潤色を除

去すれば、堯舜等の諸聖、當時なほ野蠻の境域を脱せざる群會中の優勢者に過ぎず。その果して、後世に稱せらるゝ如き者なりしや否や、全く知るべからずと雖も、孔子は己が考察せし國家的状態を以て、その屬性となし、之を鼓吹して、同胞に傳へむことを圖れりき。孔子の堯舜を説くや、その要、一個の方便たるに相違なかりしとするも、勉めて之を辯證せむと試むる傾向は、遂に謂ゆる尙古主義に流れ、百世の子孫をして、因循固陋、容易に移らざるの風を生ぜしめ、人文進歩の精神と甚だ背馳するに至れりき。然れども、人種的特質は、之を如何にするも、擺脫し得べきに非ず、之を以て、千古の大聖を罪せむとするは、蓋し酷に過ぐといふべきのみ。

彼の行動に於て、すでに然るが如く、その學問の本領は、治國平天下に在り。故を以て、政治の方針、社會の制度、經濟の見解に就いても、未だ嘗てその考察を着けざることあらず。かくの如くして、之に應ずる知識を求め、學問の價値を認識し、その研究し且つ領得したる範圍は、頗る廣濶なりと稱すべく、當時の世界、あらゆる事物に就いて、一も通曉せざるところ、無かりしこと、殆んど疑なきが如し。

しばらく彼が爲學の經歷に就いて觀察せむか、その生るゝや、最も周化したる魯

に在り、見たりし時、嬉戯するに毎に俎豆を陳し、禮容を設けしといふに非ずや。その後、周禮を問はむとして、周に適き、夏殷の禮を見むとして、杞宋に之き、學に常師なし、その蘊蓄の深きこと、想見すべきなり。

之を哲學者としては、固より深遠の域に到達せず、政治家としては、失敗に終りしと雖も、孔子は、當時に於て、道德の活模範たる外、唯一の文獻學者として、絶大の功績を成せりき。即ち前に述べたるが如く、詩書二經を編著、刪正し、易に就いて思索を著け、その體系を確立せしめしこと、是れなり。然れども、全く孔子の筆に成れるは、獨り春秋の一書あるのみ、後章別に、詳論するところあるべし。

かくの如き人物を以て、かくの如き事業をなし、孔子は、北方思想を固定して、之を弟子に傳へしが、その感化の偉大なる、門下に濟々たる多士を出し、業を受け身通ずるもの、七十有七人、戰國文學の興起は、孔子の力、與つて其多きに居る。

次に文學に對する孔子が見解の一斑を敘述せむ。孔子は、自ら詩を賦せしことあり、れども、未だ文學の獨立を認めず。詩三百、一言之を蔽うて思無邪といひ、又關雎を評し、樂んで淫せず、哀んで傷らずといひ、且つ洋々として耳に盈つるを嗟賞せり、而し

て、韶は美を盡くし、又善を盡くせり、武を謂ふ、美を盡す、未だ善を盡さざるなり」といひしと併看すれば、藝術の極致を以て、美と善との調和に在りとなすものにして、其門に於て詩を授けしは、教育上必要なる科目となせしか故のみ、詩を學ばざれば以て言ふなし」といひ、夫れ詩は以て興るべく、以て觀るべく、以て群すべく、以て怨むべく、之を邇くして父に事へ、之を遠くして君に事へ、多く鳥獸草木の名を識るといひし如き、即ち是れなり。故に子貢が淇澳を擧ぐるや、始めて興に詩を言ふべし」といひ、子夏が碩人を引くや、予を起すもの」といひ、南容白圭を三復せしを以て、その兄の子を以て妻はせたり。詩を以て、學問上の一大證典となし、之を道德上に應用し、新義を發明せむとする傾向は、こゝに最も明かに表示されたるを見るべし。支那の論詩家は、長しへに斯見を持し、容易に文學の眞性質を解知せず、かの輕文學の進歩、頗る遅々たりしもの亦た宜なり。予は孔子の本領、固より彼に在りて此に在らざるを知る。と雖も、最も忌憚なくいへば、彼は文學上、至大の功勞あると同時に、後來悠久の進歩に對して、多少の妨害を爲せして、ふ疑問なき能はざるものなり。

(五) 孔門の著述

孔子は、古代文獻を修整して、後世に傳へたり。而して、門下著述頗る多く、就中、價値の優絶なるものを論語となす。その編著の由來に就いては、聊か説あり。蓋し孔子すでに歿し、七十子の徒、學各尙ぶところあり、材各長ずるところあり、その分離散處に及ぶや、自ら異見を生じ、その道、頗る相合ふ能はず。この書を編むもの、かの紛糾の間に從つて、之を其源に達せむと欲す、而かも、上、獨り孔子の語を援けば、世の相去ることすでに遠く、眞偽を定むるところなかるべく、下、唯だ諸子の言を集むれば、彼此淆亂、是非繆錯、繁然一ならず、且つ旨に遠近あり、語に大小あり、聞者の賢否に因ると雖も、亦た是れ時義の在るところに從ふを奈何ともするなし。こゝに於てか、諸子其學尙ぶところ、其材長ずるところに就いて、其要を分つて之を採り、其宜を相して之を錯し、必ず之を孔子の語に纂會せしむ。然る後、旨、遠近に應じ、語、大小に適し、聖訓の眞疑はずして、諸子の文、各順ひ、諸子の善、乖かずして、孔子の道、愈よ全し、これ此書編次の大略なり。論語の編者に就いて、異論頗る多けれど、予は、こゝに戰國の初、孔門の徒の手に成りしを一言して止まむ。又命名の次第、傳承の跡及び上下兩篇の差異に就

いては、述ぶべきこと多けれども、今姑らく省畧に従ふ。

これを一言すれば、論語は孔子の言行録にして、世界四大聖人の一に數ふべき我が孔子の偉大なることは、此書に於て遺憾なく證明されたり。然れども、先秦文學の中、簡勁剴切なるもの、此書と老子・孫子とを推すと稱せらるゝが故に、讀者智識の深淺、經驗の多寡によりて領得するところ、自ら差異なき能はず。最も普通に言へば、何人と雖も、世故に老けたる後年に至るに及びて、聖人の言、確固不拔、その平凡に見ゆるもの、實は理の眞を得たるを悟了すべきなり。程子かつて曰く、論語を讀むや、讀了して全然事なき者あり、讀了して後、其中一兩句を得て喜ぶ者あり、讀了して後、之を好むを知る者あり、讀了し後、直に手の之を舞ひ足の之を舞ふを知らざる者ありと、又曰く、今人書を讀むを會せず、論語を讀むが如き、未だ讀まざるの時、是れ此等の人、讀み了るの後、又只だ是れ此等の人、便ち是れ會て讀まずと。又曰く、頗、十七八より論語を讀み、當時すでに文義を曉る、之を讀むこと愈よ久しく、但だ意味深長なるを覺ゆ、と。論語の性質、かくの如きのみ、されば之を體制上よりいふとき、純然たる道德教科書にして、むしろ文學的作品たるに遠きの感あること、勿論なり。然れども、往々に

して、支那に特有なる修辭の妙を見ることあるが故に、全く文學的價值なしといふを得ず。殊に比較上篇幅の長さものに至りては、時に塗飾の跡あり。その例、殊に下卷に多し。

孔子の言語文章を記せしもの、論語の外に孔子家語あり、三朝記あり、孝經あり、易の十翼は、孔子の著に非ずとするも、その中、多く孔子の言あり、その他、儒家の雜書に載するところは、大抵信すべきに近し。然れども、諸子の手に成りし書中に見ゆるものは、概して假托に出て、毫も歴史的價值を有せずといふも、不可なし。

家語もと二十七卷、湮滅すてに久しく、今傳ふるところは、晋時王肅の僞撰に係る。三朝記もと七編、今の大戴禮中、その一編を載す。蓋し孔子、魯の哀公に對して語りしとき、三朝公に見ゆ、故にその問答を録して、此名を冠せしといふ。孝經に就いては、古來頗る異論あり。普通には、孔子、その弟子曾參の爲めに孝道を説きし者と稱し、書經と同じく、今古兩文の異あり。この書は、はじめ、秦火に亡び、漢に至り、河間顔芝の藏するところに因りて、始めて世に傳ふ。漢書藝文志に曰く、夫れ孝は天の經、地の義、民の行、大なる者を擧げて言ふが故に、孝經といふ。漢興つて、長孫氏、博士江翁、少府后蒼、諫大

夫翼奉安昌侯張禹之を傳へ、各自家に名づけ、經文皆同じ。唯だ孔氏壁中の古文、異なりとなす。と。これ今文孝經にして、すべて十八章。之に次いで、謂ゆる孔氏壁中の古文は、かつて書經を論ぜしとき述べし如く、魯の共王、他書と并せて得たるものにして、竹牒科斗の文、三十二章あり。孔安國、又之が傳を作り因つて今文の價值なきを論じて曰く、今文十八章、文字誤多し。と。又曰く、河間王上るところ、誤多しと雖も、先出の故を以て、諸國往々にして之あり。と。二書の由來、略ぼ此の加し。蓋し孔子かつて曰く、吾が志は春秋に在り、行は孝經に在り。と。雜家の言、必ずしも憑據を値せず。こゝに於て、予は古今兩文ともに、漢初學者の偽作に係るを臆想せずむば非ず。長孫江翼、諸家の説といふ者、又何ぞ假托に出てざるを知らむや。凡そ漢の諸帝歴代の諡號、皆孝の字を冠す。學者當世に阿らむと欲して然るのみ。六經中、處々に孝を説き、之を盡さざるなければ、固より別に一經となすの必要なく、且つその内容、頗る淺薄なるに似たり。孔子は、禮に就いて言ふこと多かりき。然れども、夏殷の禮、すでに徵するに足らざりしが故に、その常に口にせしところは、周代現行の經文度数を稱せしものなるや、必せり。元來周の禮を記述せしものには、周禮儀禮あり、二書今傳ふるところは、多少

の疑議ありと雖も、その原本は周公の作りし者に係るといふ。蓋し周禮は、禮の綱領となるべき者にして、儀禮は、その儀法度数を細叙せし者なり。而して、禮記は、むしろその義疏と稱すべき者なれども、特に五經中に列せらるゝを以て、こゝに略述するの必要を見る。この書は、孔子の弟子及び後世學者の記せしところにして、或は其聞くところを撰し、或は舊禮の文を録し、或は變禮の文を叙し、又或は仁義を兼記し、得失を雜序せしものなり。その後、秦火に遭うて一たび滅び、漢の時、眞偽紛然として、雜出す。隋書經籍志に據れば、ともに二百十四篇ありしが、戴德その煩重を刪り、合せて八十五篇となし、之を大戴禮といへり。その後、戴聖又大戴の書を刪りて四十六篇となせしものを小戴禮といふ。漢末に馬融小戴の學を傳へ、又増して四十九篇となせり。然れども、四庫全書提要には、四十九篇、實に戴聖の原書ならむといへり。今謂ゆる禮記は、即ちこの四十九篇にして、その他の殘剩を別冊としたるものを特に大戴禮といふ。禮記の文、純駁一ならず、理義の淺深異同、亦た未だ言ひ易からずと雖も、筆意間ま高古勁健なるものあり。檀弓、大學、中庸、諸篇の文の如き、最も覆誦すべきを覺ゆ。大學は三代學校倫理教則の遺、中庸は原始的道德の宇宙論的解釋にして、ともに

儒教の根本なり。後世再び之を禮記中に抜いて別冊となし、論語孟子と並せて、四書と稱す。その傳統の歴史的考察は、予別に説あれども、煩を厭うて、こゝに縷述せず。世人中庸の一書、子思の作なるを知るのみ。子思は孔子の孫、儒門の正統を傳へたる人にして、漢書には子思二十三篇といひ、文獻通考には子思子七卷といひ、孔叢子には、中庸の書四十九篇といひ、孔子家語の後序には、中庸の書四十七篇といひ、子思の筆に成りしもの、蓋し頗る多く、中庸はその一部分に過ぎざりしが如し。然れども、今存するところの子思子七卷は、斷じて偽となすべく、その他、皆傳らず。彼は、まことに不幸なる大著述家なりき。他の孔門の著述を列擧すれば、曾參には曾子二十三篇あり、漆雕啓の後は、漆雕子十三篇あり、宓子賤には宓子十六篇あり、七十子の弟子には、景子三篇、世子二十一篇、魏文侯七篇、李克七篇、公孫尼子二十八篇、芋子十八篇あり。之に次いで、先秦儒門の末流には、周史六強六篇、寧越一篇、王孫子一篇、公孫固一篇、李氏春秋二篇、羊子四篇、董子一篇、侯子一篇、徐子四十二篇、魯仲連子十四篇、平原君七篇、虞氏春秋十五篇等あれども、唯だ其名を存するのみ。若し夫れ、最も有力なる儒教文學に至りては、孟荀二子の儼存、すでに足れりとなすべし。

(六) 孟子

孟子の學は、元と子思より出て、はるかに曾子に繼ぎしものなり。蓋し孔子の弟子中、德行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓あり、政事には冉有、季路あり、言語には宰我、子貢あり、文學には子游、子夏あり、普通これを十哲と稱すと雖も、思想開展の上に重要な位地を占むるものは、十哲外の曾子と十哲中の子夏と、是れのみ。曾子は、かつて魯と稱せられたるが如く、才氣に乏しと雖も、渾厚朴實の質、ひたすら内を尊びしは、孔子が爲に孝經を授けしと稱する傳説と、その親を養ひし事蹟とに就いて觀るべし。孔子すでに没し、門人皆三年の喪を終つて歸るや、子夏、子張、子游、有若の聖人に似たるが故に、孔子に事ふるところを以て、之に事へむと欲し、曾子に疆ゆ。曾子曰く、不可なり。江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を曝らす、皜皜乎として尙ぶべからざるのみと。而して、この企圖は、爲に全く罷みしが如く、予は司馬遷が七十子列傳、有若の條に記せし其後の事實を信ずる能はず。之を要するに、曾子は直覺的に心性の理を悟り、實行を重ぜしものにして、その子夏に於けるや、なほ後世陸朱の別あるが如し。かくの如くして、子思、孟子ともに性を論じ、その修爲の工夫、亦た向内的なりき。

孟子、名は軻、字は子輿、鄒の人、魯の公族孟孫氏の後、その生卒年月は、詳ならざれども、周の安王十七年に生れしといふもの、最も信ずべきに似たり。その母は、賢婦人にして、三遷斷機の教の如き、今尚ほ之を傳ふ。孟子年長ずるに及びて、魯に遊び、業を子思の門人に受く。その學、すてに成るや、一たび故土に歸り、鄒の穆公に仕へしことあり、又かつて任に遊びしことあり、後去つて齊に之く。宣王大志あり、孟子之に教へて、必ず湯武たらしめむと欲す、宣王大に喜び、擧げて賓師となし、その班、大夫に準ず。然れども、その言、未だ用ひられず。すてにして、母を喪うて魯に歸葬し、事畢つて復た到る。宣王之を師とし、祿十萬を與へむと欲せしも、辭して受けず、因つて客卿となす。この際、受業の門人、漸く多し。未だ幾ならずして、宣王漸く政事に怠るを觀、遂に去り、晝に止まること三日、出で、行くや、不豫の色あり、宣王幡然改悟、召し還さむを願ふの意、知るべきなり。すてに、鄒に還るや、宋王偃、仁政に志ありと聞き、其地に赴きしも、亦た意を得ず。滕に之いて、居ること二年、時に梁の惠王、戰敗の耻を雪がむと欲し、大に賢者を招くと聞き、遂に其地に至り、説くに仁義を以てす。惠王之を迂遠なりとして、用ひず。後一年、惠王薨じ、襄王立つ。孟子一見、人君に似ずとなし、去つて鄒に還る。時に

年七十左右。その後、専ら鄒魯の間に往來せり。すてにして、高足樂正子、魯の政を執り、因つて孟子を薦む。魯の平公、之を見むと欲せしも、嬖人臧倉の阻むところとなりて果さず。こゝに於て、道の天下に行はれざるを知り、その弟子萬章、公明高の徒と學を講じ、詩書を論じ、仲尼の意を述べ、前年四方に遊歴したる際、諸侯に説き、又平生弟子と問答せしところを録し、之を書に著はす。今傳ふるところの七篇、是れなり。他に外篇四篇ありといへども、漢より以前、すてに散佚せり。孟子は周の赧王三十三年卒す、年八十四といふ。

時勢は人を造る、故に孟子は戰國雄偉の氣風を受け、雋傑峻嚴、容易に犯すべからざるの概あり、孔子の溫潤と全く相似ず。かの孔子は麒麟の如く、孟子は獅子の如しといひ、孔子は水精の如く、孟子は氷の如しといひしもの、蓋し中れり。孟子の孔子に於けるや、全く師弟的敬慕の意を表し、尊崇して措かず。その數ば稱するところ、生民ありてより以來、未だ孔子の如きものあらざるなりといひしが、如き何ぞ其れ至れるや。而して儒家の道、世に行はれざるを見るや、諄諄然としてその嚮方を指し、その標的を示し、學者をして深委の窮るところを知らしめむとす。故に己の師奉すると

ころに反する者を見れば、辨駁して假借せず。蓋し前に述べしが如く、戦國の世、腕力の闘は諸侯の征戰を起したるとともに、智力の争は諸子の論難となれり、その此に至るや怪しむに足らず。今孟子と辨難せし諸子者流を擧ぐれば、性無善惡を唱へ、氣外を口にせしもの告子あり、神農の言を唱へ、尊農の説をせしもの許行あり、他に兼愛の説、薄葬の言を爲せしたる墨者夷之、非戰を唱へたる宋鈞等あり、唯だ莊子は殆んど同時に宋の地に在りしも、その書中、互に及ばず。兩者の學説及び境遇、自ら然ると雖も、まことに遺憾となすべきを覺ゆ。諸子に對する論争、かくの如く、就中、畢生の力を盡して、必ず推倒せむとしたるは實に、揚朱墨翟の學派なりき。この兩者、一時禹域の全土に普及し、至大の勢力を有せしを以て、孟子の之と争ふや、自然の勢、或は詭激に亘りしものなしといふを得ず。韓愈かつて孟子の功を稱して曰く、揚子雲曰く、古しへ楊墨路を塞く、孟子辭して之を闢くこと、廓如たりと。夫れ楊墨行はれ、正道廢す。孟子賢聖と雖も位を得ず、空言施すなし、切と雖も何ぞ補はむ。然れども、その言に頼つて、今の學者、尙ほ孔子を宗とし、仁義を崇び、王を貴び、霸を賤しむを知るのみ、その大經大法、皆亡滅して救はず、壞亂して收めず、謂ゆる十一を千百に存す、安んぞ、そ

の能く廓如たるに在らむや。然れども、向きに孟子を無かつせば、服は左衽にして言は侏離ならむ。故に愈かつて孟子を推尊して以て、功禹の下に在らずと爲すもの、これが爲めなりと。學者の孟子と稱する、實に此に始まる。その前後に於ける是非褒貶の歴史的概観は、こゝに詳述せず、而して愈の斯言、亦た必ずしも溢美に非ざるなり。孟子は、自ら持すること頗る高く、稱して孔子の後嗣となし、伊尹を學ぶといひ、管仲に比せらるゝを耻ぢ、公孫衍、張儀を以て妾婦の道を行ふものとなし、若し天下を平治せむと欲せば、今の世に當り、我を捨て、其れ誰ぞやといふに至る。その嘗て學習せしところ、必ず之を天下に施さむを欲し、他に求むるところあらず、その動かすべからざる北方人種固有の確信と、社會國家究極の理想との外に、燃ゆるが如き熱情と、白刃を踏むも避けざる底の敢爲の氣象とあり、天、大任を以て其身に降したりと爲し、艱苦と戦ふを辭せず、大丈夫を以て自ら居る。曰く、天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、志を得れば民と之に由り、志を得ざれば獨り其道を行ふ、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、此を之れ大丈夫といふと、その人格の高潔偉大なる、千歳の下、猶ほ欽慕するに堪へたり。

孟子の説、性善を主とし、仁義に本づき、その欲するところ、唯だ人君に教へて、その道を弘むるに在るのみ、而して一生流落、その志を得ざりしものは必ずしも梁の惠王の言へる如く、迂濶にして事情に遠きが故に非らず、その進説の方法、當時謂ゆる權謀術數の士と頗る異なるものあり、人主の意を迎合すること能はざりしに由るや必せり、孟子の諸侯に見ゆるや、胸中の奇を吐き盡して、少しも憚るところなく、或は排撃論難して、毫も懼るゝことなし、然れども、予は、孟子が辯説の形跡に就いて遺憾なき能はざるものあり、その必ず他を屈服せしめむとするや、往々に詭辯に陥るを免れざりしこと、是れのみ、告子と性を論ずる數條の如き、齊、燕の爲に敗らしに會し、その之を勧めしに非ざるを辯じたるが如き、假りに數歩を譲り、たとひ理義を失せずとするも、なほ自ら責任を重ぜざるに似たるものあり、且つ徑に其辭を省き、善く事理を盡さざるを疑はずむばあらず。

程子かつて曰く、孟子些の英氣あり、僅に英氣あれば、便ち圭角あり、英氣甚だ事を害す、と、その事を害すと、否とは、姑らく之を措き、要するに、是れ時勢の感化のみ、然り彼の人物は、決して幽僻冷寂なる思索家に非ず、翻つて、愉快劇烈なる辯論家なり、哲

學者に非ずして、文學者なり、故に空想に富みて、感情に熾に、分拆よりも綜合を事とし、歸納よりも演繹に赴き、推理的探究よりも感情的獨斷多く、その言は抽象的ならずして、具體的なり、すでに具體的といふ、その文を爲すや、明確簡切を貴び、最も比喻に長ず、枯澹なる倫理學説を化して、多趣なる大文學と爲せしもの、職として之に由る、更に一言すれば、儒門の大文學者なり、孟子の書、世に行はれ、今に泯滅せざるもの、豈に偉ならずといはむや、嗚呼、今の學者、何ぞ文藻に乏しきの甚しき、かくの如くして其書の必傳を望む、木に縁つて魚を求むの類のみ、難いかな、難いかな。

孟子の書、全體に於て議論の不完全なるもの、固より多きに居ると雖も、快説卓見特に一二を以て數ふべからず、之を一概して、謂ゆる英氣、筆端に迸る處、直に以て、その面目を想見すべく、善く一世の智勇を推倒し、萬古の心胸を開拓するに足る、章に長短あり、言に大小あり、往くところとして可ならざるは無く、牽牛、齊桓、晋文及び浩然の氣の諸章の如き、變化を極盡し、何等の層折、その小品に至りては、齊人一妻一妾の章の如き、全篇叙事を以て之を遣り、結末の數十字を以て其意を發す、輕妙工緻、文心頗る細、之を要するに、孟子は、學問に於けるよりも、氣概を以て勝るもの、その文も

亦た人物の反映にして、深奥馴雅よりも俊爽雋偉を以て勝るを見る。

次に前人の評語二三を挙げむ。羅大經曰く、孟子は、儀秦の齒舌を以て、周孔の心胸を明かにし、卓識明辯、萬世を蘇醒するものなりと。陳繹曾又曰く、孟子議論に善し、先づ其綱を提して後に詳説す。只だ是れ見識高く、胸中より流出す、盤根錯節の處を辯論する、譬喩を以て輕々論破す、とともに肯綮に中るを疑はず。

漢より以後、孟子の書、未だ汎く世に行はれず。その言、儒家の正に非ずと誤解さればなり、而して、韓愈の後、程門はじめて之を用ひ、學庸論語と合せて四書となし、儒教の基礎を研究し、その調和に本づいて、新學説を出すを得、朱子より以後、之を尊崇して異論なし。然れども、是れ哲學史上の問題なるが故に、こゝに述べず。予輩は次に儒教の他の分派たる荀子に就いて觀るところなかるべからず。

(七) 荀子

曾子及びその學統を傳へたる思孟の徒、修性を主とせしに反して、子夏及びその末流は修禮を以て唯一の學となし、徃々にして、文獻學的研鑽に従事せり。子夏は卜商の字、孔子より少きこと四十四歳、門人中に在りては比較的年少なるものと雖も、

その特に數ば稱されしを見れば、才力の非凡なること、知るべきのみ。かつて問うて曰く、巧笑倩兮、美目盼兮、何の謂ぞや、と。子曰く、繪事は素を後にすと。曰く、禮は後か、と。子曰く、商や、始めて與に詩を云ふべきのみ、と。子貢かつて問ふ、師と商と孰れか賢なる、と。子曰く、師や過ぎたり、商や及ばず。然らば、師は愈れるか。曰く、過ぎたるは、猶ほ及ばざるが如し、と。その及ばざるは、徳に在り、孔子又かつて之に告げて曰く、汝、君子の儒となれ、小人の儒となる勿れ、と。而して、之と子游とを擧げて文學に長ずる者と爲せり。こゝに謂ゆる文學は、徳行に對するの謂にして、古代文獻の研究に就いて別に神解あるを指せしものに過ぎず。かくの如くして、子夏は専ら形式主義を重んじ、内に向はずして、外に傾き、古代聖賢の事跡を闡明して、之を後進に傳へたり。

形式主義は因習法則を明かにするの謂にして、最も學び易きものなり。故に子夏の弟子、頗る多く、且つ諸種の異分子を加へ、その門戸、又大なりき。禽滑釐は墨家なり、田子方は莊子を出せしといふ、而して皆、子夏に學びたり。蓋し孔子すでに没し、子夏西河に教授し、魏の文侯の師となる。その間の事、論語禮記に散見するもの、一として子夏の勢力、當時に盛なりしを證せざるなし。その門人中、儒家の眞を失はず、且つ最

も著名なる者を擧ぐれば、曰く、肝臂子弓、曰く、魏文侯、曰く、段干木、曰く、高行子、曰く、曾申、曰く、公羊高、曰く、穀梁赤、曰く、李克、その他、猶ほ多く、或は著書をなし、或は傳習を事とし、漢代訓詁の備を作れりき。子夏の學、すてに講習を先として、修養を後にす、故に之を人格涵養の上よりいへば、固より論なきに非ざれども、道德と文學とを分隔せしめたる點に於ては、頗る功勞ありといはざるべからず。その倫理的教育は、唯だ禮あるのみ。子游は、子夏と同じく文學を以て稱せられし人なりと雖も、子夏の末流爲學の工夫に對して、頗る慊らざる者ありしが如し。曰く、子夏の門人、洒掃應對、進退に當れば可なり、抑も末なり、之を本づけば無し、之を如何と。世愈よ下れば、その弊愈よ多く、戰國の頃に至りて、その徒なほ勢を逞うし、漸くにして、虚偽の風を醗醸せむとす。故に、荀子かつて曰く、その衣冠を正うし、その顔色を齊へ、曠然として終日言はず、是れ子夏氏の賤儒なりと。然れども、是れ夫子自ら道ふものに非ざるなきを得むや。荀子は、疑もなく、子夏の學統を傳へしものなり。その書中、聖人を語るや、必ず孔子子弓を並稱す。子弓は、かつて易を商瞿に學びしことありと傳ふれども、實は子夏の門人なり。されば、荀子はたとひ直接に子弓に學びしことなしとするも、之に私淑せ

しものにして、又子夏を尊尙せしものに外ならず。荀子の學者的態度は、全くその餘風にして、その説の過激なるは、主として時勢の影響に因る。

戰國時代の齊は、上に威宣あり、下に孟嘗君あり、國富み、兵強く、天下游士の多く聚まるところ、而して、此に群聚したる學者を總稱して稷下先生といふ。之を先にして、鄒忌あり、孟軻あり、之を中にして、鄒衍あり、淳于髡あり、慎到あり、環淵、接子、田駢、鄒奭あり、皆命ぜられて、第を康莊の衢に開き、門を高くし、屋を大にして、之を尊寵し、稱して列大夫といふ。諸子又書を著して治國の事を云ふ。その最も注意すべは稷下の學者、諸種の異分子より成り、論難辨駁、以て日を送り、戰國の末に於ける學術の巢窟たりしこと、是なり。荀子は何人に就いて學びしものか、今詳かにすべからずと雖も、その修業をなせし地は、實にこの稷下なりき。

荀卿、又孫卿といふ之に就いて、異説あり。司馬貞、顔師古以來、相承けて以爲へらく漢の宣帝の諱を避け、荀を改めて孫となすと。而して、謝朓曰く、荀と孫とは音同じくして、相通するのみ。宣帝名は詢、漢時尙ほ嫌名を諱まず、後漢の李恂及び荀叔爽、荀悅、荀或の如きは、俱に本字を書す、何ぞ獨り周時の人名、諸載籍を見ゆる者に及ぼし

て之を改稱せむや。若し然らしめば、左傳の荀息より荀瑤に至るまで、皆改むべきもの多く、何ぞ改めざるや。蓋し同意にして、遂に移易するか。荆軻、衛に在つては慶卿といひ、燕に在つては荆卿といふが如く、漢宣の諱を避くとすべからずと。この説、之を得たるに庶幾し。名は况、趙の人。年十五、始めて齊に學び、長く其地に留まる。田駢の屬、皆すでに死し、齊の襄王の時、荀卿最も老師たり。當時なほ列大夫の缺を修め、荀卿三たび祭酒となる。齊人或は之を譏す、荀卿乃ち楚に適く。その書中、屢ば諸侯に遊説せし時の言を載するもの、おもふに、この間の事に係るなるべし。はじめ秦の昭王に見えて、三王の法を説く、昭王方に戰伐を喜び、用ふる能はずして止む。

すでに楚に入るや、楚相春申君、以て蘭陵の令となす。或は春申君に謂つて曰く、湯は七十里の地を以てし、文王百里の地を以てし、ともに王たり。孫卿は賢者なり、今之に百里の地を與ふ、楚、それ危からむか。と。春申君、乃ち謝す。荀卿去つて趙に之き、かつて兵を孝成王の前に論ぜしことあり。後に客或は春申君に謂つて曰く、伊尹、夏を去りて殷に入り、殷王となりて、夏亡ぶ。管仲、魯を去りて齊に入り、魯弱くして、齊強し。故に賢者在るところ、君尊くして國安し。今孫卿は天下の賢人、去るところの國、それ安

からざらむか。と。當時の諸君、客を養ふ、單に豪舉に過ぎず、信に人才を遇するものに非ざること、これに因つて知るべく、荀卿重きを一時に爲せしこと、又想ひ見るべきなり。而して、史記に春申君死して荀卿廢し、因て蘭陵に家すとあるを見れば、荀卿一たび趙に之きしと雖も、後又呼び還され、一生楚に在りしもの、如し。

荀卿の生卒年月、考へ易からず。四庫全書提要に曰く、劉向序録を考ふるに、卿、齊の宣王の時を以て、來りて稷下に遊び、後に楚に事ふ。春申君死して、卿廢す。然れども、史記六國年表、春申君死せし年を載す、卿の年當に一百三十七なるべし、理に於て近からず。晁公武の讀志書謂ふ、史記云ふところの年五十、十五の譌たりと。意ふに其れ或は然らむ。宋濂は、又以て齊の襄王の時、稷下に遊ぶとなす、亦た未だ本づくところを詳にせず。之を總ぶるに、戰國の時の人のみ、その生卒年月は、すでに考ふべからず。と。今史記に載する五十を以て十五を爲すも、僅に三十五年を減ずるのみ。春申君死する時、荀卿年百二、なほ幾年生存せしとすれば、又理に近からず。宋濂の説、蓋し可なり、といふべく、戰國の末に當りしは事實にして、漢初の學者中、荀卿に學びしもの、少からざればなり。劉向又云ふ、蘭陵多く善く學を爲す、蓋し孫卿を以てなり。長老今に

至るまで稱す、曰く、蘭陵の人喜て字して卿となす、蓋し孫卿を法とするなり、と。荀卿が古代文獻の傳習に偉功あると同時に、その徳化、一郷に及びて長く浚びざりしこと、知るべきなり。

荀子の書、今傳ふるもの三十二篇、劉向序録に云ふ、孫卿の書、凡そ三百二十三篇、重複二百九十篇を除き、定め著して三十三篇となし、題して新書といふ、と。漢書藝文志之を承けて孫卿子三十三篇といふ。然らば、後世一篇を佚するか、或は二篇を誤り合せて一篇となすものあるか、或は漢志の三、實に二の訛謬なるか、然れども漢書藝文志に、賦二十五家の内、孫卿十篇を載せ、今存するもの、禮、知、雲、蠶、箴の五篇にして、その末二篇は、注家以て春申君に贈る詞となし、猶ほ三篇を失ふといふより見れば、荀子今存するもの、斷して全書に非ず。後に唐の楊倞舊第を分ち、易へ編して二十卷となし、その注を作り、更めて荀子といひ、清の謝墀、箋釋を作り、紕繆盡く釐正し、始めて渙然として讀むべきに庶かし。

周末秦漢の間、孟荀並び稱す、小戴傳ふるところ三年間、全く禮論篇に出て、樂記、飲酒義に引くところ俱に樂論に出て、聘義、子貢玉を貴び珉を賤むを問ふ、亦た法行論

と同じ、大戴傳ふるところの禮三本論も、亦た禮論篇に出づ。その勸學篇は、荀子の首篇にして、宥在篇末、大水を見る一則を以て之に附し、哀公問五儀は、哀公篇の首に出づ。荀子の學、禮を主とし、議論之に係るもの多く、その戴記に採録されしもの、頗る故あり、而して是れ、一方に於ては、その學の漢代に行はれしを證する者なり。荀子の學、その後、久しく行はれず、その然る所以は、性惡の説、之が累をなせしが故のみ、唐の韓愈に至り、はじめて之を稱せり。

人を教ふる、先づ面を和げ、言を好くし、百方之を勸誘し、唯だ其人自ら利を得ざらむを懼る。然れとも、痴愚の輩聽くなくむば、唯だ命令あるのみ。孔子の仁を説き、孟子の義を説く、猶ほ世道人心の頹廢未だ甚しからざる時に於てし、荀子の禮を説く、仁義すてに行はれざる後に於てす。仁義すてに心より生ずといふ、重ずるところ内に在り、故に孟子は性善に論及せり。禮を以て聖人の作爲せしところとなす、重ずるところ、外に在り、故に荀子は性惡を標榜し、反映的に禮の絶對的價値を認識せり。之を要するに、性惡説は、故らに孟子に反抗して然るものなりやの疑問なきに非ざれども、實は當時人心の汚穢に憤激せしもの、其多きに居るを疑はず、史記に荀子述作の

所因に記して、下の言あるを見る。曰く、荀卿濁世の政、國を亡ぼし、君相を亂るの屬、大道を遂げずして巫祝に營み、禳祥を信ずるを嫉み、鄙儒小拘、莊周等の如き、又滑稽俗を亂る。こゝに於て、儒墨道德の行事興壞を推し、序列して、數百萬言を著はす。とかつて試に之を論ず、善美の躬に在るや、忻然として、自ら喜び、醜惡の身に在るや、瞿然として自ら懼る、これ人の情なり。孟子その自喜の情に因り、その自暴の心を棄てむことを欲す、故に先づ之を啓くに性善を以てし、之をして、内に省みて、人の禽獸に異なる所以を知らしめ、然る後、始めて教化を施すべきなり。荀子の時に及びては、風化の敗壞、亦た己に甚しく、人々自棄を甘じ、復た修飾せず、性善の説、久しく人の耳に慥れ、以て流俗を率ゆるに足らず、こゝに於て、か荀子はその自懼の情に就いて、その自棄の心を捨てしめむを欲す、故に先づ發するに、性惡を以てし、激昂して自ら聖人に拔くことを得せしめ、然る後、方に始めて教化得て施すべきなり、これ即ち荀子の意のみ。

荀子の禮を説くや、その發展を探究せずして、その効力を重ず、故に之を稱して聖人の爲となし、以て民に教へむとするよりも、むしろ以て民を規せむとす。曰く、禮樂を起し、法度を制し、以て人の情性を矯飭して、之を正し、人の情性を擾化して、之を導く、と。今夫れ、外部身體の動作を以て、内部心靈の變化を調攝せむとするは、極めて不自然的にして、或る場合に於ては、機械的勢力の補助を要すること、勿論なり。こゝに於てか、荀子は知らず識らずの間、道德的政治主義を超越し、期せずして、法治主義の範圍に近接したるものにして、變通を重じ、後王を以て理想となすに至れり。その門に韓非李斯の徒を出したる、毫も怪むに足らず、但し、荀子の所説、之を極端に推究するときは、人性を戕賊して後、止まむとするの意なきに非ず、これ後世の誹議を免れざる所以なり。

蘇東坡の荀卿論は、その本意必ずしも荀子に在らず、爲にするところありて然るものなりと雖も、その言、人耳に入るの久しき、後世を誤り易し。史記列傳に、李斯かつて弟子と爲り、すでにして秦に相たりといへり。東坡乃ち曰く、荀卿なる者は、喜んで異説をなして譲らず、敢て高論をなして顧みざるものなり。意ふに其人と爲りや、剛愎不遜、自ら許すこと、太だ過ぎ、かの李斯なる者は、又特に甚しきのみ。荀卿特に一時を快うするの論を以て、自ら其禍の此に至るを知らざるなり。その父、人を殺して仇

を報ず、その子且さに劫を行はむとす。荀卿王道を明かにし、禮樂を述べ、李斯その學を以て天下を亂る。その高談異論、以て之を激するあるなりと。李贄曰く、宋人云ふ、荀卿の學、醇ならず、故に一たび李斯に傳はりて、儒を坑にし、書を焚くの禍ありと。弟子惡をなして、罪師に及ぶ。この理あらむや。若し李斯をして、荀卿を累はすべくむば、吳起も、亦た曾子を累はべし。鹽鐵論に云ふ、李斯は荀丘子と同じく、荀卿に事ふと。荀丘子は、道を白屋の下に修む。李斯をして、荀卿を累はすべからしめば、荀丘子も、亦た當に荀子を封ぜむことを請ふを得べしと。この言、戲謔に近しと雖も、頗る肯綮に中れり。李斯の政治的行爲を以て、荀卿の人物を攻むるは、深文慘酷の論たるに過ぎず。學者いたづらに東坡爲にするの言を以て、眞となすなくむば可なり。

荀子は、たしかに學者的にして、少くとも、當時の趨勢を知れるものなり。然れども、實行的手腕に乏しく、到底戰國策士の後塵を拜するに堪へず、情熾にして才短く、進說の方法、孟子に比して、更に迂遠なり、故を以て遂に諸侯に用ひられず、執拗自重の性、善く超然地歩を占むるに適すと雖も、頑強尊大、敬して遠ざけられし、の看なき能はず。こゝに於てか著述を以て千古の名を庶幾し、始より意を用ひて筆を執れりこ

れより先有數なる北方文學は、要するに、學者の副次的産物に外ならず、彼等は、大抵自家の學說を實行せむことを主とし、辯論の結果、唯だ一部の書を形成せしものにして、その天資は、期せずして、文學的作品に近似するものを得たりといふのみ論語。孟子は、之を一概して學術講話の筆記といふべく、編者意を用ひて、之を修整せしと雖も、決して、體系的構成を有すものに非ず。たゞ荀子に至りては、全く其風を改め、はじめて眞正の著述をなせり。之を要するに、荀子は、北方儒教文學の開祖といふべきものなり。

荀子の主とするところは、修辭に在り、彼は、子夏の流を汲めるものにして、固より文學を重じ、且つその主義、常に形式に執着せしが故のみ。而して、その特に經營を費せしは、南方の詩形たる辭賦に指を染めし一事を見て、知るべく、或は楚に遊びし結果ならむと雖も、性來の宿好に因るや必せり。惜いかなその作るところ、毫も文學的價值なく、たゞ形式を備へしといふに過ぎず、字面句法の上に於ける曲折紆餘の趣や、見るべしと爲すのみ。然れども、予は之に因つて、荀子の腹筒、頗る宏富なるを認む。

荀子學博くして辭に富むと雖も、才氣に乏し、故にその文は辨博富麗を極むと雖も、轉折力なく、人を勾引して覺えず、全篇を讀了せしむる底の活趣を認めず。今試に、孟荀二子の文を取りて、之を比較するに、荀の冗漫にして、蕪雜なるは、孟子の簡單にして、勁切なるに及ばず、但し理を説くの精密にして、詳覈なるは、或は過ぐるところあり、孟子は篤々皆可なりと雖も、荀子は美惡相半ばす、たゞ稱すべきは雅麗の品致あるのみ、その情に熾なるや、往々にして氣焰頗る昂ることあり、然れども、怒罵の言人の肺腑を刺する能はず、たとへば老婆の絮言、いたづらに煩々たるが如く、醉漢の爛語、頻りに呶々たるが如し、非十二子の一篇、激昂の極、孟子に於て見ざるところなりと雖も、その文の活氣なきを憾む、之を要するに、文は才を以て天然の排置をなすべく、氣を以て、語句を運旋すべし、才氣なき者の文は、遂に人を動かす能はず、文を爲るもの、荀子を以て戒となせば、幸に誤らざるに庶幾からむ。

(八) 春秋及び三傳

孔子は、さすがに多能なる學者なりき、故に詩を刪し、書を修し、易を治めし外、魯の史記によりて筆削し、春秋の一書を制定せり、その書、隱公元年より起りて、哀公十四年に終る、十二公、二百四十二年、天下の事變を擧げて、盡く之を褒貶黜陟し、夫子亦た頗る之を自負せしもの、如し、史記に曰く、乃ち魯の史記に因て、春秋を作り、上は隱公に至り、下は哀公十四年に訖るまで、十二公、魯に據り、周に親しみ、殷を故にして、之を三代に運らす、その文、辭を約して、指博し、故に吳楚の君、自ら王と稱し、春秋之を貶して、子と曰ふ、踐土の會、實に周の天子を召す、而して、春秋之を諱んで曰く、天王河陽に狩す、と、この類を推して、以て當世を繩す、貶諱の義なり、後に王者ありて、擧げて之を聞き、春秋の義、行はるときは、天下の亂臣賊子、懼れむ、孔子位に在りて、訟の文辭を聞くとき、人と共にすべきものあれば、獨り有せざるなり、春秋を爲るに至り、筆すべきは、筆し、削るべきは、削る、子夏の徒、一辭を贊する能はず、弟子春秋を受く、孔子曰く、後世丘を知るものは、春秋を以てせむ、而して、丘を罪するものも、亦た春秋を以てせむ、と、孟子又かつて曰く、世衰へ道微にして、邪說暴行作るあり、臣その君を弑するも

の、これあり、子、その父を弑するもの、これあり、孔子懼れて春秋を作ると。春秋の一書、實に孔子の心血を瀝ぎ、名教の頼りて寓するところなり。然れども、予を以て之を見れば、春秋は真正の道德書に非ず、又真正の歴史に非ず、忌憚なくいへば、無所屬の閑著述なり。詩を以て教育に資せむとしたる孔子は、歴史を以て道德に資せむとし、仍つて兩者の性質を誤認し、後世に於ける進歩を妨害したり。支那に於ける史學の發達遅々たりしもの、孔子亦た其責を負ふべきなり。

春秋は、魯の史記の名と稱すれども、周代諸侯といはず、實は三代史籍の通名にして、その證頗る多し、而して、其義古來說者の言多様なりと雖も、實は極めて簡單なるものにして、唯だ年表といふに過ぎざりしならむ。現に孔子の作るところ、全く年表の體裁を爲し、而かも、道德上の賞罰を爲すに急にして、因果的關係を明かにせざりしを病むのみ。或はその文致の謹嚴を推稱するものあれども、予甚だ感なき能はず、その賞罰の運用、慎重なる態度に出でしは事實なりと雖も、かゝる簡單なる文章に於て、何等の修辭的技工を認むべきか。聖人必ずしも、文辭に巧ならず、道德の實行と文章の修辭とは、固より相關せず。孔子にして、文に巧ならず、ざりしといふ疑問ありと

するも、何ぞ聖人の價值を損ぜむ。予は、かの本支の別を混ざるもの、愚を笑ふものにして、實は下の如くいはいはむと欲す。孔子は歴史に指を染めしと雖も、真正の歴史を知らず、その筆するところ、亦た毫も價值なかりきと。

孔子の春秋、その位地と勢望とを利用し、意を用ひて筆削し、之を後世に傳ふ。試に今日より見れば、上に述べたる如く、勿論殆んど言ふに足らざれども、その述作は、決して徒勞ならず、爲に有力なる歴史文學の發生を促したり。謂ゆる左公穀、春秋三傳、これなり。

先秦時代の歴史文學、一も南人の手に出でずして、さながら北方特有の産物たるの觀を爲せるを怪しむなかれ。蓋し理想的傾向あるものは、現實の事象に對して、その價值を認めず、因果的關係と歴史的憑據とを蔑視するを常とするに反し、政治道德を以て、人文の基礎と思惟せるものは、史的觀念の尊重を以て、その生命と爲せばなり。故に尙書は北人の手に成り、春秋を傳せしもの、亦た皆北人なりき。

春秋の傳とは、他に非ず。かの不完全なる年表を敷衍し、事實相互の關係を明かにしたる者の謂なり。而して普通世に知られしもの三、曰く左氏、曰く公羊氏、曰く穀梁

氏なほ他に二人、鄒氏、夾氏あり。但し鄒氏は師なく、夾氏は書あらず、ともに後漢に出て、且つ傳はらざるが故に、今考ふる能はざるのみ。宋に及びては胡安國の傳あり、その書、今存すと雖も、價值はるかに下れりと謂はざるべからず。次に三家の傳記及び著作の歴史的概観に就いて述ぶるところあるを得む。

左丘明を以て、孔子同時の人、名を丘明となせしは、劉向の七略に始まり、劉歆、桓譚之を承け、班固之を書し、魏晉以來の學者、毫も異議を着くるもの無かりき。漢書藝文志に曰く、周室すてに微、載籍殘缺す、仲尼前聖の業を存せむを思ひ、乃ち稱して曰く、夏の禮、吾能く之を言ふも、杞微するに足らざるなり。殷の禮、吾能く之を言ふも、宋微するに足らざるなり。文獻足らざるが故なり、足れば、吾能く之を徵せむと、魯は、周公の國なるを以て、禮文物に備はり、史官法あり、故に左丘明と、その史記を觀、行事に據り、人道に仍り、興に因つて以て功を立て、敗に就いて以て罰を成し、日月を假りて、以て曆數を定め、朝聘を藉り、以て禮樂を正うし、褒諱貶損するところあり、書し見すべからず、弟子に口授す、弟子退いて言を異にす。丘明、弟子の各其意に安んじ、以て其眞を失はむを恐るゝや、故に本事を論じて、傳を作り、夫子空言を以て經を説かざるを

明かにするなり。春秋貶損するところ、大人世に當り、君臣の威權勢力ある、その事實皆傳に形はる。之を以て、其書を隠して宣はず、時難を免るゝ所以なり。末世に及びて口説流行、故に公羊穀梁、鄒夾の傳ありと、この數條を以て、孔子と左丘明との關係、丘明が傳を作りし事情、左傳の書久しく世に出てざりし所以を解すべし。丘明は、如何なる人ぞ。論語に、孔子かつて之を推稱したる語を載す、曰く、巧言令色足恭、左丘明之を耻づ、丘も亦た、之を耻づ、怨を匿し、其人を友とする、左丘明之を耻づ、丘も亦た之を耻づと、然らば、丘明は史才あり、兼ねて德行ある一賢者なり。或は二者、別人となすものあれども、史才ある丘明、孔子の春秋を修むるに與かれりとせば、何ぞその賢者たるを怪まむ。或は又孔子の春秋を修むる、子貢の徒すら、一辭を贊する能はず、何ぞ丘明と與にせむやといふものあれども、史は別才にして、丘明固より七十子の徒と同視する能はざる者なしとせむや。蓋し漢代に於て、左氏の學官に立てらるゝや、最も遅かりき。これ學者疑議を生ずる所以、或は又、唐の趙匡、傳經に合はざるを攻むるが如き、宋儒相繼いで之に和し、陳善、左氏を以て六國の人と爲せしが如き、朱子が度不臘矣を以て、秦人の語となし、因て丘明の生地魯に非ずといふ疑を挾みしが如き、

葉夢得が左傳の記事、智伯に終りしを以て、當に六國の人なるべしと論ぜしが如き、ともに其書の性質を十分解知せざるに出でしものにして皆取るに足らず。且つ夫れ、古書特に史乘の類に在りて、後人の續撰、固より多きは、常に見るところ、左氏を以て、孔子同時の人、名を丘明となせしは、その説最も古く、據るところありしや必せり。而して、諸家の論、これを否定するに十分ならずとすれば、予輩は、舊に依りて、之を信ずるの外あるべからず。之を要するに、丘明は、時代に於て、公穀二氏に先ち、その傳、尤も信すべきものなり。

公羊傳は、公羊高の後裔、公羊壽の筆するところなり。初め子夏、春秋を公羊高に傳へ、高その子平に傳ふ、平の子地、地の子敢、敢の子は壽なり。皆父子相傳へて、其説を守る。漢の景帝の時、壽、齊人、胡毋子都と、竹帛に著はす。これ、徐彥の公羊傳疏に、戴の序を引きし者にして、今の書隱公二年、何休の注、これに同じ。翻つて又傳中を見るに、子沈子曰あり、子司馬子曰あり、子女子曰あり、北宮子曰あり、また高子曰あり、魯子曰あり、蓋し傳授の祖、盡く公羊子に出でしに非ず。定公元年の傳、正棺於兩楹之間の二句、穀梁亦た之を傳し、直に沈子と稱し、公羊と稱せず。知るべし。姓名を著はさざるもの、亦

た盡く公羊子に出でざるを、又子公羊子曰あり、大凡子を姓の上に冠するものは師の尊稱なり。公羊高自ら此稱を爲すものならむや。これ高の手に成らず。又壽一人の撰に非ず。胡毋子都の助成に係るもの多きの好證左なり。之を要するに、公羊傳は、公羊高一家傳承の説を主とし、兼ねて他人の言を取り、漢代に至りて、始めて大成せしものなり。

穀梁子、名は喜といふこと、普通なれども、異説多し。應邵、名は赤なりといひ、阮孝緒、名は假、字は元始なりといひ、揚士助、之を合せ、名は假、字は元始、一の名は赤なりといへり。然れども、假と赤とは、音相類し、喜も亦た甚しき差謬あるに非ず。おもふに、同音の轉訛に非ざるか。二子ともに前に述べしが如く、子夏の門人なりといふ。その時代、また推して知るべし。而して、靡信以爲へらく、穀梁氏は、秦の孝公と同時の人なりと、その年代は、るかに後れ、且つ其據るところを知らざるを、奈かむ。然れども、穀梁傳は、喜の自撰に非ず。前に述べたる如く、この書、定公元年、沈子曰と稱するもの、公羊載するものに、同じく、公羊穀梁ともに、子夏に出で、其師を同うし、後世にいたりて、猶ほ親近の關係ありて、然るものならむ。また六羽を獻するの一條、穀梁子曰と稱す、この書

すでに自著なれば、自ら特に名いふべからず。且つ此條、また尸子曰を引く、尸子名は倭、商鞅の師なり、鞅すでに誅せられ、罪を恐れ、逃れて蜀に入る。其人また穀梁の後に在り。穀梁預め後人を攪引すべからず、自著に非ざること、何の疑ふところあらむ。然らば、何人の筆するところぞ。揚士勛の疏にいふ、穀梁子、經を子夏に受け、經の爲に傳を作る。故に穀梁傳といふ。孫卿（即ち荀子）に傳へ、孫卿、魯人申公に傳へ、申公、博士江翁に傳へ、その後、魯人榮廣大に穀梁に善く、又蔡千秋に傳ふ。漢の宣帝、穀梁を好み、千秋を擢て、郎となす。これに由て、穀梁の傳、大に世に行はると。然らば、穀梁は、幾分自ら筆せしところありとするも、漢人の増訂續撰に因りて、始めて完成したるものならむか。

春秋の三傳、ともに孔子筆削の意を發揮したるものにして、殆んど注釋と稱すべきものなれども、その趨向するところ、各異なれり。予は私見を述ぶるに先ち、前人の評語を擧げ、讀者をして自ら悟るところあらしめむ。

鄭玄の六藝論に曰く、左氏禮に善く、公羊讖に善く、穀梁經に善しと。范武子曰く、左氏は艶にして富、その失や誣なり。穀梁清にして婉、その失や短なり。公羊辨にして裁

その失や俗なりと。劉知幾曰く、左氏の義、三長あり、二傳の義、五短ありと。劉厚父曰く、左氏は赴告に拘はり、公羊は讖障に牽かれ、穀梁は日月に窘むと。崔伯直曰く、左氏之を淺に失し、公羊之を險に失し、穀梁之を迂に失す。と。陳以道曰く、左氏の失、專にして縱、公羊の失、雜にして拘、穀梁縱せず、拘せず、而して之を隨に失す。と。胡文定曰く、事は左氏より備はれるはなく、例は公羊より明かなるはなく、義は穀梁より精なるはなく、或は之を誣に失し、或は之を亂に失し、或は之を鑿に失す。と。又曰く、左氏は、叙事本末を見、公穀は辭辨にして義精し。經を學ぶに傳を以て案となせば、當に左氏を閱すべく、辭を玩ぶに義を以てするを主となせば、當に公穀を習ふべし。と。葉少蘊曰く、左氏事を傳へて義を傳へず、之を以て、史に詳なり、而かも事未だ必ずしも實ならず。公羊穀梁、義を傳へて事を傳へず、之を以て、經に詳にして義未だ必ずしも當らず。と。朱文公曰く、左氏は史學なり、事詳にして理差ふ。公穀は經學なり、理精にして事誤る。と。春秋三傳、互に長短得失あること、かくの如し。然れども、予は、こゝに文學的價值に就いて批判を爲さむと欲するのみ、必ずしも、その理義の深淺高卑と相關せず。公穀二子は、釋義を主とし、事實を以て之を證せむとする傾向あるに反し、左氏は、事實を

主とし、暗に釋義す、その體裁固より同じからず、前者は議論體にして、後者は叙事體なり。而して、予は左傳の書の始終一手に出てしと、左氏の史才、頗る稱すべきものありとを以て、之を第一に置くに躊躇せざるものなり。

左傳の文學的價値は、次章に細説することとし、他の二傳に就いて、附説するところありむ。公穀二子に就いて言へば、予はむしろ穀梁氏を取らむとす。其文固より左氏に及ばずと雖も、筆意頗る勁健なるものあり、後世柳宗元の文、主として此より出づと稱す。公羊に至りては、世未だ甚だ其文を稱するものあるを耳にせず、千秋の公論、自ら定まるところあり、復た特に嘖嘖するを要せざるなり。

(九) 左傳

孔子の春秋すてに純粹の歴史に非ず、左氏の傳、たとひ叙事を主とし、材に富み、文に艶に、他の二傳と、自ら其撰を異にすと雖も、その中、居然として孔子の主義を繼承し、時に道德的教訓を垂るゝ傾向あり、今日謂ゆる純粹の歴史に非ざること、言を俟たず、予は之を歴史文學の一種と稱するの、極めて適切なるを知る、而して其書の世に行はるゝ、大に故あり、内容と筆致とは、姑らく之を措き、他の二傳、經を離るゝとき、全く其用を爲さざるに反して、左傳は、獨立したる春秋時代の史乘として讀むも、毫も不便を感ぜざればなり。

左氏、すでに春秋を傳す、然れどもその素養と筆力とは、たしかに天成の史才に近き者あり、その叙説、極めて自在にして、毫も拘束せらるゝところなし。杜預之に序して曰く、左丘明、經を仲尼に受く、以爲へらく、經は不刊の書なりと、故に經に先つて、以て事を始め、或は經に後れて、以て義を終へ、或は經に依つて、以て理を辨じ、或は經を錯いて、以て異を合はせ、或は隨つて發せり、その例の重ずるところ、彙史の遺文なるも、畧して盡く擧げざるは、聖人修むるところの要に非ざるが故なり。身國史となり

躬づから載籍を覽る、必ず廣く記して備さに之を言へり。その文緩にして、その旨遠く、將に學者をして始に原づき、終を要し、その枝葉を尋ね、その窮まるるところを究めしめむと欲し、優にして之を柔にし、自ら之を求めしめ、鑿せて之に飶し、自ら之に趨かしむ。江海の浸膏滯の潤の如く、渙然として氷釋し、怡然として理順に、然る後に得たりと爲すなり、と之を要するに左氏は孔子筆削の意を明かにすると同時に、春秋時代を活寫せむと企圖せし結果、自ら此に至りし者にして、他の二傳との差異は、主として此に本づく者と謂はざるべからず。

浩漭なる三十卷の左傳中に於ては、春秋時代、最も明晰に表顯せられ、秋毫も遺憾なく、一たび卷を緋けば、周人の面貌、眉目の末に至るまで、活動して、楮表に躍然たるの概あり、かの口に蜜あり、腹に劍あり、辭令に巧に、暗に陰謀を廻らす底、同一標型、無數の人物は、紛糾錯雜せる種々の事柄に附隨し、陸續として出て來る。而して、之を直寫せずして、曲寫し、之を正叙せずして、側叙す、これ獨り、詳密を極めし所以なり。

然れども、予輩が、特に左傳に於て其妙を感ずるは、文致自ら内容と一致せしこと、是れなり。春秋時代を寫さむと欲せば、春秋時代の文致を以てせざる限り、唯だ調諧

を欠くのみならず、十分の表顯を爲すを得ざること、當に然るべきところなり。天威の史才を庶幾すべき左氏は、自ら之を知れり。故を以て委曲にして暴露せず、又明かに自己の論斷を着けず、讀者をして模索せしむ。或は曰く、左丘明、善く事を序す、老吏の獄を斷ずるが如し、技節悉く備はり、但々斷決の處、把滑なり。たゞ旁技を論じ、本宗にいたりては、聖人の處置に讓る、または是れ當に此の如くなるべきところなり、と。左氏實に此の如しと雖も、之を以て咎むるは非なり。予は、むしろ左氏が尋常粗莽なる史論家の態度に遠く、唯だ事實の叙述に意を致せしを多とせずむばあらず。古來彼士の學者、史家と史論家との別を知らず、その論、往々にして誤れること、此の如し。

左氏を以て、浮誇といひ、富艶といふは、主としてその内容たる事實の繁冗複雑なるをいふのみ、毫もその文致と關せず。左氏の文、明晰にして簡淨、婉曲にして嫺雅、事を叙し、言を屬する、一として可ならざるなし。劉知幾、曰くその言、簡にして要、その事、詳にして博、と。その文、短句多く、接續の助辭を缺き、數字を添へて、然る後、その義、緩かに通すべきもの、頗る多し。凡そ簡約なるものは、その妙、變化に在らずして、整齊質厚に在り。左氏の文たるや、實に後世叙事の祖となすべきものなり。

(一〇) 國語

左氏の作として世に傳ふるもの、他に國語の一書あり。左傳を春秋内傳といふに對して、之を春秋外傳といへり。太史公、左氏を言ひ、専ら國語を稱し、唐に至るまでは、未だ之を疑ふものあらず。吳の韋昭、宋の宋庠の序せしところ、以て觀るべきなり。劉知幾は、その著史、通に於て論をなし、國語家、その先また左丘明に出づと爲し、且つ曰く、すでに春秋内傳を爲り、又その逸文を稽へ、その別説を纂め、周魯韓晉鄭楚吳越、八國の事を分ち、周の穆王より、起り、魯の悼公に終り、別ちて春秋外傳國語を爲り、合して二十一篇となす、その文、内傳に方ふるに、或は重出して小異あり、然れども、古より名儒並に申ぶるに、注釋を以てし、その章句を治む、これも亦た六經の流、三傳の亞なりと。

漢唐諸儒、國語の著を疑はざることを、かくの如し、而して、陸淳、左傳の文體と不倫なるを以て、定めて一人の爲るところにあらずといへり、宋の晁公武、之を駁し、以爲へらく、蓋し未だ必ずしも然らず、范擘いふ、左氏富にして飽と、韓愈いふ、左氏浮誇と、今其書を觀るに、信なるかな、その富艶にして浮誇なるや、左氏に非ずして誰ぞ、柳宗元

稱す、越語最も奇峻なりと、豈に特に越語のみならずや、楚より以下、概ね此の如しと、こゝに於てか、説を爲すものあり、曰く、三書事實或は異同多く、文體また類せず、殆んど一人の手に出でざるが如し、加ふるに、國語の辭、枝葉多く、左氏の簡健に若かず、甚しきは駁雜類せず、之を別人の著といはむも、不可なきなり、然れども、これ史材のみ、内傳の餘殘のみ、劉子が、すでに春秋内傳を爲り、またその逸文を稽へ、その別説を纂して斯書を作れりといへるは、頗るその實情に近し、また陳氏の云へりし如く、蓋し左氏、諸國の史を集め、以て春秋を解す、子弟門人、事跡多く、傳に見ず、各また同じからざるを見て、各國に隨ひ、之を編し、以て異同を廣むといはむも、亦た通ず、おもふに、當時列國の史材に厚薄あり、學に深淺あり、故に醇一なるを得ず、左氏直に之を集録し、國語を作る、その一人の手に出でざる如き、固より其所なりと。

予は頃ろ、一條の私説を得たり、蓋し屢ば前に述べたる如く、三代の間、左史言を記し、右史事を記す、左氏亦た此義によりて二書を撰せしに非ざるか、左傳は全く事を記するを主としたるに反し、國語は唯だ言を記し、各條の間、歴史的事實の連鎖に於て缺くるところあり、その著作の精神、すでに異なるを以て、文致亦た然るのみ、若し

其文なほ穩妥を缺くものありといはゞ或は未定稿なりしやも知るべからず予は、國語を以て春秋時代、言を記するの書となさむとする者なり。

周人の特質は、繁文縟禮に涵養されしを以て、思想浮誇、言語動もすれば繁絮に流れ、その衰時に至りては、全く篤厚の風を缺き、輕佻浮薄、復た一點英偉の氣象なかりき、國語はこの時代、士大夫の言辭を載せ、その思想感情を表彰す。文致、推して知るべきなり、柳宗元曰く、左氏の國語、その文深闊傑異にして、まことに世の耽り嗜で已まざるところなりと。これ或る部分の評語としては、可なりと雖も、その全豹を掩ふること能はず、朱子曰く、國語は、萎靡繁絮、眞に衰世の文のみ、この時、語言議論、かくの如し、宜なり、周の振起する能はざるやと。また曰く、國語の文字、極めて困、善く振作するも起たずと。之を要するに、國語の文、富艶濶大はあれども、峻削英爽なる能はず、予は、一言以て之を蔽ひ、腐敗したる書經と呼はむとす。

國語の文致、かくの如く、左傳と頗る異なるは、丘明たるもの、史家の任務を重んじたるが故に然るものにして、予は、あくまで、描寫の精、その神を得たるを推稱せむとす。凡そ史家の勉むるところは、事實を飾らずして敘述するに在り、事を記すると言

を記すると、その間自ら異なるもの無くむばあらず、讀者、國語の文の平板に傾くを怪しむ莫れ、楚越の屬、當時新に興起したる諸國、その語言、頗る他と同じからず、楚語越語の類、奇峻傑異の趣あり、予は此に至りて、丘明の筆到る處、可なるを見る。

予輩は、左傳に由りて、春秋の歴代事實を知り、國語に由りて、その時代精神を窺ふを得べく、兩書相待つて離るべからず、左丘明、その人、功勞頗る隆とすべく、支那歴史の開祖、東洋のヘロドタス、を以て稱すべきもの、斯人を措いて、誰かある。而して先秦時代の北方文學、爲に至大の價值を増加せしこと、復た贅するを須むざるなり。

諸侯の國、皆史あり、又時に特名を附す、孟子に、晋の乘、楚の檮杌、魯の春秋、一なりといへるが如し、大學に楚書を引く、鄭玄は楚の昭王の時の書なりといひ、陳善は楚の史官記するところの策書なりといへり、然れども、この類の書、大抵秦火に盡き、その散亡、一日の故に非ず、劉向の敘述するところ、或は其遺ならむと思はるゝのみ、司馬遷の史記を作るや、左氏國語、世本戰國策、楚漢春秋及び諸子百家の書に據りしと稱す、世本、今傳らず、こゝに於てか、予輩が先秦時代の歴史事實を知るは、左氏の書と戰國策とあるのみ、なほ戰國策に就いては、後章特に詳論するところあるべし。

(一) 北方思潮の餘派

墨子を以て儒教外の異端となし、その謂ゆる兼愛非政を以て、老子より脱化せしものとなすは、斷じて非なり。墨子名は翟、その年次詳ならざれども、孔子よりや、後れしは、書中之を評せし語を載せしを見て知るべし。史記には、宋の大夫にして善く守禦し、用を節すといへり。その書中、楚の公輸般と相距ぎしことを載す、又平生寧處せず、その突、黔するに暇なしと傳ふるを見れば、劉向之を戰國の賢大夫となせしもの、蓋し中れり。而して、予は、墨子が宋人の特性を備へしを見て、愈よ如上の説を信ぜむとす。宋は殷の後、かつて擧げし孔子が般人を評せし語に見たる如く、宋人も亦た敢爲の風あり、神明に對する敬虔の情に篤かりしも、祥瑞を信じ、その極、往々にして、懸愚に流れたり。孟子は、宋人苗の長ずるを助けむが爲に之を擡さしを記し、その他荀子、韓非子に散見するところ、皆以て證となすべく、墨子が有神論を主張し、非樂節葬を口にせしが如き、いづれか、その國民特有の思想に非ざるものぞ。而して崇古の念に滿たるの極、更に一步を進め、往々にして、夏人を稱し、禹の功業を頌嘆して措かざることにすらありき。之を要するに、墨子も亦た歴史的感化の産物に外ならず、或は

之を以て禹に出づとなし、或は清廟の守に出づとなし、或は史角に出づとなし、或は尹佚を以て其先となすものあれども、ともに無用の穿鑿なり。

墨子を以て兼愛論者となすは可なりと雖も、彼が恭を以て愛を調攝せしを忘るべからず。孟子之を稱して父なきものとなす、甚だ誤れり。蓋し孔墨二人、ともに從來漢族の道德思想を學問的に革造せむと欲せしもの、孔子は、周魯の文化に本づき、禮を主とせしに反し、墨子は、般人の遺風を以て、鬼神を主とす。之に次いで、孔子は、單に仁を説き、道德の本質を探究せず、専ら實行の方法を教へしに反し、墨子は、道德を以て愛と利との均衡に在りとなし、社會の革新に及べり。時勢の遞降は、學理的精神を促進し、之をして一層切實ならしめしのみ。その枝葉は、姑らく言はず、兩者學說の精髓は、ともに博愛に在り、決して相差ふことなきなり。故に淮南子は曰く、墨子、儒者の業を學び、孔子の術を受け、以爲へらく、その禮、煩擾にして悦ばれずと、韓愈、又讀墨子的一篇を作り、その意を詳説せり。その本質、すてに、かくの如く、而かも、儒墨古來相敵視したるもの、亦た其故なくむばあらず。その一は、墨子が明かに孔子を斥言したるに本づき、その二は、墨子の利を説くや、孔子の罕に之を言ひ、孟子が「何ぞ利を曰はむ」

といひしものと相反すること甚しきに由るや必せり。

墨子の書存するもの五十五篇はじめ七十一篇なりしが、漢より宋に至るの間、その八篇を失ひ、その後宋より明に至るの間、又十篇を失ひ、失ふところすべて十八篇、因つて今の篇數となれるなり。その論理甚だ明白、寸を以て尺を揣るの概あれども、惜むべし、文辭に至りては、殆んど稱するに足らず。

韓非曰く、今の顯學は儒と墨となり、と。呂氏春秋、又之を言へり。墨子の説、孟子一派の爲に攻撃されしと雖も、先秦時代に於ては、決して衰へず、漢の董仲舒亦た酷似するを見れば、多少の縁故あるを揣摩し得べきが如し。胡非子、隨巢子は、その弟子にして、皆書あり。又禽滑釐あり。戰國の中葉、孟子と論争せし夷之、すでに墨者と稱し、非戰を論ぜし宋鈞、亦た其臭を帯ぶるもの、如く、莊子の天下篇には、宋鈞尹文、この風を聞いて之を悦ぶと明言せり。その他、田俛子、我子等、皆書ありき。墨子の徒、皆その主義に従ひ、生きて歌はず、死して服せず、褐を衣、躡を履ひて、四方に奔走せしといふ。その一時に勢力ありしもの、亦た宜なりといふべし。

(中)

(一一一) 南方の天然と南人の性格

南方文學を論究するに先ち、其地文化の歴史的發達に就いて、一言するの必要あり。抑も荆楚の地は、太古の世、非文明的人種なる苗人の蕃殖せしところ、その後、交趾支那族の占領に歸し、周の中世に及びて、はじめて歴史の舞臺に出現せしなり。周の武王、鬻熊を楚に封ぜしことあり、この人、本と高陽の苗裔にして、楚の産に係ると稱すれども、文武周公の師なりしといへば、一代の偉人たりしこと、辯を俟たず。要するに鬻氏は南方文化の開祖なり。漢書藝文志に、鬻子二十三篇あり、然れども、今傳ふるものは後人の僞なること、殆んど疑なきに似たり。

南方の文化は、必ずしも南人の獨創に非ずして、北方の感化を受けしものなり。雖も、すでに人種を異にし、その境遇を異にしたりし南人は、その本來の特質を失ふことなく、後年に至るに及べば、却つて北人を南方化せむとする程の大勢力ありき。南人すでに交趾支那族なるが故に、之を北人に比すれば、種々の點に於て、徑庭の頗る甚しきを見る。おもふに、その祖先は、南海より來りしものなるべきも、今日學者

の説くところ、未だ一定せず。由來北人と南人とは、體格上の差違、すべてに明瞭にして、西の方、鶏頭關を界とし、截然として配布の區域を異にせり。南人は比較上、色白く、軀瘦せ、丈低く、眼細く、鼻梁甚だ高からず。又北人の剛勁健固なるに反して、概ね柔和温順なり。孔子嘗て、子路に對へ、南北人の差別を論じ、南方の強か、抑も而の強か、寛柔以て教へ、無道に報せず、南方の強なり、君子之に居る、金革を被り死して厭はず、北方の強なり、而して強者之に居るといへり。之に加ふるに、支那人一般の風習として、長しへに祖先墳墓の地に住居し、たとひ旅食流寓、他邦に客死するも、その遺骨を齎して、埋葬し、且つ血統を重んじ、他郷の人と結婚せざるが故に、その血液は極めて純潔にして、如上の差は、四千年後の今日と雖も、儼然存留して、毫も異なることなきなり。人種すでに異なる以上、風俗言語、亦た自ら差別あり。北人は多く狐狸の妖を談じ、南人は概して鬼神を信ず。北人は襪を着け、南人は多く跣足なり。北人は妍麗にして、その俗野に近けれども、南人は秀氣多く、その俗粗ならず。北人は車馬騾驢を用ふれども、多く人力を恃み、南人は轎を用ひ、併せて獸力を利用す。南人は床を用ひ、北人は炕を用ふ。南人は多く鮮菓を嗜み、鶏肉を食ひ、且つ淹猪腿を美とし、肉湯には清を尊ぶの風あれども、北人は輕菓を食ひ、鴨羊を嗜み、鮮猪肉を啖ひ、肉湯には渾を尙ぶ。之に次いで、南人は概して葢を食ひ、北人は多く蒜を用ふ。南人は辨味を悦び、北人は鹹味を嗜む。衣服飲食、すべてに此の如く、而して特に考察を要するは言語なり。古しへ、楚夏の二音あり、その後、轉じて漢吳兩音となり、今日に於ても、北京語即ち官話と、廣東語等の南音とは、全く相異なれり、而して、南音の特徴は、助辭多く、概して平滑流暢、比較上、調諧的なるに在り。

次に南人を圍繞する天然は、到底北人の夢想し得べきところに非ず。南方は空氣濕潤にして、雲烟の變化、最も著しく、土質亦た頗る肥沃なり。書經の禹貢に見えし揚荆二州の諸條を見れば、古代に於ても、天然物に富み、常に之を北人に供給したるを知るべし。而して、南方一帶、謂ゆる江南の地をして、繁榮富饒ならしむる唯一の理因は、全く楊子江の灌漑に歸すべし。この河の長さ三千英里、河口より一千七百英里の間は、普通の汽船を以て上下し得べく、運漕の便、言を俟たず、之に加ふるに、その流水の作用に成りし沖積層の平原は、非常の面積にして、今に綿絲麻茶を産出し、之を外國に輸出す。かの蝦房蟹舍、菱を採り、魚を捕へ、小舟蕩漾、濃陰の下に來往し、柳隄花塢、

盡く春光蕩駘の中に在り、水郷人家、桔槔聲起り、牛背の笛聲、雨々歸り來る、これ耕田鑿井の餘風といへるもの、亦た以て其地の風光を想像し得べきに非ずや。

南人は、かくの如く天恵に富める沃土に居住しその生活、比較的に容易なりしが故に、衣食に汲々たらずして、優に精神的生活を爲すべき餘裕を有せり。彼等は多少の空想を馳騁したりしが故に、理想的傾向を有し、その意志は強固ならざれども、却つて感情に富み、概して想像に長ぜり。南方文學の北方文學に勝るは、全く此に起因す。その特質は、流動多致、變化に富み、決して固定的もしくは單調的ならず。北方を山とすれば南方は水、北方を仁者とすれば南方は智者、その差、かくの如し。然れども、讀者、忘るゝこと勿れ、こは單に兩者相互の間に存する差別にして、之を極言すれば、ともに實際的人種の範疇内に包括さるべく、文學上に於ける南人の想像力も、亦た決して多大の賞讃を値すべきものに非ず、有力なる二三の外國文學に比しては、固より其後に居るべきを、予は、かつて、その理由を推究し、之を建國の精神と歴史的關係とに歸し、前章に於て、略論せしことありき。

(一三三) 老子

南方思想界に於て最も有力なるものは、老子なり。その傳は、史記に見ゆ。但だ、理想的傾向あるものは、歴史的憑據を否定するを常とするが上に、老子は、後世の假托にもせよ、道教の祖として崇信せられ、種々の奇跡を以て之に附加し、一個の神仙として稱せられしが故に、その事實の明晰を缺けるもの、怪しむに足らず。史記の傳中、或蓋の疑辭を用ひ、僅に補綴せし觀あり。然れども、その生地を記するや、郷縣里に及び、且つ結末子孫の事を詳述せしと併せ考ふれば、固より現實の人物に外ならず。老子は、楚の苦縣厲郷曲仁里の人、姓は李、名は耳、字は伯陽、諡して聃といふ。聃とは、如何なる義ぞ、許慎曰く、耳漫なりと、老子すでに一匹夫、諡あるべき謂なし。又弟子輩、之を尊崇して然るものとせば、何ぞ、他に美稱なからむや。然れども、文選王褒洞簫賦に幸得諡爲洞簫兮の語あるを見れば、諡は必ずしも死後の追號に非ず、單に名づくといひ、若しくは綽名せしといふに過ぎざるべく、又老子の人物、決して高貴ならざりしの一證となすべし。苦縣は本と陳に屬し、春秋の時、陳、楚に亡ぼされ、因つて其地となる。然らば、老子は、江北の産にして、固より南人に非ず。但だ亡國の遺民たるが故に、楚に

事へずして周に入り、やがて厭世主義を立てしものに非ざるか。老子の周に事ふるや、守藏室の史となりしといへば、當時人間容易に見るを得ざる圖籍を涉獵し、研鑽日を積み、その後、哲理的考察に入れるなるべし。その孔子と同時にして、かつて禮を問ひしに對へし言は、諸書に見え、繁簡詳畧、同じからずと雖も、要するに、疑ふべからざる事實なるが如し。老子は、北方聖人の遺制たる禮に通曉せしと雖も、決して之に満足するを得ず、遂に斬新卓拔なる自説を出すに至りしものならむ。その周に居るや、すでに久しく、周の衰ふるを見、乃ち遂に去つて關に至る。關令尹喜曰く、子、將に隱れむとす、強いて我が爲に書を著はせと、こゝに於て、書上下篇を著し、道德の要を言ふこと五千餘言にして去り、その終るところを知るなし。その事跡、信ずべきものは、僅に是れのみ。その他、諸書に散見するところは、盡く後人の僞托に係り、荒唐不稽を極むるもの少からず。

儒家が多く鄒魯より出てたる如く、老子以下の道家は多く楚及びその近傍の地に出でたり。周室衰微して、天下亂るゝや、孔孟の徒は、務めて周の禮文を存せむと欲し、老莊の輩は、飽くまで之を打破せむと力めたりき。當時南北兩人の戦争が、晉に政治上に於けるのみならず、又思想上に及ぼし、全く歴史的觀念を異にしたるは、まことに一奇觀となすべきなり。

老子學の淵源に關しては、古來異説紛々として、一定せず。或は黄帝に本づくといひ、或は史官に本づくといひ、或は易に本づくといひ、或は容成に本づくといひ、或は鬻子に本づくといへり。然れども、その源、遠く太古群后の世、帝位繼承の際に生ぜし非社會的思潮に在り、而して、形而上學の考察に於ては、易と其の起源を同らし、後世に及べば、特に黄帝を以て其祖となし、強いて明白なる歴史的憑據を確立せしめむとしたる者に外ならざるが如し。或は又南方思想の特徴たる厭世的傾向、印度思想と多少相似たる痕跡あるを以て、その影響を疑ふものさへあり。然れども、當時人文開明の程度に於ては、支那と印度との間、之を陸にするも、之を海にするも、その交通の認むべき者あるを想像すること難し。こゝに於てか、予は、北方道德思想に反抗せる一道の暗流が、老子を得て、はじめて形成し、自然の勢、南方に彌漫したるを斷言して止まむと欲す。

老子の哲學體系は、その宇宙本體論を中心として構成せられ、北方聖人が、易に於

て専ら現象變化の法則を探尋したるに反し、此は偏に宇宙の實在を闡明せむとするものなり。故に先づ道を立し、之を相對的となさずして、絶對的となし、吾人想像の及ぶ限りの廣さと深さとを極め盡したる宇宙全體の抽象的表號となせり。是を以て、道は明かに二方面を辨別すべく、その第一は、宇宙の本體その者にして、萬種現象の基礎たるべく、永劫不變なる神秘的實在を有し、無形無質にして、吾人の感官を超越せり。而して、その第二は、生物否、特に人類に附與されしものにして、その存在の認識は、復歸主義の根柢となるべきなり。こゝに於てか、その本は一にして二様に分出せし道に、天道人道の目あり、然れども主とするところは、天道にして單に道と呼ぶを常とす。萬種の現象は、この本體より分出するものに外ならずと雖も、その研究の疎なるは、猶ほ北方哲學が本體に於けると一般。老子の書中、その言、偶々之に及びたるもの無きに非ざれども、遂に之に重きを置かず、その然る所以のものは、他なし、その人生觀に於ける厭世主義即ち復歸主義の趨向歸着するところにして、現世を以て、無意義なる偶然の假現となさむとすればなり。これを要するに老子の説くところ、易と同じく支那古代の天地開闢説より出てしならむと雖も、本體論に及びたる

を以て、大に高遠の趣あるは、遂に否定すべからざるなり。

老子の哲學、すでに高遠なり、然れども、予は唯だ之を北方に比較して言へるのみ。若し歐西哲學體系の發達に比すれば、その不自然にして不規律なると、言を俟たず。従つて、その價值甚だ下れりといはざるべからず。蓋し支那民族一般の特質は、到底現世的にして、實際上、効果なき事物を排斥するを常とす。故を以て老子の學、多少形而上學的にして、明晰なる世界觀を有すと雖も、詮じ來れば、世に處し生を全うする方法を講究したるに過ぎず。その實際的傾向は、敢て一步を北方に譲らず。唯だ現世の幸福を求むる精神に於て、孔子は樂天的にして積極的、老子は厭世的にして消極的なるの差別あるのみ。又その復歸主義と雖も、決して印度民族が幽奥深邃なる向内的思索に因て、解脱を欲求したると、同日の論に非ず、そも印度に在りては、解脱を得るの方法として、唯心的活動を以て塵界を厭離するを極致となせしに反し、老子に在りては、唯だ大道の自然に順適して止むのみ。涅槃寂靜と復歸とは、たとひ、その外形に於て相似たりとするもの、その實、大に異なるものと謂はざるべからず。こゝに於てか、予は愈よ南方思想と印度思想との關係を尋ぬるもの、愚を嗤笑せむと

欲す。之を要するに、老子の學たるや、その形式に於てこそ、多少の特色はあれ、その精神に至りては、徹頭徹尾、漢族的なりといふの外なく、莊列以下の後嗣者に至り、聊か改善の跡認むべきものあるにもせよ、この鐵圈は、遂に打破する能はざりしなり。

支那哲學發達の上に於ける老子の功績は、主として、その消極的斷定に在り。その言ふところ、予輩が普通に謂ゆる道德を以て、大道の破綻より生じたるものとなし、全くその價值を認識せず、人生の極致は、復歸に在るが故に、その自然的傾向に従つて、この性を全うし、幸福なる獨立的生活を爲すべしと論斷し、その當世の時勢に憤慨したる極は、往々にして因果法則以外に逸出し、反對に、謂ゆる道德を以て不道德の原因たる如く思惟するに至り、道德を廢棄して、大道に歸り得べしと信じ、その形而上學の根據よりして、善惡の差別を抹殺せむと企てたり。

以爲へらく、大道廢して仁義あり、六親和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠信あり、人性の自然に任さむと欲せば、先づ此等煩瑣なる禮法を排除せざるべからず、仁といひ、義といふは、畢竟名を假りて非を飾るものに過ぎず、信言は美ならず、美言は信ならず、かの善惡を論じ、美醜を論ずる如きは、眞に道を得たるものに非ず。しかも

滔々たる天下、是非相誇り、嚚々として止まざる所以のものは、人々その私智を專にすればなり。私智は多く學問より來る。故に道德を修むるものは、先づ學問を廢するに如かず。かくの如くして無爲に至れば、始めて道に達するを得べきなり。故に曰く、學を絶てば憂なし。聖を絶ち、智を棄て、民利百倍す。仁を絶ち、義を棄て、民、孝慈に復る。巧を絶ち、利を棄て、盜賊あることなしと、老子の説くところ、かくの如く、その政治論に於て、放任主義を標榜せしもの、固より當に然るべきなり。

老子すてに無爲の治を以て、民を太古敦朴の世に復せしめむと欲す。こゝに於てか、禮樂を排し、刑政を斥け、甲兵干戈を忌み、一切の學を絶ち、智を廢せむとせり。然れども時勢の必要は、彼をして、全く世に遠ざかるを得ざらしめ、その書中、間々權謀術數に類せる言あるを見る。之を喩めむと欲せば、必ず固く之を張れ。將に之を弱めむと欲せば、必ず固く之を強うせよ。將に之を廢せむと欲せば、必ず固く之を興せ。將に之を奪はむと欲せば、必ず固く之に與へよと曰ひ、古しへの善く道^①を明かにするものは、以て民を明かにするに非ず、將に之を愚にせむとす。民の治め難きは、其智多きを以てなり。智を以て國を治むるは、國の賊。智を以て、國を治めざるは、國の福と曰へ

る如きもの、即ち是れなり。後世法術家の徒、老子の説を取りて、その立論の證左と爲せるもの、主として、此等の言あるに本づく。

老子の書は、世に謂ゆる道德經にして、上下二卷、上篇は多く道を説き、下篇は多く徳を説く、前者は以てその世界觀を窺ふべく、後者は以てその人生觀を見るべきなり。而して、その經と稱せしは、漢の世に始まり、後に唐の太宗、上篇を改めて道經といひ、下篇を徳經といへり、この書は、孟子、荀子等とともに、後人の剽入を混せず、極めて純粹なる面目を保つものにして、簡潔淨鍊の文字、稀に見るところなり、勿論流傳の際、誤寫訛傳あり、數種の異を生ぜしこと無きに非ざれども、未だ作者の眞意を損するに至らず、又脱落増入の處、一二之ありやの疑あれども、先秦の諸子、普通に眞價相混じ、僅に一部分信ずべきが如きもの、比に非ず。その文章の特色は、極めて簡勁にして、動詞形容詞少く、又勉めて助字を省き、重要なる部分は、往々押韻をなし、且つ多く對句を以て成る。今前人の評語二三を擧げむに、太史公は、微妙にして識り難しといひ、又、老子は深遠といひ、宋の李性學は、老子孫子、一句一理、八寶、珍珠を串き、間錯して斷えざるが如しといひ、明の李于鱗は、論語孫子と並稱し、文字少くして意味多き

ものといへり。然れども、最も詳密を極めしものは、唐の高祖の御序に若くはなし、曰く、細かに其文の行用を觀るに、濃雲、群山の疊峰を露するが如く、外は虚にして内は實、貌態彷彿、その境又然らず。空谷に架し、以て奇峰を秀て、むかし巍巒なるもの、倏態幽壑とならしめ、若し其意を知らざれば、混沌鴻濛の中に入るが如し。方に乃ち少しく、微旨を知れば、又皓月の澄淵に沈み、鏡中の實象を觀るが如し。形體然かく親を探るが如しと雖も、得て捫撫すべからず。况んや本經に云ふ、吾が意甚だ易く、知甚だ易く、天下を行つて能く知るなく、能く行ふなしと。此を以て之を思へば、豈に明鏡水月なるものに非ざるか。睽、中宵に在りて、深く明鏡水月を慮るに、形體一の如しと雖も、却つて乃ち虚にして實ならず、象を他處に著くるに非ざれば、安んぞ影あらむや。故に天に仰げば、水月象明かに、鏡を棄て、捫すれば、己が象の虚ならざるを知る、これを物外眞を求むといふと。

(一四) 列子

列子、名は禦寇、鄭の人なりといふ、その事蹟、頗る茫逸たり。太史公、老莊を傳して、一語の列子に及ぶものあらず。莊子の天下篇、諸子の學説を述べ、ひとり及ばず。荀子悉く諸子を評して、また之を遺す。こゝに於てか、列禦寇その人の存在を疑ふものあり。陳振孫の如き、豈に禦寇なるもの、それまた謂ゆる鴻蒙列缺の類かといへり。然れども、尹子に列子虚を貴ぶといひ、呂氏春秋、亦た之を言ひ、戰國策に、史疾、韓の爲に楚に使す、楚王問うて曰く、客何にか循へる、曰く、列子圉寇の言を治むとあり。圉と禦とは音通にして、列子は、決して架空の人物に非ざるを知るべし。

劉向曰く、列子は鄭人なり、鄭の繆公と時を同うす、蓋し有道者なり、その學、黃帝老子に本づく、と。柳宗元かつて辯して曰く、劉向、古しへ、博く群書を極めしと稱す、然れども、その列子を録する、獨り鄭の繆公の時の人といふ。繆公は孔子の前に在ること、幾んど百歲、列子の書に鄭國を言ひ、皆子産鄆析を云ふ、知らず、向、何を以て之を言ふこと、此の如くなる。史記、鄭の繆公の二十四年、楚の悼王の四年、鄭を圍み、鄭、その相駟子陽を殺す。子陽は正に列子と同時、知らず、向、魯の繆公と言はむとして、遂に誤つて

鄭と爲すか、然らずむは、何ぞ垂錯すること、是の如きに至ると。王應麟又曰く、壺丘子林は列子の師なり、呂氏春秋に云ふ、子産鄭に相たり、往いて壺丘子林に見え、その弟子と坐する、必ず年を以てすと、然らば、子産と時を同うす、と、之を併せ考ふれば、魯の繆公、もしくは林希逸の説に従ひ、鄭の繆公の世に當り、子産と時を同うし、孔子と相及ぶとなせば、殆んど不可なきが如し。漢書藝文志、莊子に先ち、莊子之を稱すといへるは、頗る明晰を缺くと雖も、最も慎重の言をなせば、但だ此の如きのみ。

列子の書、果して禦寇の筆に成れるものなりや否や、今傳ふる書に冠せる劉向の叙録は、後人の假托ならむと雖も、その書の整齊を缺けるを論じたるは、極めて公平の見を推すべし。穆王湯問の二篇、迂誕恢詭、君子の言に非ざるなり、方命篇に至りては、一に命を推分し、楊子の篇、唯だ放逸を貴ひ、二義乖背、一家の書に似ず。然れども、各明かにするところあり、亦た觀るべきものあり、と。その他、柳宗元は、その書、增竄多く、その實に非ずといひ、林希逸は、この書、果して孝景の時に出てば、太史公、何に由つて未だ見ざりしや、果して之を見れば、何を獨り列子を遺して傳に入れざらむ。今その書を觀るに、首尾の二篇は、天瑞說符を以て之に名づけ、他の六篇は、首章の二字を摘

みて之に名づけ、篇中の文字、或は精、或は粗、殊に一手に頼せず。劉向が穆王湯問は迂誕に失ひ、力命、楊朱は義相乖背せり、一家の書たるに似ずといへるは、此書の選に中れりといひ、高似孫は、その書、莊子と合ふもの十七章、その間、尤も淺近迂僻なるものあり。後人會萃して、之を成すに出づるのみといひ、之に次いで、宋景濂は、書、黃老の言に本づく、決して禦寇自ら著せしところに非ず、必ず後人會萃して成るもの、中に孔穿、魏牟及び西方聖人の事を載す、皆禦寇の後に出づ。楊朱力命篇の如きは、爲我の意多し、疑ふらくは、古しへ楊朱の書、その未だ亡びざるもの、此に勦附せられしものならむといひ、紀曉嵐は、四庫全書提要に於て、凡そ子某子と稱するは、弟子の師を稱せしもの、自ら稱せしところに非ず。この書、亦た子列子と稱す、決して、その學に侍せしもの、の追記せしところとなす。禦寇の自著に非ず。その列子の後事を雜記するは、正に莊子に莊子死すと記し、管子に吳王西施を稱し、商子に秦の孝公を稱する如きのみ、怪しむに足らずといひ、姚際恒は、意ふに、戰國本とその書あり、或は莊子の依托して、之を爲りしもの、但し自ら多きことなかりき。この餘、盡く後人の附益せしところなり。莊、列を稱せしを以てせば、列は莊の前に在り。故に多く莊の書を取りて、以て之

に入る。その西方聖人を言へるは、眞に佛氏を指す。殆んど明帝の後の人の附益せしところに屬するや、疑なしといへる如き、皆肯綮に中れる言なり。

論者、或は莊子列を取りしと爲すものあり、柳宗元が、これを要するに、莊周その辭を放依することを爲す。その夏棟、狙公、紀渚子、季咸を稱する、皆列子より出でたり。盡く紀すべからずといひ、朱子が、莊子全く列子を寫し、又變じ得て峻奇なりといへるが如し。然れども、予は前に引きし姚際恒の言を信じ、莊子却つて剽竊されたるを主張せむと欲す。之を要するに、列子の書中、禦寇の手筆に係るもの、絶無といふに非ずとす。るも、僅にその一部分にして、且つ之を識別する能はず、その殆んど全部は、蓋し後人の撰に係り、名を禦寇に托するものに外ならず。而して又、一人の筆、一時の書に非ず、數人の手により、多くの年數を経て、漸次に撰著されしものに似たり。その古きものは、文意ともに精妙にして、秦漢以下、作者の及ぶところに非ず。おもふに、列子の徒に出でしならむと雖も、林希逸の言へる如く、散佚して完からざるを以て、後人漫に己の意を補入し、狗尾續貂、且つ莊子を增做して、之に附益したるなるべし。四庫全書提要、列子穆王篇載するところと、穆天子傳と一一相合ふを根據とし、以爲へらく

これ劉向の時、偽造せしところに非ず、確に秦以前の書たるを信ずべしと要するに、今の列子の大部分は、周末に出で、兎も角も、一部の成書となりしならむ。然れども、天瑞篇中、易の乾鑿度の文を襲用せしより考ふれば、先秦諸子中、最も晩出の者なり。而して、楊朱の一篇、漢代に成りし疑あり。之に次いで、張湛「往々佛經と相參す」といひ、朱子又「列子の語、佛氏多く之を用ふ」といひ、篇中處處に佛敎の臭味を帶ぶるところあり、こゝに至れば、姚際恒の言、愈よ實にして、或る部分は、漢末魏晋の際に出でしものなるべく、一部の列子は、實に數百年間、數人の手によりて成れるもの、その間に、一貫の思想系統なく、往々にして支離滅裂、遂に闕漏を補直する能はざるも、亦た宜なり。今の列子八篇、劉向叙録と合ふ。然れども、叙録信ずるに足らずとすれば、毫も證となすに足らず。今の列子は、もと東晋の張湛より傳へし者なり。湛の序に曰く、先君録するところの書中、列子八篇あり、江南に至るに及び、僅かに存するものあり、列子唯だ楊朱、說符、自録の三卷を餘す、亂に比して、正輿、揚州刺史となり、老來江を過ぎ、復た其家に在りて、四卷を得たり、尋いて、輔嗣の女婿趙季子の家より六卷を得、有無を參校し、始めて備るを得たり、と、その散佚あり、兼ねて、傳承正しからざるを知るべし。

列子の書は、上に述べたる如き性質を有するものにして、前後矛盾、極めて多し、然れども、假りに之を避け、其言ふところを總括すれば、大體に於ては、南方思想の範疇内に在るべきものにして、宇宙の必然的進動を否定し、一意向、上、絶對無我の域に至るを以て、修心の目的となせり。たゞ孔子を推尊し、權謀を好まず、聖賢を罵詈せざるは、他の道家者流と異なるところに於て、後世儒家の論難を受くること、極めて少き所以、柳宗元が、孔子の道に概せずと雖も、その虛泊寥濶、亂世に居て利に遠ざかり、禍その身に逮ぶを得ず、而して其心窮らず、易の世を遁れて悶ゆるなしといへるもの、其れ是に近きか、余故に取るといへる如き、即ち是れなり。

列子の作者、一にあらざるを以て、文致亦た隨處異なれり。溫厚なるあり、瑰麗なるあり、而して又時に淺俗なるあり、之を一概する能はずと雖も、柳宗元が、その文辭、莊子に類して、尤も質厚、爲作少く、文を好むもの、何ぞ廢すべけむやといへるもの、殆んど中れるに近し。然れども、列子を以て禦寇の手筆となし、その歴史的價値を論究せざる諸輩は、往々にして、其名に眩せられ、却つて莊子に勝るといふものあり、洪邁は書事簡勁、巧妙、多く、莊子の右に出づ、その惠盎が宋の康王に見ゆる一段を觀るに、語

宛轉四反、數百言を以て、曲にして之を暢ぶるに非ざれば了すると能はざるに、淨潔粹白なる、此の如く、後人の筆力、渠を到るべけむや」といひ、宋濂は之を承けて、列子の書、簡勁宏妙、周に勝れるに似たり」といひ、王世貞は、列子と莊子とは、同じく事を叙し、而かも簡勁にして力あり」といへり、皆正見に非ず。而して、朱子が、孟子、莊子は、文氣俱に好し、列子は、便ち迂僻の處あり、左氏亦た然り、皆高を好て事實少し」といひ、胡應麟が、列の文は法なり、莊の文は奇なり、列は猶ほ丘明の如く、莊は猶ほ司馬の如し、列は規矩なり、馴ひて入り易し、莊は岸崖なり、攀ぢ難し、簡勁宏妙にして、平淡疎曠、周鼎の彝、朱紘超越なるものは、列なり、凌厲汪洋にして、杳冥超忽、風に乘じ氣に騎し、思に出て神に入るものは、莊なり、本始に源流すれば、列は莊の胚胎なり、波瀾を震蕩すれば、莊は列の極致なり」といへる如きも、尙ほ過ぎたり。予は、姚際恒が、列子は、明媚人に近く、氣脈降る、莊の事を叙するや、回環儻勃、即了せず、故に真古文となす、列の叙事、簡淨にして法あり、これ名作家か」といへるもの、確論を推すべく、列は固より莊と相並ぶべきに非ず、之を過賞するは、好むところに倣する者に非ざれば、絶えて眼識なきものに外ならざるを主張せむとす。

(一五) 莊子

老列二子に次いで、南方思想を發揮したるは、莊子の功なり。其傳は、史記に見ゆ、蒙の人、かつて漆園の吏たりきといふ。蒙の地、何處に在りや、異論頗る多し。今最も信據すべき説に據れば、古しへ宋國の蒙にして、今の河南省歸德府東北四十里に在る大蒙城、蓋し此ならむといふ。大蒙城の南に小蒙城あり、謂ゆる漆園も亦た此中に在り、城亦た漆邱と名づく。降て戰國の時に至り、宋王偃凶暴なり、人稱して桀宋といふ。ここに於て、齊、楚、魏と謀り、伐つて宋を亡ぼし、其地を三分し、蒙は魏に入れり。但し、莊子の世に在るや、梁の惠王、齊の宣王と同時なりといへば、宋未だ滅びず、故に莊子は斷じて宋人なり。陸德明の徒、之を梁人といふは、詳かに年代を考へざりし失にして、朱子が、莊子自ら是れ楚人、大抵楚の地は、便ち多く此様差異底の人物あり」といふは、單なる想像のみ、絶えて歴史的憑據を有せず。然れども、之を楚人といふは、最も普通にして、これより先、韓愈も亦た、莊周その荒唐の辭を以て楚に鳴るといへり。莊子すでに宋人なりと雖も、その人格、全く南人的なりしは、殆んど争ふべからず。

莊子、すでに齊宣、梁惠と同時なりしといへば、翻つて又孟子と同時、但し二人の書

毫も相及ばず。蓋し一は隱者にして世に背き、一は經世に意あり、謂ゆる道同じからざれば相爲に謀らざるもの、亦た宜なり。楚の威王、莊子の賢を聞き、使をして幣を厚うして之を迎へしめ、許すに相となすを以てす。莊子笑つて楚の使者に謂つて曰く、千金は重利、卿相は尊位、子ひとり郊祭の犧牛を見ずや、之を養食すること數歳、衣するに文繡を以てし、以て太廟に入る。この時に當つて、狐豚たらむと欲すと雖も、豈に得べけむや、子、忝かに去れ、我を汚すこと勿れ。我むしろ汚漬の中に遊戯して、自ら快うし、國を有する者の爲に羈せらるゝ無からむ、終身仕へず、以て吾志を快うせむ、と。その他、毫も傳ふるところなし。おもふに名利の念を絶ち、善く貧窶に甘んじ、書を讀み、學を修め、謂ゆる洸洋自ら恣にし、逍遙自ら適し、以て其生を終へしものならむ。

莊子の學、傳承の跡、全く考ふべからず。韓愈かつて曰く、蓋し子夏の學、その後、田子方あり、子方の後、流れて莊周となる。故に周の書、喜んで子方の人となりを稱す、との説、本づくところを知らず、且つ子方は、二三の逸話を傳ふるのみにて、その始終、審かにし難きも、固より必無の事に非ず。かつて述べたる如く、子夏は魏の文侯の師となり、西河に教授し、門人頗る多かりしといへば、その學、一時中原殊に魏宋の地に波

及し、莊子も亦た其徒に従つて、古代文獻の研究を爲せしこと、固より然るべし。司馬遷、かつて莊子の蘊蓄頗る深きを稱し、その學、闕はざるところ無しといへり。されば、誚訾罵詈の言いづれも善く肯綮に中り、當世の宿學と雖も、自ら解免する能はざりしもの、固より其故なくむばあらず。然れども是れ莊子が儒學上知識の淵源を説明するに止まるのみ、その本領たる老子の學の師授とは、固より相關せず。蓋し老子一たび特異の思想を形成せし後、その學説、大に南方に行はれ、その徒に出す、頗る多かりしこと事實なれば、當時楚魏の間に介在せし宋の地に於て、莊子の出てたるは、地理上、必然的なり。但し時勢的感化と個人的性癖と、更に多きに居るを忘るべからず。

朱子曰く、莊子何の傳授するところなるを知らず、却つて自ら道體を見得せりと。

莊子の本領は、老子の學を明かにするに在り。而して後世の學者、その文を愛するの餘、之を以て儒家に敵意なしとして、世に推獎せむとするものあり。かくの如きは、事象の差別を認識せざる根本的謬見より出てしものにして、一笑を値するに過ぎず。明の楊慎は、莊子は世を憤り、邪を嫉むの書なり、人その堯舜を非とし、湯武を罪し、孔子を毀るといふは、莊子を知らざるなり。莊子は未だ曾て堯舜を非とせず、かの堯

舜の道を假り流れて燕噲子之となるものを非とするなり。未だ曾て湯武を非とせず、かの湯武の道を假り白公となるものを罪するなり。未だ曾て孔子を毀らず、孔子の道を假り流れて子夏子張の賤儒となるものを非とするなりといひ、焦竑は、莊子翼の序に於て、老の莊あるは、猶ほ孔の孟あるが如きなり。老子は孔子と時を同うし、莊子は又孟子と時を同うす、孔孟は未だ嘗て老莊を攻めざるなり、世の學者、顧みて少しも置かず、豈に孔孟は有に詳かにして老子は無に詳かなるを以て、其同じからざるを疑へるものか。孔孟は無を言はざるに非ず、無は即ち有に寓せり。孔孟は姑らく世の明かなるものに因つて、之を導く、謂ゆる下學して上達するものなり、老莊その時に生れて、かの孔孟の學を爲むるもの、有に局して達するもの寡きを見るや、必ず無に通じて後に有に用ふべしと爲し、孔孟の畧すところを取りて之を詳かにせば、その孔孟の及ばざるところを助けむ。仁義禮樂の如きは、孔孟すでに之を丁寧にせり、吾また贅言を要せず、これ老莊の意なり。然らざれば、孔子易に係けて曰く、形而上者謂之道、形而下者謂之器、と、道器を有無となし、上下を微々となすは、その詞の異なるのみ。その詞の異なるを以て、その意の異ならざるを害するは、これ之を攻む

るもの、病なり、老莊を病ましむるに足らず、孔孟老莊は、學者その性を離れむことを閔ひ、これが書を爲りて、之を覺すのみ。その性に反することを知らずして、異同の辨に曉々たるは、予が知るところに非ずといへり。若しかくの如き論理を許容せむか、苟くも論究の對象にして、同一なれば、その方法と結論とに關せず、すべて相戻ること無しと謂ひ得べく、斷じて學問的立言に非ず、均しく獸なりといひて、馬と鹿とを混じ均しく人なりといひて、厲と西施とを別たざるもの、古今常に見るところの通弊なり。

老子は、その究極に於て、勿論出世間的なりしと雖も、全く世界と絶縁せず、多くの場合に於て、社會の改良に論及せり。然れども、莊子に至りては、更に一步を進め、人類生存の目的に對して疑問を着け、死生變化の無常迅速に想到し、現實界を以て全く無意識に出でたる一場の幻夢に外ならずとなし、佛家の禪に類似せる見獨心齋等、整身平氣の方法を講じ、勉めて煩惱を去り、羈絆を脱し、化に應じ、物を忘れ、是非を一にし、差別を無にし、無何有の郷に彷徨し、廣莫の野に逍遙し、以て造化の秘奧に參透せむとす。之を支那上古思想界の一大進境として、毫も不可なきを覺えずむばあら

ず。之を要するに、その哲學は、究極に於て、宗教的となり、詩歌的となり、一種の特色を發揮せり。而して、獨絶の筆致、善く這般の内容と相協ふものあり。その文學的なること、先秦諸子中、ひとり第一を推す。太史公、之を稱して、善く書を屬し、辭を離け、事を指し、情を類し、洸洋自ら恣にし、以て己に適す。王公大人より、之を器とすること能はずといへるは、頗る中れり。

莊子の書、本と五十三篇、十餘萬言といひしが、今存するものは、三十三篇にして、晋の郭象、注を作りしとき、刪定せしものなりといふ。その内、内篇七篇、外篇十五篇、雜篇十一篇、内篇は、疑もなく、斷じて莊子の手筆に係り、篇名皆三字、いづれも深義あり、且つ整然たる論理上の聯絡を存して開展せり。然れども、他の二篇中、間ま其偽を疑ふべきものなきに非ず。蘇東坡は、盜跖漁父、眞に孔子を詆るものゝ如し、讓王、說劍に至りては、皆淺陋にして道に入らずといひ、この四篇を去り、寓言の終を以て列禦寇の篇に合せむとし、羅勉は、刻意繕性、亦た淺膚なりといひ、定めて二十八篇となせり。次に鄭瑗は、古史云ふ、讓王、盜跖、說劍の諸篇は、皆後人の剽入なりと。今その文字體裁を考ふれば、信に然りとなす。盜跖の文の如きは、惟だに先秦に類せざるのみならず、亦

た西漢の文字に類せず。然れども、太史公以前、之あるときは、曉るべからざるものなり。馬蹄胠篋の如きは、文意亦た凡近なり。逍遙遊、大宗師の諸篇に視ぶれば、殊に相伴しからずとなす。竊かに謂ふに、内七篇は、莊子の本書なり、外雜等二十六篇、或は其徒の述ぶるところを附するならむか。然れども、質し據るべき者なし。大抵莊列の書は、一手の爲すところに非ず。列子尤も襍はれりといへり。然れども、漁父一篇の中、名言まことに少からず。就中眞を論ずる一段の如きは、到底凡手の辨ずべきところに非ず。たとひ、筆力や、弱く、元氣振はざるに似たるものありと雖も、直に之を盜跖、說劍の類と同一視すべからず。如上の諸篇、郭象特に一字の注脚を着けず、又時に之あるも、象の言に非ざるに似たり、もしくは、象、すでに疑を存して然るものか。

あらゆる支那文學の中、天才の作品として、最も俊秀を推すべきは、莊子の書と李白の詩とあるのみ。天下の書、汗牛充棟、以て其譬を爲すに足らずと雖も、その中、或は終身之を見ず、以て憾となさざるものあり、唯だ如上の兩書のみは、遂に之を讀まざるを得ざるのみならず、當に其遲きを憾むべきものなり。何となれば、到底尋常家數に於て求むべからざるものあればなり。莊子の高さこと、かくの如く、之を讀むや、固

より易からず。林西仲かつて曰く、莊子は、當に貝を観るの法を以て之を讀むべし、之を正視すれば白に似、之を側視すれば紫に似、之を睨視すれば綠に似たり。究竟どもに本色に非ず。纔に見るところあり、便ち以て其眞を得たりとなすも、その處あるなし。と、こゝに於てか、後世儒家に拘泥せる輕才小豎の徒、之を呼んで、一種の詭道となすに拘らず、多少眼識あるものは、その文辭の雋妙を否定せず、却つて、往々にして、之を儒に牽強して、百方回護せむとす、豈に偉ならずといはむや。

莊子は、思想と詞藻とに於て、ともに豊富にして、哲理的抽象的談論を醇化して詩歌的具體的事實となさむとする傾向あり。その材を擇ぶや、極めて自由にして、如何なる猥瑣微細の物と雖も、一たび其筆に上れば、一種の妙致を發揮し、土砂も黄金となり、襤褸も錦繡となる。莊子は孟子とともに、戰國の氣習を受けしを以て、英俊豪邁の氣、自ら冒すべからざるものあるが上に、激越なる感情を發露して、毫も顧藉せず、豎説横論、しかも痛言快語、決して鋒鏘を藏することなく、兩者頗る相似たりと雖も、その人種的特色と南方の天然とは、莊子をして、孟子よりも、なほ一層文學的ならしめき。蓋し莊子は、極端より極端に馳する者にして、一たび大を説けば、北溟に魚あり、

その名を鯤となす、鯤の大、その幾千里なるを知らざるなり。化して鳥となる、その名を鵬となす、鵬の背、その幾千里なるを知らざるなり。その翼、垂天の雲の若し。この鳥や、海運すれば、將に南冥に徙らむとす。南冥は天池なり。齊諧は怪を志るものなり。諧の言に曰く、鵬の南冥に徙るや、水撃つこと三千里、扶搖に搏つて上るもの九萬里、去るに六月の息を以てせしものなり」といひ、飜つて一たび小を説けば、蝸の左角に國するものあり、觸氏といふ、蝸の右角に國するものあり、蠻氏といふ。時に相與に地を争つて戦ひ、伏屍數萬、北ぐるを逐ふこと旬有五日にして反へるといへり。然れども、その慣用の手段、最も得意とするところは、實に擬人法に在り。その一例を擧ぐれば、南海の帝を儵となし、北海の帝を忽となし、中央の帝を渾沌となす。儵と忽と、渾沌の地に相遇ふ、渾沌之を待つこと甚だ善し、儵と忽と、渾沌の徳に報ぜむことを謀る、曰く、人皆七竅あり、以て視聽食息すと、これ獨り此なし、試に之を鑿たむと、日に一竅を鑿ち、七日にして渾沌死すといへるが如し。次に又形容の妙を極めしは、風を描き唾を叙せし諸條に於て、最も明晰なり、之を要するに、莊子の筆は、殆んど萬能といふべく、その向ふところ、一として可ならざるなく、滑稽諧謔、自ら恣にすと雖も、その底、

無限の熱血と痛涙とあり、故を以て、最も善く人を動かす、その極、手の舞ひ、足の踏むところを知らず、宛として仙游羽化の感あらしむ。

かくの如くして、莊子は其想に於てのみならず、其文に於ても亦た、孟子と全く相反し、あくまで南方的なり。而して構成變化の妙、むしろ過ぐるものあり。その字面をいへば、平易醇雅なるあり、生硬奇割なるあり、その句法をいへば、徑捷雋爽なるあり、艱澁糾纏なるあり、その段落をいへば、斬截疎明なるあり、曼衍錯綜なるあり、正に千古の奇を極むといふべし。莊子の卷末に附載する天下篇は、たしかに其徒の筆に成りし者にして、莊子前後に於ける支那學術界の趨勢を論斷し、兼ねて莊子の位地を説明せしものにして、大に參核に資すべし。その中、莊子の文を評して曰く「謬悠の説、荒唐の言、無端崖の辭を以て、時に恣縱して儻せず、簡を以て之を見ざるなり。天下を以て、沈濁與に莊語すべからずと爲し、卮言を以て曼衍となし、重言を以て真となし、寓言を以て、廣となし、獨り天地精神と往來して、萬物に敖倪せず、是非を譴めず、以て世俗と處る。その書、瓌偉と雖も、而かも連抃傷なきなり、その辭、參差と雖も、而かも詭觀るべし」と。次に莊子の注を作りし郭象は、其書を觀れば、超然として自ら以爲へ

らく、すでに當に崑崙を経て太虛を涉り、惚恍の庭に遊ぶべしと。復た貪婪の人、進躁の士と雖も、暫くその餘芳を攪り、その溢流を味へば、彷彿たるその音影、なほ曠然として、忘形自得の懷あるに足る。况んや、その遠情を探りて、永年を玩ぶものをや。遂に綿邈清暇、塵埃を去離して、冥極に返るといひ、蔡執中は、その言、會なしと雖も、獨り應じ、無有を超ゆる若くして、獨り存す。その狂怪變幻、能く人をして骨驚き神悚せしむ。詎んぞ文章の大觀と稱せざらむや」といひ、胡應麟は、莊子の文、絶奇にして理致玄妙なり。之を讀めば、未だ手の舞ひ、足の踏み、心曠く神怡ばざるものあらず。故に古今の才士、その説に沈冥せざるはなし。第だ以て空青水碧、物外の奇觀となして可なり。必ず説を作りて、之を文らば、これ火を以て火を濟ふなり」といへり。

こゝに注意すべき一事あり、後世南方思潮と山東方士の説と、極めて奇異なる化學的抱合をなし、遂に道教を確立せしめ、形解飛昇の説、鍊丹葆形の術を唱ふるに至りしは、主として、莊子の文の奇幻荒怪に起因するものにして、その具體的に形容して、聖人の表彰となせし藐姑射の神人の如きは、庸俗の徒に誤解せられ、やがて長生不老の神仙とはなれるなり。

(一六) 南方思潮の餘派

老子一たび無爲恬淡を唱へしより、同時に之に歸するもの、文子あり、關尹子あり、その書、今ともに之を傳ふ。

漢書藝文志に、文子九篇といひ、その注に、老子の弟子、孔子と時を並ぶ、而して、周の平王問ふと稱す、依託せしものに似たりといひ、唐書には、魏の李暹注して十二篇となすといへり、姓は辛、名は鉞、文子は其字、葵丘濮上の人、號して計然といふ、范蠡の師なりと稱すれども、信ずべからず、文子の書、原篇以下十二篇は、全く老子の注脚なりと雖も、その書の性質及び價值は、柳宗元の論に盡く、曰く、その書を考ふるに、蓋し駁書なり、凡そ孟子數家、皆剽竊せらる、文詞又牙、相抵して合はず、人之を損益せしか、或は聚斂してこの書をなせしかと、班固すでに依託を疑ふ、その歴史的價值に乏しきや、言を俟たず。

關尹子は、老子に書を作ること勸めし、關令尹喜なり、字は公度、秦の産終南樓觀は、その故居なりといふ、漢書藝文志に、關尹子九篇とあれども、隋書唐書に見えざるを以て、その散佚、一日の故に非ざるを知るべし、南宋の時、徐藏子禮、承嘉孫定の家に

得たりと稱すれども、定は如何にして之を傳へしか、宋明の學者、萬口一齊、その偽なることを論斷せり、四庫全書提要には、黃庭堅の詩、すでに關尹子の語を用ふ、その書、或は唐五代の方士、文章を解するもの、爲るところならむかといへり、關尹子の書、萬有神教の議論を交へ、佛教思想の影響あるもの、如く、前言殆んど眞に庶幾し、その文は峻潔なれども、巧刻に流れて、古文に遠し。

墨子と並稱せらるゝ、楊子、亦た南方思潮の一分派なり、名は朱、字は子居、その事蹟、全く徵すべきものなけれど、孔老墨諸子の後に在りしといふは、實に近し、その說、老子の天地不仁より脱化し、仍つて爲我を執し、唯だ戮力を要せざる應分の快樂を享受すべきを主張し、兼ねて社會の成立を否定せり、その書、今傳らず、唯だ列子に見えたる楊朱の一篇によりて、其說の一斑を知るのみ、然れども、是れ亦た自筆に非ざることを勿論にして、或は漢代に出でしと思はるゝものあり、蓋し漢代一般の好尚は、物質的饒富の中、實感的快樂を追求するに汲々として、自ら之に冥契せしやの疑問なきに非ず、且つ文字上より觀るも、時に之を證すべきものあればなり、かくの如くして、こゝに議論するの價值なきを疑はず。

春秋の末より戰國に至るまで、老子の學説は、大に南方に行はれ、其徒を出すこと頗る多かりき。漢書藝文志に據れば、前に記せし關尹、文、列、莊諸子の外に、蜎子十三篇、老成子十八篇、長盧子九篇、王狄一篇、公子牟四篇、田子二十五篇、老萊子十六篇、黔婁子四篇、宮孫子二篇、鶡冠子一篇あり。大抵齊楚の隱士にして、一時に名ありしもの、但し鶡冠子の外、其書すべて傳らず。

鶡冠子は楚人、その姓氏年代、ともに知るべからず、或は孟莊諸子と時を同うすといへり。深山に居り、常に鶡鳥の羽を以て冠となす、故に此名あり。その書、傳ふるもの十九篇、賈誼の鵬賦、その世兵篇と語句相似たるものあり、學者或は誼之を書中に取りしが、故に然りとなす。柳宗元、之を駁して曰く、唯だ誼の引用せしところのみを美となす、餘は可なるものなし。吾、意ふに、好事者、僞つて其書を爲り、反つて鵬賦を用ひ、以て之を文飾す、誼之を取るあるに非ざること決せり、と。然れども、同時の韓愈が、その博選篇、四稽五至の説、當れり。其人をして時に遇ひ、其道を援つて國家に施さしむれば、功德豈に少からむや。學問篇に、賤は用ふるところなきに生ず、中流船を失へば、一瓠千金」と稱するもの、余三たび其詞を讀んで、之を悲むといへる如く、時に名言なきに非ず。試にその思想を尋釋するに、道家の流を汲むと稱すれども、太だ醇ならず、或は儒家に近く、或は法家、兵家に似たるものあり、故に韓愈は、その詞、黃老刑名を雜ゆといひ、陸佃の序、その道、躒駁、著書は、はじめ黃老に本づき、末流刑名に行くといへり。或は是れ、列管諸子の如く、代を趁うて漸次附益されしものに非ざるか。而して、忌憚なく之をいへば、文學上、哲學上、ともに太だ價值あるものに非ず。

道家の末流、黃帝に托して、老子の説を述ぶるものあり。黃帝四經四篇、黃帝銘六篇、黃帝君臣十篇、雜黃帝五十八篇、力牧二十二篇、孫子十六篇あり。伊尹、太公等、權謀を重んじ、一時隱居道を樂しむ等の諸點に於て、聊か緣故あるを以て、又假托せらる。伊尹五十一篇、太公二百三十七篇、辛甲二十九篇等あり。ともに漢書藝文志に見ゆれども、今皆書なく、纔に其名を存するのみ。

(一七) 屈原

莊子と相待ち、秀雋優雅の神趣を發揮し、南方文學を重からしめしものを屈原となす。否、屈原は、周末文學に於ける散文の發達に對し、支那律語の新生面を開きしといふ點に於て、偉大なる功績を留むるものなり。これより先、老列莊等、有力なる思索家は、南方附近の産にして、純粹の南人に非ず、然らば、屈原は兼ねて又荆楚の地より出てたる第一の文學者なり。

屈原、名は平、楚の同姓にして、懷王の左徒たり。博聞彊志、治亂に明かに、辭令に嫻ひ、入つては王と國事を圖議して號令を出し、出ては賓客に接遇して諸侯に應對す。王甚だ之を重んず。上官大夫、之と列を同らし、寵を争ひ、心に其能を害す。懷王、原をして憲令を造爲せしむ。原、草稿を屬して、未だ定めず。上官大夫、見て之を奪はむとせしも與へず。因つて、讒に遇うて疎んぜらる。こゝに於て、王聽の聰なくして、讒諂の明を蔽ひ、邪曲の公を害し、方正の容れられざるを疾み、憂愁幽思して、離騷を作りぬ。その後、秦、張儀をして楚に入らしめ、數ば王を給いて、其國を削弱す。尋いて、王、張儀を得て甘心せむとし、而かも、寵姬鄭袖に聽いて之を釋るす。時に原、すてに疎んぜられて、復

た位に在らず、齊に使用して反るや、王を諫めて曰く、何ぞ張儀を殺さざると。王悔みて追へども及ばず。次いで後、諸侯ともに楚を撃ち、大に之を敗る。すてにして、秦の昭王、楚と婚し、王と會せむとす。原諫むれども用ひず。王、秦に往いて囚へられ、遂に其地に客死し、長子頃襄王立つ。この間、原放流さるゝと雖も、常に楚國を眷顧し、心を懷王に繫けて、反すを欲すを忘れず。而かも又讒せられ、江南に遷さるゝや、乃ち懷沙の賦を作り、石を懷いて、遂に自ら汨羅に投じて死す。これより後、楚日に以て削られ、數十年にして、竟に秦の滅ぼすところとなりぬ。

原の人となり、あくまで純潔にして、到底この汚濁の世に居るに堪へず、憂愁の極、自殺以て其命を了す。彼は支那に於ける第一の厭世詩人なり。その多情にして多恨なるや、まことに、南人たるに負かず。當時戰國の世、一たび志を得ざれば、國を視ること弊履の如く、君を視ること路人の如く、之を去つて毫も顧みざるのみならず、往々にして、敵國に入る。屈原の哀怨、君に疎んぜられて、然かも忘るゝ能はざりしもの、一は同姓たるの故を以てすと雖も、之を一貫して、その至情に本づくや、疑なく、彼の境遇、むしろ憐れむべく、哭すべきものなしと云はむや。

その作に係るもの、離騷を首として、九歌以下、二十五篇の多きに上れり。試に先づ離騷の内容を略述せむに、己の出生閱歴より筆を起し、次いで、君に疎んぜられ、黨人に妨げられ、その姊たる女嬃には清白忠貞以て世に立ち難きを諫められ、朝と家とに於て、すでに容れられず、乃ち去つて、古しへの聖主たる虞舜の遺墳を弔ひ、今昔を低徊し、身世の感、うたゝ切なるものあり、その極、遠く神魂を浮世の外なる靈境に馳せむとせしも、好個の幻境、久しく駐らず、この身、依然として、塵間に流落しつゝあるを自覺するや、天上天下、すでに身を容るゝところなく、悵然自ら堪ふる能はず。こゝに於て、靈氣は、九州皆以て往くべしといひ、巫咸は、此を去つて別に君を求め、以て其道を行ふべしといふ。然れども、君や遂に去るべからず、乃ち前者の教に従ひ、車を備へて、征途に上り、朝に輒を天津に發し、夕に西極に至り、赤水を涉りて、西皇に迎へられ、九歌を奏して、韶を舞ふ。この刹那、一たび舊郷を回視すれば、人馬虺隤、又進むに懶し。あゝ、西海到る能はず、愉樂終る能はず、而して、遠遊自疏の舉、徒に虚願となる。すべて是れ忠君愛國の心、鬱結して解けず、死を除くの外、第二條の路なきなり。疑もなく、屈原は、この現世を厭離し、理想界を翹望したりと雖も、その性情、あくまで忠孝、夢寐

その君を忘れざりしが故に、目的を達せず、憐れむべし。懷疑の深淵に沈み、煩懊の烈焰に其身を焚き盡くされ、やがて自ら死を望むに至りしものなり。

その他の諸篇も、大抵同一の内容、もしくは思想傾動を以て形成されし者にして、之を潤色する爲に、南方の天然と神話とを借ひ來れり。王逸之を論じて、離騷の文、詩に依つて興を取り、類を引いて、譬喩す。故に善鳥香草、以て忠貞に配し、惡禽臭物、以て讒佞に比し、靈修美人、以て君に擬し、宓妃佚女、以て賢臣に譬へ、虬龍鸞鳳、以て君子に托し、飄風雲霓、以て小人となす、その詞、溫にして雅、その義、峻にして明、凡そ百の君子、その清高を慕ひ、その文采を嘉し、その不遇を哀み、その患を閔まざるなしといひしもの、殆んど盡せりといふべし。

かくの如き感懐と、かくの如き材料とを以て、之を如何にせしかといふに、屈原は南方特有の詩形たる辭賦の一體を以て、之を表顯せり。班固は、かつて曰く、歌はずして誦す、之を賦といふ。高に登りて能く賦す、以て大夫たるべし。言物に感じて端を造る、材知深美、興に事を圖るべきが故に、以て、列大夫となすべきなり。古しへは、諸侯卿大夫、鄰國に交接し、微言を以て相感じ、揖讓の時に當るや、必ず詩を稱し、以て其志を

論す蓋し以て賢不肖を別ち、而して盛衰を觀るなり。故に孔子曰く、詩を學ばざれば、以て言なきなり」と。春秋の後、周道寢く壞れ、聘門の歌詠、列國に行はれず、詩を學ぶの士、逸して布衣に在り、而して賢人志を失ふの賦作る。大儒孫卿及び楚臣屈原、纒に離り、國を憂へ、皆賦を作り、以て風す、咸な惻隱古詩の義なり」と。これ詩衰へて賦作ると爲すものにして、時間的承接の跡を表示するの外、未だ以て十分に、この詩形の發展を説明するに足らず。蓋し南方の賦は、北方の詩に對して、何等の關係なく、全く別様の發達をなせしものにして、主として、語音の異なるに起因せしものならむ。論語、莊子に見えたる楚狂接輿、鳳兮の吟は、實に南方辭賦の原始的體制を具ふるものなり。前に述べし如く、荀卿は晩年楚の地に在り、その土音を學んで、數篇の賦を作りしが、時は、屈原の後に在り、且つ其作は、詩的價值に乏しく、殆んど取るに足らず。おもふに、屈原は、南方の詩形を改善し、且つ之を大成せしものならむ。宋景文が、離騷は詞賦の祖なり、後人之を爲す、至方矩を加ふる能はず、至圓規を過ぐる能はざるが如しといへるは、屈原が作詩の伎倆を評し、盡したるものといふべく、その體制の自由にして、韻律の秀雋なる、決して北人の夢想し得べきところに非ず。之を要するに、南賦の北

詩に於けるは、猶ほ道家の儒家に於けると一般、その時を以てすれば、やゝ後れたるも、斷じて彼の補助を受けず、却つて對抗的に發展したる者なり、而して、思想上及び文學上に於ける南北の調和は、闔國統一の大勢を待つて、實に漢代に成れりき。

屈原の作、之を總評して、婉麗典贍、而かも、侈靡纖弱に失せず、後世ともに及ぶなし。司馬遷曰く、國風は色を好むも淫せず、小雅は怨誹すれども亂れず、離騷の如きは、之を兼ねたるものといふべし。上は帝嚳を稱し、下は齊桓を道ひ、中ごろに湯武を述べ、以て世事を刺り、道德の廢崇、治亂の條貫を明かにし、畢く見えざるはなく、その文は約にして、その辭は微、その志は潔にして、その行は廉、その文を稱するは小にして、その指は極めて大、類を擧ぐることに適くして、義を見ることに遠し、その志潔、故にその物を稱する芳、その行廉、故に死して容れられず、自ら滓汚泥の中に疎濯し、濁穢に蟬脱し、以て塵埃の外に浮游し、世の滋垢を獲ず、儼然として泥して滓せざるもの、この志を推すに、日月と光を争ふと雖も可なり」と。之を要するに、屈原の作るところは、材料すでに豊富にして、思想極めて純潔、支那の律語は、こゝに至つて、真正なる意義を有することゝなれり。その價值詩經に比して、むしろ上にありといふも、不可なし。

(一八) 宋玉等

屈原の徒に、宋玉、景差、唐勒等あり。景差の賦は、早くより散佚せしが、他の二人は、漢書藝文志に、唐勒賦四篇、宋玉賦十六篇とあり。

宋玉、字は子淵、楚の人、仕へて大夫となる。二三の逸話、劉向新序に見ゆ。單行の集は傳はらざれども、その賦は楚辭文選等に載す。その楚辭に見ゆる者は、九辨と招魂とにして、前者は、その師屈原が忠にして放逐されしを悼むに由つて作り、その辭悲秋を藉りて興を起し、幽凄悲傷、殆んど絶えむとするを疑ふ。後者も、亦た略ぼ同義にして、屈子の愁恨、山澤に散漫し、魂魄放佚、その命將に落ちむとする故に、其魂を招いて其壽を延べしめむことを禱るの意なり。その他、文選にのみ見ゆるものは、風賦、高唐賦、神女賦、登徒子好色賦にして、他に笛賦、釣賦、舞賦、諷賦、小言賦等も亦た其作なりといふ。又對楚王問と題する小品文は、今に人口に膾炙するものにして、下里巴人、陽春白雪の喩は、數ば襲用するものなり。要するに、宋玉の作は、特に甚しき散佚なきものゝ如し、唐勒の賦、今存せず、その人、亦た考ふべからず。

さばれ、司馬遷が、屈原すでに死せし後、楚に宋玉、唐勒、景差の徒あり、皆辭を好み、賦

を以て稱せらる。然れども、皆屈原の從容辭令を祖とするのみ、終に敢て直諫するものなしといへる如く、宋玉以下は、むしろ幫間的文士といふべきものにして、漢代の枚乘、司馬相如輩と頗る相似て、誠に之を以て人主の眷顧を求めむとするのみ、抑も屈原の美人を詠せしは、これを倩ひ來りて、君に譬へしものなれども、宋玉以下は、直に美人その物を賦詠せり。彼等は、熱情と想像力とに於て、すでに屈原に及ばず、實は甚だ取るに足らざるに似たれども、道德的意義を有する諷諭を離れ、細心なる修辭の技工を以て、その詞彩を煥發せしは、辭賦をして貴族的文學となし、之を後世に盛行せしむるに有力なる原因となりしものにして、或る意味に於ては、亦た進歩といふべきに似たれども、賦は、こゝに截然たる二途に分つに至り、漸く頽廢靡爛に趁くを避け得ざりき。漢代文士の賦に二種あり。一は自我的にして己の感懷を述ぶるを主とし、一は對他的にして他の怡樂に供せむとす。前者は殊に名づけて騷といひ、純然たる辭賦の外に驅逐されし形跡あり、後者ひとり賦の稱を擅にす。かくの如くして、抒情詩たるべき賦は、傳ふべきもの頗る寥々、是れ豈に宋玉輩の罪ならずといはむや。

漢の劉向は、屈原の作及び後世思慕するもの、辭、即ち宋玉の九辨、招魂と、作者の知られざる大招惜誓、淮南小山の招隱士、東方朔の七諫、嚴忌の哀時命、王褒の九思を合せて十五卷となし、之を名づけて楚辭といひ、その後、自ら屈原を追念して、九歎を作り、加へて、十六卷となせり。次に後漢の王逸は、屈原と土を同うし、國を同うしたるにより、又頌一篇を作り、題して九思といひ、楚辭の章句を作り、合せて十七卷となせり。今傳ふるもの、即ち是れなり。然れども、林西仲が、大約屈原の志なくして、其文を襲ふ、猶ほ哀しからずして、哭し、病まずして、吟ず。詞は工なりと雖も、其質に非ず。甚しきは、莽の大夫の反離騷、後口狂詆するを以て、亦た内に列するに至る、豈に辱の極に非ずや、といへるもの、聊か卓見を推すべきに似たるものあり。一卷の楚辭、ひとり屈原の作を取らば足らむのみ、他は狗尾續貂、遂に其値を認めざるなり。

(下)

(一九) 中部思潮の起原

北には鄒魯、南には荆楚、截然相異なる這個の二大思潮は、均しく時勢の紛擾騷亂に激して起りたるものにして、後世に至れば、自然の勢、愈よ實際社會に切實なれども、要するに、ともに、各自の謂ゆる道徳を以て社會を改善せむとするものなるが故に、當時に於ては、むしろ緩慢迂濶に似たるものあり、その學者、一も王侯に用ひられしものあらざりき。これより先、犀利なる眼光を以て、専ら國家經濟の方面を觀察し、堂々たる政治上の大經綸をなして成功せしものあり、中部思想の開發者たる管仲、即ち是れなり。

周の興るとき、武王を輔佐して、大功を成せしもの、亂臣十人と稱すれども、太公望、周公旦の二人に及ぶものあらず。一は國舅として、一は叔父として、相並んで成王の朝に立ち、ともに大封を受けしと雖も、兩者は、多くの點に於て頗る異なる特色あり。均しく是れ、有力なる古代君主の風度を學びしものならむと雖も、太公は豪傑的、面目を暴露し、兵法に長じ、權謀を用ひしに反し、周公は、聖人的態度を保持し、道徳を

以て政治の標準となせり。故に太公の後たる魯とは、國風民俗甚しき徑庭を存せり。史記に下の如き一事柄を載す。武王すてに商を平げて、天下に王たり。師尚父を齊の營丘に封ず。東して國に就く。道に宿して、行くこと遅し。逆旅の人曰く吾聞く、時は得がたく失ひ易しと。客寢ぬること甚だ安らかなり。殆んど國に就くものに非ざるなりと。太公之を聞いて、夜衣して行き黎明國に至る。萊侯來り伐ち、之と營丘を争ふ。太公國に至り、政を修め、其俗に因て、其禮を簡にし、商工の業を通じ、魚鹽の利を便にし、人民多く齊に歸す。五月にして、政を周公に報ず。周公曰く、何ぞ疾きや。曰く、吾、その君臣の禮を簡にして、其俗の爲に従ふなりと。魯公伯禽(周公の子)の初めて封を受けて魯に之くや、三年にして後、政を周公に報ず。周公曰く、何ぞ遅きや。伯禽曰く、その俗を變じて、その禮を革め、喪は三年にして之を除く。故に遅しと。周公乃ち嘆じて曰く、嗚呼、魯は後世それ北面して齊に事へむかと。これ人口に膾炙する單なる話柄なれども、親親上恩は魯國施政の主義にして、尊賢上功は齊國立法の精神たることを表示せしものと見れば、自ら別殊の興趣なきに非ず。這般の歴史的感化によりて、魯の學者は道德説を持し、齊に於ては功利説の起るを見るに至れりき。

然れども、齊は東方魚鹽の國にして、荆楚なほ夷を以て斥けられし當時に在りては、唯一の富源地として知られ、因つて自然に經濟思想を養成せしを忘るべからず。管仲の齊に出でしや、固より偶然ならず。

時勢の窮迫は、管仲をして、其説を出さしめ、之を實行せむことを促したり。時は春秋の初期に際し、周公の制度、破壊されしと同時に、國家組織を改造するの必要を生じたり。之を一國の中に就いて考ふるに、古しへは、單醇なる道德主義を以て構成せられ、國家の公と個人の私と、その間、截然たる區劃なく、諸般の事項、すべて簡易なりしと雖も、かつて謂へる如く、人口の増殖と生計の困難とは、道德主義の政治をして、漸次に無効とならしめしが上に、従前の如くしては、君上の威信、實は甚だ振はず。到底主權者たるの勞力を維持するを得ず、革新の必要、焦眉の急に迫り來れり。翻つて又、他國との關係上より立論すれば、中央集權の瓦解は、群雄の割據となり、大は小を兼ね、強は弱を呑み、富國強兵は第一に講ぜざるべからざる重大なる專務となれり。こゝに於てか、管仲は齊より出て、桓公を佐けて、覇者政治を始むるに至れりしなり。

覇者政治は、王者政治と法治政治との過渡といふべく、換言すれば、道德主義の政

治と法治主義の政治との連鎖にして、極めて重要な現象なれども、詮し來れば、一時を彌縫するものに過ぎず。桓公及び管仲は、天下の統一を欲せしならむと雖も、當時諸侯の數なほ頗る多くして、事情之を許さず、且つ表面に於ては、周室を尊ぶの風依然として儼存するが故に、短日月の間に、その目的を達すること能はざるは明白なる事實にして、止むを得ず、自國の富強を恃み、王室を尊ぶを名とし、夷狄を攘ふを實とし、兎も角も、一時諸侯を命令せしものなり。彼等はその子孫に至りては、必ず目的を達せむことを囑望せしならむと雖も、終に其人を得ず、やがて全く一時的の者となり、その後、或る時の間、諸侯を糾合するものを稱して、霸といへりき。或は覇者の起原を論じて、遠く夏殷の間に在りとなすものあれども、太古は遼遠にして探究し得べからざるのみならず、又その必要を認めざるなり。

先秦の思想家は、すべて社會維持の觀念に本づきしものなれども、就中、こゝに謂ゆる中部思潮は、富國強兵を主としたるを以ての故に、容易に他と調和融會さるべき性質を有せり。これ其變を極盡し、やがて千古の鉅觀を現出せし所以のみ。

(二〇) 管子

管仲の一生は、經世家の閱歷にして、こゝに詳述するは、むしろ煩に過ぐ。その傳は史記に見え、左傳國語以下、說苑新序の類を併觀すれば、足るべきを以て、全く省略に従ふ。次に、その理想及び主義を尋釋せむに、個人の幸福と國家の健全とを以て、その歸宿となし、國民は社會の一員として、必ずその本分を盡くすを要すといふに在り。而して、管仲の特色とするところは、敢て強制的に道德の實行を命令せず、主權者は、國民をして容易に道德を實行せしむべき相當の準備をなさざるべからずといふの一事、是れのみ。かくの如きは、全く經濟上の見解より來りしものにして、その考察するところに因れば、國民が社會を構成し、道德を實行し、相互の安寧と秩序とを保ち得るは、生活狀態の或る程度以内に限られたるものにして、一たびその限界を超ゆれば、制裁は全く効力なく、本來の獸性を以て互に噬吞するを禁じ得ざるものなり。故に國民をして道德を實行せしめむと欲せば、少くとも、或る程度まで、之を富ましめざるべからず。こゝに於てか、倉廩實ちて禮節を知り、衣食足つて榮辱を知るといへるは、管仲の根本主義たるのみならず、又實に千古不磨の格言にして、政治經濟

に關する細微なる議論は、すべて此より續釋せしものなり。その説くところ、甚だ穩妥にして、誤謬は、むしろ極めて少く、現に管仲は、之を以て、諸侯を九合し、天下を一匡するを得たりしなりき。換言すれば、彼は自己の手を以て、その所説の効力を實地に證明せしものなり。若し夫れ、管仲が桓公を佐けて覇をなさしめし時勢上の考察に至りては、傍徑に入るを以て、こゝに贅せず。

その人物徳操に就いては、異論なきに非ざれども、その事業は、漢族の勢力を振興せしものにして、管仲は、實に一代の偉人たるを失はざるものなり。故を以て、孔子の如きは、時に之を難ぜしに拘らず、又その功績を稱歎するに吝ならざりき。今論語に見ゆるものに就いて、その數條を抄すれば、子曰く、桓公、公子糾を殺し、召忽これに死す、管仲死せず、曰く未だ仁ならざるか。子曰く、桓公諸侯を九合するに兵車を以てせず、管仲の力なり、其仁に如かむや、其仁に如かむやといひ、次に子貢曰く、管仲は仁者に非ざるか、桓公、公子糾を殺して死する能はず、又之を相く。子曰く、管仲、桓公を相け、諸侯に覇たらしめ、天下を一匡し、民今に至るまで其賜を受く、管仲を微かつせば、吾は其れ髮を被りて左衽せむ、豈に匹夫匹婦の諒をなすや、自ら溝瀆に經れて之を知

るなきが若くならむやといへり。之に次いで、孟子が自ら管仲に比せらるゝを耻とすといひしは、自己の抱負を明白にせむが爲にして、直に以て管仲その人を譏斥せしものとなすを得ず。韓非の如きは、之を聖人となし、以て無限の敬意を表せり。然れども、予を以て之を見れば、管仲が道德の絶對的價値と強制的命令とを否定し、支那に於ける政治經濟等、諸種實地的學問の開祖となり、大に新思想を發揮し、思想上に少からぬ影響を及ぼせし一事、最も多とすべきなり。

管仲の所説は、勿論時勢の必要に應じて起りしものにして、決して批難すべきものに非ず。予は結論として、趙用賢の言を引抄するを得む。曰く、王者の法、周公より備はれるはなく、善く周公の法を變ずるもの、管子より精なるは無し。何となれば、周の方に興るに當つてや、隆古淳穆の風を去ること未だ遠からず。又后稷公劉の深仁厚澤、數百年培養の久しき、風會すてに開くと雖も、文明猶ほ醇し。周公起つて製作の任に當り、法制の綱繆なる、文物の繁猥なる、種々經綸するところ、犁然として具舉せざるなし。而して、天下の民も亦た、鴻龐淳固の俗を以て憲法著明の端に當る、故にその法密なりと雖も、その服習するもの、亦た能く之に安んじて悖らず。周室の既に衰ふ

るに及びては、諸侯日に干戈を尋ね、謀臣策士、競うて智力を出して、相勝つを務む。苟くも必ず先王の約束に競々として、執つて移らざれば、勢格するところあり、術窮するところあらむ。時を救ふの宜しきに非ず。管子は天下の才なり、豈に其智此に及ばざらむや。故にその初めて桓公を相くるの日に當りて、舊法を審かにし、其善なるものを擇んで之に従ふに過ぎず。その書、牧民、乘馬、幼官、輕重の諸篇の如きは、大抵周官を離れて、以て用を制せず、亦た盡く周官に屬せずして、その變を通ぜり。國を三にして三軍となすものは、伍兩卒旅の舊なり。四列に因つて器用を備ふるものは、兩造兩劑の遺なり。士を選ぶに好學、慈孝を以てし、後に拳勇、股肱に及ぶは、興賢の故典なり。幣を鑄るに、黄金、刀布を用ひ、後に魚鹽、鉞鐵に及ぶは、亦た周法の舊章なり。諸侯服せざれば、吾以て戰ふべく、諸侯服すれば、吾以て仁義を行ふべし。蓋し仲は、周公の意を師として、其故を行はず、これ仲が法を立つる所以の意なり。故に曰く、古今遞に遷り、道時に隨て降り、王伯迭に興り、政治に因て革る。と。周公經制の大に備はるは、蓋し王道の終をなす所以なり。管子能く其常を變じて、其窮を通ずるは、亦た伯道の始めて基する所以、勢の趨くところ、然らざるを得ざるものか。と。之を要するに、管仲の變通

主義は人文進歩の根本的、最大動力たるを失はざるものなり。

管仲の學説を觀るべきものを管子となす。その書、二十四卷、凡そ八十六篇、劉向の叙録に係る。これより先、管子の言は、世に稱せられ、漢初の經世家たる賈誼、晁錯の如きも之を經本とし、司馬遷は、管氏の書を讀むに、詳なるかな、その之を言ふや、といひ、その書、大抵完備したりしが、武帝の世、儒教を標章したる後は、他の申韓等、法術家の書と共に黜けられ、又世に行はれず。漢書藝文志には、之を道家に列し、隋書唐書は、之を法家の首に載せ、その間、すでに殘闕を生ぜしが、宋に至りて、又十篇を失ひ、明に至りて、愈よ甚しく、今傳ふるものは、明の萬曆中、趙用賢の刊行せしものに係る。すでに點竄刪補を經しもの、向の舊に非ざることを、言を俟たず。

管子の書、決して、その自撰に非ず、且つ列子等と同じく、一人の手、一時に成りしものに非ず。今その證左となすべき前人の言二三を舉ぐれば、葉適は、管子は一人の筆に非ず、亦た一時の書に非ず、誰の爲るところなるを知らず、といひ、黃震は、管子の書、誰の集めしものなりやを知らず、乃ち龐雜重複、一人の手に出でざるに似たり。心術、内業等の篇、皆隱語を刻劃して、以て怪をなす、管子貴實の政、安んぞ虚浮の語あらむ。

といひ、紀曉嵐は、多く管仲後の事をいふ、後人附益するもの多し、故に其中往々にして、鄙語ありといひ、日本の物徂徠は、管子の書、雜なり、世の管晏を學ぶもの、群言を哀集し、冒らしむるに管子を以てすといへり、管子の書中、桓公に對する自己の遺言を載せ、又桓公歿後に於ける豎刁、易牙、開方の亂を記し、又毛嬙、西施、天下之美人といひ、吳王好劍といふが如きは、ともに春秋の末、管仲より、はるかに後る、かくの如く、純駁一ならざるものありと雖も、後人の附益せし部分のみを見て、早計にも全體の價値を推論し、蘇老泉の如く、仲の書、またその將に死せむとするや、鮑叔、賓胥無の人と爲りを論じ、且つ各その短を疏す、これ其心に以爲へらく、この數子、皆以て國を托するに足らずと、而して又逆め其將に死せむとするを知れば、其書誕漫、信ずるに足らざるなりといふは、大に宜しからず、この論法を以てせば、莊子も信用するを得ず、何となれば、その篇末に於て死後の事を記したればなり、要するに、先秦の古書、後人の附益に係るもの、往々にして之あるを忘るべからず。

管子の書、八十六篇、古人かつて之を八に分てり、その中、經言の八篇は、全く管仲の手筆に係るといひ、殊に牧民篇の如きは、司馬遷も亦た之を引抄して、仲の説なりと

いひ、又韓非が引きしもの往々にして、經言中の文に符合せり、之に加ふるに、その文簡淨にして、戰國時代の諸家と相類せず、されば、全く前言を信じて、不可なきが如しと雖も、なほ首肯し得ざるものあり、何となれば、その内容、種々の異思想を混じ、或は儒家に似たるあり、或は墨家に似たるあり、或は道家に似たるあり、或は法家に似たるあり、拉雜殊に甚し、但だ之を以て、管仲獨特の思想とすれば、特に論ずるを要せずと雖も、その文致の多少相異なるは、前説を否定するに對して、極めて有力なる一證なり、之を公平に云へば、僅少なる或る部分、勿論識別するを得ざれども、實に管仲の手筆に係り、その餘は、先秦時代、その流派を汲むもの、數輩の手に因つて續撰されしものなるべし。

然れども、經言は、全部管仲の筆に出でずと雖も、春秋の文たるや、何の疑ふところぞ、簡古なるあり、逸宕なるあり、質實なるあり、醇正なるあり、之を一貫して、寛厚の風あつて、殺伐の氣なし、楊忱は、管子論高くして、文奇なり、作者ありと雖も、復た一辭を加ふべかずといひしが、若し此等の諸篇に就いて言ふものとせば、大に中れり、他の諸篇に至りては、特に詳論を値せず、その内容、亦た往々にして卑淺に失するを見る

(二) 管仲以後中部思潮の分派

管仲の學説は當時に於て最も須要なる者にして、その根本は變通主義にあり。然れども、敢て全く舊慣を打破せしに非ずして、實は少しく周官の制度を改善せしのみ。故に改善の一點に重きを置き、新法を案出するを主とすれば、謂ゆる法術家となるべく、なほ幾分舊來の禮文を保存せし點に重きを置けば、儒家と多少の縁故なきに非ず。こゝに於て、管仲の功利説は、後來分れて數派を形成せしが、これも亦た地理的分布をなし、就中、旗幟鮮明なるもの凡そ三。

(一)は、北方思潮、即ち儒教的政治論に援引せしものにして、孟子の如き即ち是れなり。彼は管仲の人物を否斥せしと雖も、時勢の究迫と、齊に遊びて、長く其地に留まりし結果とは、知らず識らずの間、かくの如くなるに至れりしならむ。次に荀子の法治主義に傾きしも、亦た此に洩れず。然れども、最も彰著なるは、尸子にして、義を以て利を均一にせり。尸子は、魯の人、商鞅の師、鞅の秦に敗るや、逃れて蜀に入れりといふ。

(二)は、純粹なる管仲の遺志を其儘に進歩せしめしものにして、換言すれば、醇乎なる中部思潮が自然に膨大せしものに係り、富國強兵を以て主旨となせし謂ゆる法

家、是れなり。之に屬するものは、魏の李悝、秦の商鞅にして、地方の教と立法の功とは、ともに適切なる効果を現出せり。而して、之を地理的位置よりいふも、支那の中部を横絶して漸次西方に及びしを示すものなり。

(三)は、南方思潮との化學的抱合にして、君をして無爲ならしめ、臣をして功利をなさしむるを主とする謂ゆる術家なり。之に屬するものは、韓の申不害にして、その實際的効果、殆んど前者に次ぐ。

以上の諸人、いづれも著述あり、漢書藝文志、雜家に尸子二十篇といひ、法家に李子三十二篇、商君二十九篇、申子六篇、處子九篇、慎子四十二篇といへり。而して今存するもの、申子二篇、商子二十五篇、殘缺甚しと雖も、幸に偽を混ぜず。然れども、文學上よりいへば、之を一概して價值に乏しきが故に、こゝに詳論せず。

北方思潮、中部思潮、南方思潮の三者並流し、前の二者、後の二者は、かくの如く、早くより合一の傾向を現はせしが、戰國の末に至り、如上の三者が、或る意味に於て統合されしことあり。次に述ぶるところの韓非子、即ち是れなり。而して、その反射的作用は、西方文學となりて、又多少の特色を發揮せり。

(一一一) 韓非子

韓非の傳は、猜忌讒謗等、あらゆる世上の迫害に斃れし偉大なる天才の末路を以て、長しへに千古の同情を惹くべきものなり。もと韓の庶公子、李斯とともに荀卿に事ふ。而して、斯自ら非に如かずと以爲へり。その天資英敏、想ふべきなり。非、韓の削弱せらるゝを見、屢ば書を以て韓王安を諫む。韓王用ふる能はず。郁離子に云ふ、韓非子、政を韓になすこと、且さに十年ならむとす。韓の貴人、法に死するもの完家なし。こゝに於てか、韓に曠官多しと、この言、他に傍證なきを以て、取るに足らず。韓非、國を治むるに、その法制を修明し、勢を執つてその臣下を御し、國を富まし、兵を強くし、而して以て人を求め、賢を任ずることを務めず、反つて、浮淫の蠱を擧げて之を功實の上に加ふるを疾み、以爲へらく、儒者は文を用ひて法を亂し、而して俠者は武を以て禁を犯す、寛なるときは、名譽の人を寵し、急なるときは、介冑の士を用ふ、今の養ふところは用ふるところに非ず、用ふるところは養ふところに非ず、廉直の邪枉の臣に容れられざるを悲み、往者得失の變を觀、故に孤憤五蠹、内外儲說、說林、說難等十餘萬言を作る。人或は其書を傳へて、秦に至る。秦の始皇、孤憤五蠹の書を觀て曰く、嗟乎寡人こ

の人を見て、ともに遊ぶを得ば、死すとも恨みずと。李斯曰く、これ韓非著はすところの書なりと。秦因て急に韓を攻む。韓王始は非を用ひず、急なるに及びて、廼ち非を遣し、秦に使せしむ。秦王之を悦べども、未だ信用せず。非因て書を上る。今の韓非子の書、開卷第一に載する初見、秦の一篇、是れなり。曰く、臣聞く、知らずして言はゞ、智ならず、知つて言はざれば、忠ならず。人臣となりて、不忠なれば、死すべく、言つて當らざれば、亦た死すべし。然りと雖も、臣願くは悉く聞くと、ころを言はむ。唯だ大王その罪を裁せよ。もし其說にして成らずとせば、大王臣を斬り、以て國に徇へ、以て王の爲に謀つて忠ならざるものとせよと。秦王漸く之を用ひむとす。李斯、姚賈、之を害ありとし、毀つて曰く、韓非は韓の諸公子なり、今王諸侯を并さむと欲す、非終に韓の爲にして、秦の爲にせず、これ人の情なり、今王用ひず、久しく留めて、之を歸さば、これ自ら患を遺すなり。如かず、過法を以て之を誅せむには、と。秦王以爲へらく、然りと、吏に下して非を治せしむ。李斯人をして非に藥を遺り、自殺せしむ。韓非自ら陳せむと欲して見るを得ず、秦王後に之を悔む、人をして非を赦さしむ。非すでに死せり。然れども、異說あり、戰國策に云ふ、秦王、姚賈を千戸に封じ、上卿となす。韓非之を知つて曰く、賈は梁の

監門の子、梁に盜し、趙に臣となりて、逐はる。今秦かくの如きものを取り、社稷の計を同うす、群臣を勵ます所以に非ざるなりと。王賈を召して之に問ひ、廼ち韓非を誅すと。之に従へば韓非の人となり、頗る陋劣、却つて自家の矛盾を免れず、予は、あくまで前に掲げし史記列傳の云ふところを信ぜむとす。

韓非の著はすところは、即ち世に謂ゆる韓非子なり。その書も、唯だ韓子といひしが、後に唐の韓愈と混同せむことを恐れ、宋より以後、始めて特に非の字を加ふ。漢書隋書唐書並に王應麟の玉海等、皆二十卷と稱し、今の本と同じ。その篇數は漢書藝文志に五十五篇となし、王應麟は五十六篇といへり。今の本は五十五篇にして、漢書と合ふ。その書、散佚なきこと、知るべし。韓非子は、全く自著に係れども、初見秦存韓の二篇は、秦に使せし時作りしものにして、比較上、遲き時代の撰著に係り、他は其前に出でしなり。存韓篇の中段に詔以韓客所上書言韓之未可舉下臣斯の文あり、その下に李斯の上書を載す。これ後人が前後の顛末を明かにせむと欲し、特に挿入附載せし者にして、固より其舊に非ず。少しく議論あるべきは、唯だ此處のみにして、その他は決して剽入を混せず、先秦諸子の中に在りては、最も純粹なる面目を保つものなり。

り。然れども韓非子の本旨は難言以下にして、元と韓王安に示し、治國の法を革めむとせしに出で、その末に、至言忤於耳……願大王執察之の數句あり、以て其證となすべし。

前に云へるが如く、韓非は、春秋以來、漢族の間に發生せし三大思潮を統合せしものなり。試に之を詳説すれば、君主自ら法律を制定し、國家を治め、遍ねく人才を登庸するを以て、第一義となすべしといへるは、主として北方思潮に依傍せしものにして、次に君主の一身、無爲の政をなし、臣下より見て、決して其端を窺ひ知るを得ざる如くせよといふは、南方思潮の影響に外ならず、而して最後に、施法の精神、あくまで嚴峻なるを尙び、毫も寛假する處なきを獎むるは、全く中部思潮の餘派、法治主義を執りしものなり。その統合方法の完と不完とは、姑らく問ふを要せず、予は韓非が、三大思潮に各自特殊の長處あるを認識し、強いて、その價值を甲乙することを爲さず、均しく之を採つて、自己藥籠中の物となせし識見の非凡なるを多とするものなり。韓非が如何にして這般の大規畫に着意し、雋快なる議論を形成せしかを探究するは、實に興味あるのみならず、實に緊要なる問題なるべし。彼は、固より中部地方の

産なりき。その國は、戰國の初に方り、申不害、かつて昭侯に用ひられて、政を行ひ、一時國力を盛にせしところにして、その流風餘韻は、微少なながらも儼存せし地なり。韓非の書中、往々にして、其言を引く。而して彼の師は實に荀卿その人なりき。前にも略說せし如く、申不害は、南方思潮に憑據して、法治主義を標榜せし術家にして、荀卿は、北方思潮を主とし、時勢の必要上、亦た法治主義に近接せしものなり。こゝに於てか、韓非は一身に南北兩思潮を合せ、特に法治主義を以て、その根本主義となせしものならむ。人或は荀卿の門、韓非を出だせしを怪しむものあり、是れ荀卿その人を以て單なる儒家と臆想せしより出づる謬見にして、彼が禮を重視したるの極、期せずして法治主義の範圍内に入りしを悟らざるものなり。李斯の如きも、亦た此の如く、蘇東坡の論あるが故に、人格上の感化を以て之を律すべからず。これに加ふるに、韓非の如きは、古今稀に見るの一大天才、特に綜合の妙を得、明快なる頭腦を以て、彼此の長短を觀破し、その師の持説以外に、一步を踏過したるものにして、その此に至る、何の怪しむ處ぞ。之を總括すれば、時勢的必要、地理的影響、歴史的感化、師承的傳統、個人的性癖を混和し、最も適切なる一大新思想を構成せしものにして、その起因、頗る複雑

なるが故に、先秦時代の思想界に於て、極めて緊要なる位地を占むるのみならず、同時に、あらゆる變化を極盡し、因つて、思想的運動の終局をなせしものにして、固より輕々看過すべからざるなり。

韓非の説は、實際的社會に對して、他の諸家よりも、一層切實なり。その眼中、たゞ國家あるのみ、而かも、明かに必効の結果を期せり。これより先、荀卿は、子思孟軻を攻撃せしが、非は更に一步を進め、儒教及び、その他類似の學派を攻撃したり。彼が人間の醜的方面を考察し、世態の真相を洞視するの眼光は、荀卿に比して、更に犀利なり。すでに利己的觀念を以て、社會の根本的勢力となし、因つて、道德の必効なきを見、制裁力の甚だ微強なるを感じたる極は、自然の勢、法治至上主義を標榜せり。善惡は社會的結果上の判斷にして、賞罰は人爲を以て之に加ふるところの報酬なり。かくの如くして、信賞必罰、實に人意に快なるのみならず、以て勸懲を爲すに足る。これ必然の道なり。こゝに於てか、法律制定の必要を生ず。そも法律は一般人民道德の標準として行爲の善惡を指示すると同時に、預め賞罰を定め、約束をなすものにして、社會の維持に對しては、必要にして且つ十分なるものなり。然れども、人間社會には、避け難